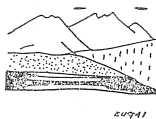


人物を中心とした

文化郷土史

—新潟県—

宮 栄 二



序

新潟県の風土と芸術文化

新潟県（越後・佐渡）の自然風土といえば、まず越後が北陸の大豪雪地帯であることと、佐渡が日本海にうかぶ孤島の一国であったことがあげられると思う。

「長いトンネルを抜けると雪国であった」——川端文学の傑作『雪国』はこの書出しからはじまっているように、古来雪に取材した優れた文学や詩歌は少なくない。

さよふけて かとゆくひとの からかさ に ゆきふるおとの か そけくもあるか （八二）

名著『北越雪譜』の著者鈴木牧之（一七七〇—一八四二）は、越後人の性格を代表する文人の一人だと思いが、その生活信条は忍の一字をもって家を守り、業に励み、その余暇をあげて文芸の道に傾倒した。そしてこの雪国の生活の哀歓を刻銘に描写記録して『北越雪譜』（七巻）を述作し、これを出版したいと念願したのは牧之二十歳の頃であった。幾多の迂余曲折を経て天保八年、ようやく初編が発売になったとき、牧之は既に六十八歳であった。志を起してより四十年、この間、校訂者の変わるたびに雪譜草稿を書き改め、挿図や模



鈴木牧之の木像

人、俳人、画人など来遊した名士はおびただしい。

亀田鵬斎もその一人で、彼は越後で出会った僧良寛の書をみておどろき、その非凡さを賞揚した。名主の生家と跡目を捨てて沙門となり、国上山に俗塵をさけて詩と歌と書に純粹の芸術を求めた良寛は、やはり越後の自然や環境を度外視して語ることはできない。

その芸術が正しく評価され、世に認められるのは封建社会の終末をまたねばならなかった。

明治以後良寛研究はようやく人々の関心をよんだ。秋草道人ははじめて村山半牧の「良寛歌集」を正岡子規に紹介した。夏目漱石もその書求めて「良寛ならではという程の執心」ぶりであった。相馬御風は郷里糸魚川に帰った大正五年から良寛研究に没頭して数々の著述を残した。俳人佐藤耐雪も良寛堂をはじめ、生涯を顕彰事業にささげた。安田靫彦をはじめ、放庵、千鞆、沙伊、青楓、岳陵、その他大観、古径、芋銭、青耶ら、日本画壇の巨匠達は良寛書に傾倒し、物語絵を描いて良寛堂に寄附したり、遺墨の蒐集でも知られている。

唐様書や伝統書流の系統に立つ書道界も良寛書を単に逸格とする見方から次第にその個性や獨創性に眼を向け、良寛書の中に新しい方向を探究するようになった。

次に越佐文芸の歴史的背景をながめてみよう。越後は江戸時代、有力な外様大名が一つもなく、ほとんどが天領、譜代大名領、旗本領で彩られ、かつ一萬石から十萬石を頂点とする小藩が分立錯綜して、ほぼ徳川氏の支配体制下にあった。このことは薩長軍官閥を支柱とする明治新政府のもと、必然的に高位高官に人材登用の路がは

型を作ること五度にも及んでいる。こういうねばり強い忍耐力はおどろくべきものがある。牧之みづから「わが越後のごとく年毎に幾丈の雪を視ば、何の楽き事あらん」、「今年も又雪中に在る事かと雪を悲むは辺郷の寒国に生まれたる不幸といふべし」などと嘆いたその逆境から与えられた精神的たまものにはかならない。

音もなくしんしんと一夜に數十センチも降りつもる冬の夜は、大人は夜職（よなべ）仕事に精を出し、子供は老婆から昔話を聞くのが唯一の楽しみであった。

越後ちぢみのうるわしい民芸織物は人間の技というより、雪国という自然の恩恵がこの夜職の手仕事の中にあらわれ出た工芸品だといえよう。また雪国の山村には幾百もの民話が今に伝えられており、一人で二百話も語る老婆がなお存在することも、雪国が生んだ偉大な生活文学の集積を示すものであろう。（水沢謙一・越後民話集）

起後は雪国であるとともに、単作の米産で知られる日本の穀倉帯である。零細農家や寒漁村では昔から農閑期の余剰労働力の利用という形で通年出稼ぎが行われている。杜氏や毒消売りや、角兵衛獅子などはその代表例である。ことに角兵衛獅子は早く長唄や常盤津にも唄われた。今はその悲しいイメージは昔物語語りとなり、立派な伝統芸能として保存され保護されている。

阿賀野川、信濃川下流に拓けた蒲原平野には巨大な千町歩地主をはじめ、中小地主が集中する豪農王国であった。彼ら庄屋富農層は諸国の学者文人の遊歴者達を優遇して宿泊させ、そこを拠点として学問や芸術が地方に扶植された。十九世紀以後、儒者、国学者、歌

ばまれていたことになる。しかしこのハンディに対して新たな西洋の學問を身につけ、藩閥政府の後退にともなうてねばり強く官界、政界、実業界に雄飛した先覚者が多い。しかし権力や武力の空しさを感じて早くから學問や芸術の道に志を立てんとし、中・下級武士団や中・小地主層の中から多く偉材がとび立ったことも注目される。星野恒、吉田東伍（史學）井上四了（哲學）建部遜吾（社會學）鈴木文台・惕軒、虎雄父子（漢學）から近くは会津八一、小川未明、土田杏村、相馬御風、青野季吉、坂口安吾らの文學者や民俗學の小林存、劇作家の青山杉作等記憶されるべき人材が多く、芸術界においても洋面の草分け小山正太郎、富取芳斎、長井雲坪、から小林古徑、牧野虎雄（日本画）広川松五郎（工芸）北村四海（彫刻）などを出している。

＊

＊

佐渡は新潟県の一郡となるまでは、孤島たりとも古代以来一國としての誇りがあった。本土の片田舎ではなく、日本列島の縮図として中央の文化がストリートにこの島に着流し、定着した。したがってこの郷土に育った人々の視野は、少しも閉鎖的でなく、かえって波瀾をこえて広く世界を展望する理想に輝き、その希望のまま中央に羽ばたいた人材が多い。

北陸に遊歷した文人はきまづ最後の目的地をこの島に定め、離島の歴史と風物を一度は探訪してやまない。文學者といわず、芸術家といわず、島に渡って流人の悲史に涙をながし、金山に労役した無宿の勞苦をしのび、海府や小木の景勝に詩情をかきたてられた。明治以来、紅葉、露伴、鉄幹、晶子をはじめ、大正には花袋、雨

情、桂月、蘇峰、虚子、碧梧桐など、佐渡に詩歌、紀行を残して人口に膾炙された文藝はおびただしい。

佐渡はまた人形芝居、古浄瑠璃・能・舞楽などの民俗芸能の島として、安寿と厨子王、阿新丸の伝説や民話劇「夕鶴」の舞台として、おけさや甚句の民謡のふるさととして、この島が文芸に果たした役割はあまりにも大きなものがある。したがって又、以下項目別にふれる佐渡の學者、文人、たとえば司島凌海（漢學・醫學）萩野由之（史學）円山溟北、丸岡南陔（漢學）本間琢斎（金工）三浦常山（陶工）土田麦遷（日本画）土田杏村（哲學）青野季吉（文學）などがあげられ、その他にも政界、実業界に錚々たる人材がこの島から羽ばたいた事実を改めて顧みる必要があるといえよう。

学術

學術の面において新潟県出身の人材は少なくない。それを地域的に見て行くと、中越地区では安政五年長岡で生まれた人類學者、小金井良精がいる。彼の家は藩の名臣河井継之助や、米百俵の話で有名になった小林虎三郎と同じ町内にあり、父は彼等と同僚であった。戊辰の役の際、一家は戦火を避けて四か月も遠く仙台まで転々としたという。のち東大の前身開成学校で醫學を学び、ドイツへ留學後、解剖學、人類學の立場から日本人の起源について、アイヌの體質と関連づけて研究「コロボックル説」を説き、先駆的業績を残した。井上四了も中越の生んだ日本の碩學である。藩學崇徳館から洋学校（長岡高校の前身）に入り、和国会（現在も継承）の基礎を築いた。東大哲学科を卒業後、明治十七年加藤弘之、西周、中村正

直等の同志二十九人と語らい、「哲學會」を創設し、のちの東洋大學の基礎をつくった。世人は彼を「お化け博士」などと呼んだが、彼の研究はむしろ幽霊妖怪の否定をめざすものであった。四十九歳以後は盛んに國内外に講演旅行を行い、大連で亡くなった。郷里の信濃川の堤防上に彼の頌徳碑が立てられていて、信越線の車窓からそれを望むことができる。長岡は幕末に賊軍の汚名を着せられたため、その後政・官界には進出しにくかったが、學界、実業界には人材を輩出している。東大総長（昭和三年～九年）で近代政治學の泰斗小野塚喜平次もその一人であった。彼は日露開戦当時、開戦を強調したいわけの七博士の一人としても有名であった。上越地方出身者には竹越与三郎、相馬御風などがある。竹越は學者ではないが、衆議院・貴族院議員、枢密顧問官を歴任した一面、「國民之友」誌上で文明評論を行い、のち大著「日本經濟史」のほか「二千五百年史」などの著書を多数刊行している。下越地方に入ると安田町出身の吉田東伍がいる。三十歳頃上京し、苦學の末早大教授となり文學博士の学位を得、大著「大日本地名辭書」を出版したが、この本は一枚四百字詰の原稿用紙で書くとき三万枚に及ぶ、ぼう大な分量である。それを十三年余の歳月をかけて独力で調査と執筆に没頭したのであるから、彼がいかにも越後人らしい努力家であったかが分かる。又、中蒲原郡横越村出身の學究に建部遜吾がいる。彼の家は新潟県民俗學會の基礎づくりをした小林存と同様、同じ村の大庄屋の家に生まれた。彼が進學するころには生家も昔日の面影がなくなっていたが、出資者を得て東大で學び、のち東大で社會學を講じ、明治末期から大正初期にかけて我が國社會學の巨頭として活躍し

た。一方日露開戦前、積極的開戦論を主張した例の七博士の一人として注目をあびたばかりでなく、のち衆議院・貴族院議員となり、昭和初年の軍縮會議の比率平等主義に反対して軍一平等主義を提唱するなど政治、國際問題も関心を示している。その他下越では栗生津の長善館出身の鈴木虎雄がいる。長善館とは天保四年鈴木文台が創始して以来、四代八十余年にわたって、北越の一隅で数多くの門弟を育成してきた漢學塾である。鈴木虎雄は豹軒と号した。早くから上京し、一高から東大で漢文學を學んだ。新聞社に勤めたあと東京高師を経て京都大學で永年にわたって教鞭をとった。彼が生涯を通じて研究した分野は、中國の韻文で、とくに「支那詩論史」は代表的著作である。その他「豹軒詩鈔」十四卷、「豹軒退休集」十七卷所載の自作漢詩は一万首に達する。生涯これだけの詩をつくった詩人は、中國にも少ないと言われる程である。

佐渡の生んだ學者には、明治五年日本最初の「和洋独逸辭典」を出版した司馬凌海のような奇才もいるが、新穂村出身の土田杏村は有名であった。彼は新潟師範學校で學び、同校開びやく以来拔群の成績で卒業、東京高師へ進み博物學を専攻、更に京都大學で哲學を學んだ。卒業後は、持病の呼吸器疾患と戦いながら哲學、宗教、教育、歴史、文學等多くの分野にわたって論陣を張り文明批評家として独得の分野を開いた。最近彼の母校新穂小學校の校庭には、画家として名をなした兄麦遷と並んで銅板レリーフ像をはじめこんだ石碑が立てられた。裏面には杏村隨筆集「草煙心境」から抜粋した「謙虚は天地の心である」にはじまる文章が刻まれている。

文学

新潟県は文学活動の比較的根づかない土地柄とよくいわれる。事実「川柳」文芸が、ようやく根づいたのが第二次大戦後であるからその説も案外あたっているかも知れない。しかし、他方、伝統を重んずる短歌や俳句の分野はやはり盛んで、すでに新しい動きは明治三十年代にみられる。明治三十二年十一月、山田穀城による新派和歌研究機関「みゆき会」の結成がそれである。山田は明星派の歌人である。佐渡相川に生まれ、二十一歳で新潟新聞の記者となった。早くから浪漫的傾向を鼓吹し、新しい短歌革新運動を起こした与謝野寛の「東西南北」に共鳴、自らも在来の短歌に飽き足らず、小金花作と号し、清新自由の新傾向短歌を発表するとともに会の組織化をはかった。

相馬御風は、この山田穀城の活躍を、「小金花作大人は何といっても戦後に於ける明治新派和歌の大先達であった。故与謝野鉄幹先生の「明星」派の勢力がまだそうひろく天下に行き亘らなかつた頃から、大人は二十歳頃の若さを以て新潟新聞を拠城として県下に清新自由な歌風をひろめた。明治三十年前後の越後の歌壇は、大人の独壇場であった。」と述べ、さらに「その頃県下で新しい歌を作ろうとする青年の大半は、期の長短はあれ、大人の膝下に参じたといっても過言ではない。そういふこの私もその一人であった」ともつけ加えている。しかし、こうした短歌の新しい動きも、それが一つの文学運動にまで発展するためには、相馬御風を中心とする大正五年の「木蔭会」の結成を待たなければならなかった。御風は、明治

十六年糸魚川市に生まれた。高田中学在学中にすでに御風と号し、雑誌「新生」に短歌を投書するとともに、一方佐々木信綱主宰の竹柏会にも入会していた。御風の後の片鱗は、このころからみられたのである。卒業後文学に志を立て上京、早稲田大学に入ったが、生来の優れた文才からめきめき頭角をあらわし、早稲田大学文学などを中心に、歌人、評論家としてはなばなしい活躍をした。しかし、大正五年、「還元録」を書き、突如糸魚川に退住、以後亡くなるまでここに過ごすこととなったのである。御風の新潟県文壇に残した功績はここにはじまったといっても過言ではない。すなわち、郷里に帰った御風は、その後の半生を良寛研究と地元の短歌指導に全精力を傾け、二度と中央文壇にはもどらなかった。ことに、昭和三年に発刊した月刊雑誌「木蔭歌集」は県内歌人たちを大いに刺激し、昭和十七年六月十日の終刊号まで百二号の多きを数えるとともに、その間年ごとに会員数も増し、この傘下から輩出した歌人も多い。現在「コスモス」を主宰している宮棧二も、その昔この木蔭会で活躍した歌人のひとりであった。



会津八一

御風と時を同じくして早稲田大学に学んだ会津八一も新潟県という郷土が生んだ偉大な作家のひとりである。八一は明治十四年、新潟市の料亭の家に生まれたがこれを継がず歌人・美術史家としての道を選ん

だ。秋州道人とも称し、書家としても全国にその名を知られた。歌人としては正岡子規の影響を受け、独自の純正万葉調の美しい歌をよみ、また彼の学問や芸術はまさに「孤高独秀」のきびしさに貫かれたものである。晩年を郷里新潟市に過すこととなったが、八一は常に狭あいな新潟の風土性からはみだした文人であった。彼の自由独歩の境に立った人柄が、郷土との因果関係を拒否していたせいかも知れない。

俳句については昭和三年発足の雑誌「まはぎ」を忘れることができないであろう。主宰は新潟医大教授の中田瑞穂である。彼は在京時代東大俳句会の復興を主唱した人物であるが、新潟医大に赴任後、衛生学の及川仙石らの協力を得て「まはぎ」を創刊、やがて昭和十年、高浜虚子の門下高野素十を迎えるや新潟医大俳句は一段と盛んとなり、これをホトトギスの登龍門として多くの俳人が輩出した。

新潟県が中央詩壇へ送り込んだ詩人としては、その明快簡素、新鮮な感覚と知性あふれる詩をもつて多くの読者を魅了した長岡市出身の堀口大祐、エリオットの「荒地」の名訳をもつて知られる小千谷市出身の西脇順三郎、その生涯を社会派詩人、農民詩人として、また「詩と詩人」の主幹として郷土に深く根をおろしていた広神村の浅井十三郎らを挙げることができよう。しかし、これが真に新潟詩壇の発展に寄与したのは浅井ひとりであったことは淋しいことである。

このことは、小説・評論の世界においてさらに顕著である。

新潟県からは、数多くの作家たちが中央文壇において活躍した。



坂口安吾

なかでも童話作家として独自の境地を開いた小川未明は上越市(旧高田市)出身、評論家青野季吉は佐渡佐和田町沢根の出身、そして小説家で戦後「墮落論」をもつて多大の反響を呼んだ坂口安吾は新潟市出身である。ただ、こうした大型作家たちを主に送った新潟県に、短歌、俳句にみられたような特筆すべき文学活動がみられなかったのはなぜであろうか。

世に名作といわれる作品は多い。しかし、新潟県の風土や生活をテーマとしてあつかった作品は、川端康成の「雪国」や坂口安吾の「吹雪物語」などを除けば極めて少ない。それも「雪」「警女」「角兵衛獅子」など、比較的暗く、じめじめしたものがモチーフとなっているのは一体どうしたことであろうか。一言でいって、県出身の作家たちに、郷土が書けなかったためであろう。書けないというより、坂口安吾の「ふるさとを語ることなし」のことばに代表されるように、郷土を愛するが故にかえって郷土に反発し、郷土にふれることをよしとしなかったためかも知れない。安吾は、自ら育んでくれた新潟の風土的特性を、「雪国の陰うつと倦怠」、それから派生する「無気力と諦め」と、その「吹雪物語」で述べているが、いわば安吾にとって郷土新潟は無気力と妥協が充満する国であり、自らの体質と相まって、これを強く否定し、反発したものであろう。

そしてそれは、とりもなおさず郷土出身の作家たちに共通する問題でもあったのであろう。

新潟県文壇の動きは戦後ようやくその活発化と深度を深めつつあるようである。

絵画

明治にはじまる洋面史は、川上冬崖・高橋由一・小山正太郎という先覚者によって展開されたといえよう。しかし、小山正太郎の生涯は、たかひの連続で、その行動は明治開化日本の一面を象徴している。安政四年長岡藩医小山良運の長男に生まれ、幼いときに戊辰戦争の戦火のなかを逃げまわった。十三歳で上京、樽拾いなどして貧苦とたたかい、冬崖の聴香説面館に学び、才をみとめられ、士官学校の図面教官となり、さらに東京工部寮美術学校で、イタリア人フォンタネージに油絵を学んだ。しかし、西南戦争後で理想的な教育も行えず失意のうちにフォンタネージが帰国したあと、後任教師が品性劣悪なことを不満として抗議退学、同志と「十一字会」を組織し、その後「不同舎」で多くの塾生を指導した。アメリカ人フェノロサと岡倉天心らが国粹思想をかかげて洋画を排斥しようとしたのに対しては先頭に立ってたたかった。また、黒田清輝がフランスから外光派の描法を学んで帰国、明治美術会からわかれて白馬会を結成すると、浅井忠らと太平洋洋画会によって「むらさき派」に対して「やに派」を守ってたたかわなければならなかった。

日清戦争に従軍したのは、軍から命ぜられたというより、自分から戦争記録画を後世に残す必要を説いて筆を動かしたという。彼の

戦争画好きは語り草になるほどであるが、戊辰の役の落城による逃避行の体験から、愛郷愛國の激情を植えつけられたのだろうか。

画家として制作もしたが、むしろ美術教育家として優れた人であり、塾生が作品を見せると、まずどんな小さな点でも長所をほめた。え、それから欠点についてヒントを与えるという、まさにフォンタネージばりの指導法であったという。「たんだ(たった)一本の線」というのが彼の口癖で、門人の耳にいつまでも残った。オドオドと不確かな線を何本も重ねず、たった一本の線でもとらえるようにいうことで、長岡魂の気合いのこもったような言葉であるが、また、一筋に開化の日本に困難とたたかってつらぬいた彼の画道を言い当てもいえるようだ。

自らたたかうことによって、新しい画技をひろめた正太郎に比べ、時代の波におしまくられた日本画家もいた。長井雲坪は天保四年新潟の沼垂で医家に生まれ、長崎へ医学修業に出てそこで画道に精進、逸雲、鉄翁に学び、中国へ渡り明治元年帰国したが、世の風潮はすでに変わり、これもフェノロサらの国粹運動のあおりをくらって南画は顧みられなくなっていた。明治十七年に内国絵画共進会に出品した作品「千匹猿」が評者に激賞されたものの、不遇のまま転々、しかも我が道をひたすら歩んで精進をつづけた。晩年に近づくとつれて近代的な構成といっそうの深みを見せたが、明治三十二年信州で没した。その作品はかつて夏目漱石を感動させ、近年県内でも大きな展覧会が開かれるようになったことは郷土として喜ばしいことである。日本画家では小林古徑・土田麦暉・横山操の業績も大きい。それぞれ評価されており、ここでは略すことにする。

本県に、出版美術(挿画・童画)の先輩が四人も出たことも特色である。川上四郎(長岡市・東京美術校)は我が国童画の草分けで、大正初期から絵本・幼年雑誌で活躍、山村の子供たちを描いたものなど、その細緻な水彩タッチに独特の詩情がある。現在も湯沢町で良寛の絵に精進している。吉沢廉三郎(小千谷市・東京美術校)も温和な画風で絵本に執筆したが昭和四十二年亡くなった。落谷虹児(新発田市・尾竹竹坡門)は人も知る抒情画の大家。水島爾保布(東京美術校)は疎開後長岡に住み昭和三十一年没したが、戦前長谷川如是閑とともに雑誌「我等」にこもり、鋭い諷刺の漫画漫文を発表しつづけた。

彫刻については紙数がなくなったが、フランスから近代彫刻法を持ち帰り大理石の典雅な作品を残した北村四海と正信父子をあげよう。

音楽

現在、小山作之助の名を聞いて、すぐなずく人は数すくない。しかし誰しも、「荒城の月」の作曲者滝廉太郎の才能をみとめて庇護した師であるといえは興味を持ち、「夏は来ぬ」の作曲者であるとか知られると、にわかに親しみがわくにちがいない。シャンソンの「詩人の魂」のように、人々の唇にメロデーは残るが、作者の名はしだいに消えていくものなのだろうか。

文久三年、小山作之助は中頸城郡湯町村で生まれた。日本海の小さな漁港だった郷里の風物は、きよく美しい日本の旋律の唱歌のころを、幼少の作之助につちかってくれたのであろう。それにして

も、父の石油事業の手伝いを投げうも、向学の念やみがたく、彼は明治十三年家人に無断で吹雪をついて上京した。

英語と数学に身を入れて学び、文部省音楽掛に入学すると成績抜群で官費を支給され、同掛が東京音楽学校になると、助教授から教授にすんだ。非常な勉強家で伊沢掛長らに信任厚く、和声・音響学など原書で読破するほど力があつた。伊沢修二は東京音楽学校初代校長になり、政界を二分する同校全席案には、洋楽に対する無理解とたたかい奔走、ついに存続をまもりとおした。作之助も師と協力、日本の音楽教育のために活躍した。三十六年退職後も楽器の国産化をめざして日本楽器の顧問となり、いまの国立・東洋・武蔵野各音楽大学創立に参加、初代会長をつとめた日本教育音楽協会では、作之助の没後三年間は会長を空席にするほど慕われた。

欧化思想が怒濤のようにおしよせたころに、「ヨナぬき音階」で誰にも親しまれる日本歌曲の名作を数多く残し、音楽教育にささげた六十五年の業績は、昭和二年日本青年館での盛大な音楽葬でもその大きさがしのばれる。「何事でも人より優位に立とうと思えば、物事に早く着目するが肝要」という彼の言葉は、大雪をついて家出した不屈な行動力の持ち主なればこそその信条であったであろう。

演劇

北蒲原郡紫雲寺村から上京して演劇に没頭したため、実家から送金を断られた青山杉作は、寺の長男たる権利と、演劇人としての自由とを交換した。大正三年の頃のこと。彼を何がそれほど演劇に駆り立てたのだろうか。当時の舞台は「新劇」といい、「近代劇」と

いい、新時代の傾向への憧れと気負いで熱っぽい空気はあったが、演技訓練も演出方法も未熟で、むしろ職人のこなれてないセリフを大げさな身振りで歌いあげて、国籍不明の難解な印象も与えていた。自然な演技こそ新劇の本道だ。杉作は木村修吉郎・村田実と、本道を歩む「踏路社」を結成、大正六年に旗あげ、翌年の「幽霊（イブセン）」で、日本新劇史上初のリアリズムの演劇をうちたてた。「演出」という用語も踏路社から生まれたものだ。その後、彼は新劇ばかりか、帰山教正と組んで「映画芸術協会」をつくり、鳴り物や声色を廃し女優を登場させる純粹映画運動も起こした。また松竹少女歌劇団、藤原・長門両歌劇団、日本放送協会の放送劇も彼の指導を受けることになる。水の江瀧子を育てたのも、三木のり平にコメデイアンの道を歩ませたのも彼であった。

外遊経験のない彼が、西洋の習俗に、たとえばお辞儀などでも、時代・身分によって演じわけけるほど通曉していたことは周囲をいつも驚かせたが、演出というものは、そういう蓄積の上になりたつものとして、貧困の中でもたえず勉強し、吸収を怠らなかつた。

舞台稽古の際、しなやかな指で万年筆などを振って演奏のように指揮した彼は、リアルな演技による戯曲のリズムの再現をめざし、台本はすでに頭におさめ、俳優の呼吸と彼の体のリズムの一致で舞台が仕上がると確信しているようであった。昭和三十年、じつに多忙な六十七年の生涯を終えたが、彼のうちたてた舞台術は、彼の創立した俳優座だけでなく、ひろい分野に、いまでも彼の大きな手のリズムによって、導かれうけつがれている。



「采花」製作中の

故佐々木象堂

のに宮田藍堂（初代）があり、藍堂の門からは、後に無形文化財に指定された佐々木象堂を出している。なお二代宮田藍堂は幼くして父を失い、佐々木象堂に師事して、父の後を継ぎ、紫斑銅の製作にいそしみ、父祖の後を継いでいる。なお二代藍堂の長男宏平、次男亮平はいずれも東京芸大出身の新進工芸作家として、中央で活躍している。

一方鑄銅の本家柏崎では、原得斎の系統を引く、原直樹（日展評議員）正樹父子、直樹の甥益夫があり、ほかに伊藤豊（日展会員）があり、依然として鑄銅王国の裾がある。また金属工芸に一分野を樹立する、彫鍛金には西蒲原郡分水町の故小川友衛並びに小川英鳳兄弟がある。いずれも若くして中央に進出して、その名を知られているが、その甥に当たる亀倉蒲舟、康之父子は県内に在って、いずれも日展特選の栄誉を獲得し、県内の後進の育成に努力している。

このほか釜師には故堀浄親があり、その作品は高く評価され、その後を継ぐものとしては、政弘、政晴の兄弟がある。金属部門ではこのほか県の無形文化財に指定されている、燕市の玉泉堂の鋳起銅器がある。一枚の銅板から鋳起して成型した銅器で、他に類例がなく、しかも産業にまでつながるものである。

陶器は佐渡相川の無名異焼がある。その始めは金太郎焼である

工芸

幕末の越後・佐渡は天領、預領を除いては、中小の藩が分立していたため、藩の保護育成の工芸は発達しなかった。僅かに村上藩にあっては、藩の財政窮乏を救う一方便として漆芸の奨励があったに過ぎない。このために、その伝統が継承され、堆朱、堆墨の名工が輩出している。堆朱の技法を基盤として、近代的な漆芸を創られるものに、三彩彫漆がある。明治年間に有磯周斎によって鉄筆彫りが始められ、小脇長兵衛、小野橋堂にその技法が受け継がれ、昭和に入っては橋堂の長男為郎によって大成された。この技法は、黄、朱、緑の色漆を三層に塗り、黒漆を以って仕上げ、これに対して彫刻者が刀の赴くままに、朱、黄、緑の色漆を剥き出し、文様をつくったもので、従来の村上漆芸に見ない近代的な新しい感覚を表現し得たものである。この伝統を新しくし彫漆として表現したものに目黒順三郎（村上出身新潟市在住）がある。

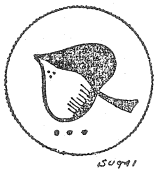
越後佐渡の工芸として最も古い伝統のあるものは、金属工芸中の鑄銅である。これは柏崎の大久保の鑄物師の系統を引くものである。幕末から明治にかけての名工として知られた佐渡沢根（現在佐和田町）の本間琢斎の如きも、柏崎大久保の鑄工原得斎の長男として生まれたが、家督を弟に譲り、佐渡沢根の本間六兵衛の養子となり、弘化四年（一八四七）には佐渡奉行の命により鶴子で大砲を鑄造し、さらに文久年間に佐久間象山の指導を受け新式の砲銃門をつくり、桑名藩主に激賞されたと伝えられているが、日本人の手によって造られた最初の大砲として知られている。その系統を継ぐも

が、それに改良を加えたもので、朱泥に近い陶器であるが、三浦常山、伊藤赤穂、三浦小平の名工が出ている。

染織では小千谷を中心として製織された小千谷縮・越後上布がある。いずれも苧麻を原料とした麻布で、その伝統は三百年の昔に遡る。主として魚沼地方、東頸城郡、古志郡の一部で、農村女性の冬の仕事として制織されたもので、北越雪譜の著者鈴木牧之は「雪中に糸となし、雪中に織り、雪水に洒ぎ、雪上にさらす。雪ありて縮あり、されば越後縮は、雪と人と気力相半して名産の名あり、魚沼郡の雪は縮の親というべし」と述べているが、蓋し縮を表現して余りなき名言というべきである。現在ではその材料とする良き苧麻が少なくなり、しかも、これを製織する女性も年老いて、往年のような、精巧なものが出来得ず、価格も高く、一般の需要も少なくなっている。過去の遺産として、保護生産するだけになっている。

（本稿は宮栄一、玉木哲、近藤忠造、竹内延夫、小林理一がそれぞれ分担執筆しました。）

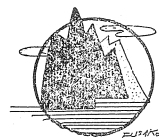
（新潟県文化財調査審議委員）



人物を中心とした

文化郷土史

—富 山 県—



八 尾 正 治

一 越中人かたぎと文化

「越中の人は、陰気の中に智あり。倭（ねい）なる気多し。按ずるに当国は、山深くしてまた海を抱けり。寒さはげしく雪深し」
元禄十三年（一七〇〇年）出版という、古い「人国記」に、こう書いてある。

立山連峰や黒部峡谷などの、高くてけわしい男性的な、北アの山なみ。そして波荒き日本海。きびしい地形。荒々しい気候。このなかで、永い冬を雪に埋もれて、ジーンと忍従の生活を送る人たちは、地味で質素だ。さらに「川千本」といわれるくらい、急流のあばれ川が多い。越中の歴史は「川との戦い」であったとさえいわれてきた。この洪水の惨禍を乗り越えて、父祖代々力強く生き抜いてきた。背をかがめ、姿勢を低くしながら、胸のなかに燃えるような闘争心をひめて、ねばりにねばる。これが越中人のド根性である。

越中富山といえば「アアあの売薬さんですか」とすぐ返ってくる。トレッド・マークの配置売薬は、江戸初期からの伝統産業で、出稼ぎによって越中の経済を支えてきた。利の薄いソロバンをはじきながら、コツコツと粒々辛苦のうえに築きあげてきたものである。

文化人類学の故泉端一教授が、昭和二十年ごろ砺波地方の米作農村を調査したとき、子どもに自分の家の絵を描かせたことがある。ところが、みなまっ先に描くのは大きな白壁ぬりの土蔵。お蔵のことがなにより頭にあるから、実際よりも誇張して大きく描く。

「うんとお金を貯めて、りっぱなお蔵をたてたい」これが富山の農民の執念のようだ。

祖父江孝男明大教授は、その著書「県民性」（中公新書）で、県人会の団結と活動の活発なことにかけては、富山県はAクラスだと、折り紙をつけておられる。質実剛健、勤儉力行、それに加えて合理的で強引な実行力。これが特性だという。

人物誌をみると、この特徴がハッキリ出ている。成功者の筆頭は、なんといっても経済人。安田財閥を築きあげた安田善次郎。セメント王の浅野総一郎。近くは、大谷重工の大谷米太郎、竹次郎兄弟。読売新聞、日本テレビの正力松太郎。小松製作所の河合良成。ファスナーの鬼吉田忠雄など。いずれも徒手空拳からたたきあげて、コッコツと大を築きあげた人ばかり。

「富山県人は、北陸の大阪人。石川県人は、北陸の京都人」といわれるが、その原因は徳川三百年の幕政にあるようだ。富山県のうち、婦負郡の全部と新川郡の一部の富山町で、富山藩十萬石が置かれた。これが加賀の前田さんの分家。それ以外の地域は、みな加賀藩の直轄地だった。そのため、金沢のように百萬石文化の恩恵にあずかることなく、ただ搾取の対象になっただけ。

「加賀は天下の書府なり」と新井白石をうならせ、加賀蒔絵、加賀象眼、加賀染、それに九谷焼などの、すぐれた美術工芸の花を咲かせた百萬石文化を、美望の目をもって眺めていただけ。

それだけに、明治以来「金沢を追いこせ」が富山人の合いことばだった。そしてがむしゃらに働いて、いまでは経済は石川県をリードしたものの、文化ではまだ残念ながら追いついていない。北陸経済の中心は富山県へ移ったといわれるが、行政や学術文化の中心は相変わらず石川県のようなのだ。

力で打ち建てなければならぬことである。

さて、前置きはこのくらいにして、本論にうつろう。

二 文藻をつちかう山河

立山に 降りおける雪を常夏に

見れどもあかず 神からならし

遠く万葉のむかし、越中の国守としてこの国に赴任した若き日の歌人大伴家持は、こう歌っている。このように秀麗の山河は、ことごとく文藻をうるおすものであった。

この麗峰立山を、朝な夕な、まなかに仰ぐ富山市に、田中富雄は生まれ育った。といってもご存知あるまいが、サラリーマン作家源氏鶏太のことである。

「父が早くなくなり兄弟が多かったので、旧制富山商業を卒業するなり、大阪の住友本社へ就職しました。父がいたらおそらくその跡をついで、売薬さんになっていたでしょう。」



太 彼のいうように、生いたちからすでに、葉臭い富山の
鶏 特徴が出ている。そして
氏 県人らしく、勤勉なサラリーマンとして、二十六年も
源 コッコツ働いた。

「花には水を 人には愛を
生活には ユーモアを」

「加賀宝生に、越中じょうるり」ということばがある。金沢では「天から謡曲がふってくる」といわれるくらい、宝生流の謡曲がさかんだ。それに比べ富山では、猫もしゃくしもじょうるりを習った。銭湯などで、顔をまっかにして「いまごろは……半七ッ あん」とサワリのところをうなるお年寄りを、最近までみかけたものである。

謡曲は、大名の文化、武家の文化。じょうるりは町人の文化。そこに両県の文化の、本質的な差がみられる。伝統のうえにつちかわれてオトリした、京都に似たのが石川文化。ソロバンに徹してガムシヤラな町人かたぎの、大阪に似たのが富山文化なのである。

最近ある骨董屋さんから、こういう話を聞いた。「石川県はなんといっても百萬石の伝統がありますから、いいものがありますね。しかしそれらは、金持ちや数奇者の蔵のなかに眠ってしまっていて動かないので、私らは商売になりません。それにひきかえ富山県は、最近とみに需要が活発です。正直に言って目が高いとはいえませんが、とにかく売れる層が厚い、経済力があるんですね。」

「富山の人のガムシヤラな行動力と、不屈のねばり強さには感心するが、どうもデリカシーとか、もののあわれなどとは縁遠いようですね」こう評する人がある。さらに県の文化関係者の間で「文学不毛の地」などという泣き言がささやかれたこともあった。しかしこれは、藩政三百年からくるコンプレックスにほかならない。

正直いって、富山県の文化人脈をみて、キラ星のように多士セイセイを誇るわけにはいかない。しかしそれなりにこの人がという異色な人がいたり、地味だが多くの業績を残した人がずいぶんある。

ともあれ、当然のことながら「文化富山」の名は、県民全体の努

彼が好んで書くことばである。恐妻家で、大した野望もなく、せいぜいで課長になるくらいが生涯の夢である、善良で平凡なサラリーマン。そのささやかな冒険。そこに描かれる、ユーモアとベーンズ。これが多くの読者の共感を呼ぶのだろう。

昭和二十二年「オール読物」に投稿した「たばこ娘」で認められ、「英語屋さん」で昭和二十六年上期の第二回直木賞を受けた。「三等重役」をはじめ「天下泰平」「重役の椅子」「ボタンとハンカチ」など作品は多く、押しも押されぬ人気作家の地位にある。吉川英治文学賞も受けた。

会社がひけてから、彼は夜コッコツと原稿をうめた。どこの会社でも、社員の内職には口のうるさいのがいるが、住友の重役に歌人として有名な川田順がいた。

「わしは会社にいる間は、会社の仕事に全力投球する。しかし退社後の時間は、完全に自分のものだ。会社の名譽を傷つけるのだから、文筆に親しもうとなにをしようと、自由だ」

彼は、この重役のことばに感激した。

昼は数字をいじくる経理マン。夜は寝る時間も惜しんで書きまくる小説家。このふたつを使いわけて、努力した。サラリーマンとしても勤勉で優秀だった彼は、住友の傍系だが、泉不動産の総務部次長に累進した。そして、作家の仕事がふえてどうにもならなくなってきたとき、退職した。ここにも富山県人らしい手堅さが出ている。

藩政のころから、北前船の出船入船でにぎわった伏木港。その高岡市伏木の古い回船問屋に生まれたのが、堀田善衛である。

昭和三十二年作の「鶴のいた庭」という短篇には、幼ない私とい

う語り手を通して、由緒ある回船問屋の没落のさまが描かれている。家の奥のくらがりに静かにすわる。あまり長く生きすぎた曾祖父。鶴が飼われた広い庭園。港の見える望楼がある、古い家のつくり。この環境のなかで、二上山のうえを飛んでゆく二枚の羽根を持った飛行機を見た、幼いころの作者は「いったいどこへ行くのだろう」とつぶやく。これは作者自身の、人生に対するつぶやきであると同時に、変ぼうを遂げつつある伏木港の行く先を示したものでなからうか。

慶大の仏文科を出て、国際文化振興会へ入った。中国へ派遣されて、南京や上海で暮したこともある。戦後帰国して、世界日報の記者をやった。「広場の孤独」で、昭和二十六年下期の第二六回芥川賞を受けて、脚光を浴びた。主な作品は「祖国喪失」「海鳴りの底から」「若き日の詩人たちの肖像」など。

実感派だけに、すばらしいイマジネーションがあるというわけではなく、作品は地味で堅い。加えて、文明批評家的なところがある。ここにも県人らしい、堅さとくらくさと、ねばりがうかがえる。



衛 善 田 堀

もうひとり、芥川賞作家に、柏原兵三がある。「徳山道助の帰郷」で、昭和四十二年下期の第五八回芥川賞を受賞した。父の兵太郎は、黒部川の下流扇状地、富山湾に臨む入善町吉原の出身で、戦前的高級官僚だ

の北日本新聞につとめながら「遼火の馬子唄」で第八回講談倶楽部賞を受けた。

稲垣史生は砺波市の生まれ。東京新聞、サン・ニュース・フォトなどを経て、文筆生活に入った。「武家辞典」「江戸生活辞典」「よろめき歌舞伎」「戦国裸像」などで、直木賞候補にのぼった。また時代考証に長じ、NHKテレビ大河ドラマの時代考証を、たびたび担当している。

池田源尚は井口村の人。大阪毎日や国民新聞の記者をやった。昭和十五年発表した作品「運不運」が、改造発行の「文芸」の第二回賞を受けた。第一回の賞は、織田作之助の「夫婦善哉」だった。戦後帰農してからは、あまり筆をとらなかつた。

地元を根をおろした作家に、岩倉政治がある。井波町高瀬の生まれで、農民文学作家として「稲熟病（いもち）」でデビュー。「村長日記」「新しき道義」などでは、浄土真宗の信仰に支えられた、砺波地方の農村の姿を活写している。「空気のなくなる日」のような、児童文学も書いた。共産党に所属して、政治活動に専念するようになってからは、作品はすくない。百姓一揆を書いた抵抗の文学「田螺（たにし）の歌」が面白い。

地元の元老翁久允（おきなきゅういん）も忘れてはならない。立山町の生まれだが「週刊朝日」の編集長をつとめた。アメリカへわたり、竹久夢二と世界一周旅行を計画したことがあったが、ケンカ別れ。富山へ帰って、郷土雑誌「高志人」を、戦前戦後にわたって続けている。「移植樹」「道なき道」などの著作があり、いま翁久允全集を刊行中。八十余歳でなおカクシヤク。富山ペンクラブ会

った。「兎の結末」「仮りの栖」「浸蝕」「短い夏」などの作品がある。なかでも昭和四十四年に書きおろした「長い道」は、内地空襲のかけつだった昭和十九年四月から、敗戦の二十年九月まで、一年余父の郷里へ疎開していたときの体験をもとに書いたもの。東京の小学校で級長もしていた主人公が、いなかの学校へきて、同級生に比べられる。約二キロの学校の道は、心の重い「長い道」だった。アルプスの見える田園地帯の風物を背景に少年のデリケートな心の動きがよく描かれている。東京学芸大学助教授の職にあった。昭和四十七年二月急逝したが、作家としていちはん油の乗りきった時だけに、惜しみても余りあることである。

三 さびしい明治大正文壇

野村尚吾は富山市の出身だが「乱世詩人伝」で直木賞候補となり「戦雲の座」で第一回小説新潮賞を受けた大衆作家。作品「アルプスの見える庭」では、主人公の若いBG、上司三重子、父祖の地立山町芦峯寺（あしくらじ）を訪れる。

「やがて、見覚えのある芦峯寺の部落が見えてきた。開祖有頼を祭る神社を中心に、古い石垣が並んでいる。どこか湿っぽい感じの家々である」

かつての立山信仰のメッカ、芦峯寺の宿坊は、いまも石仏群とともに息づいている。昭和四十七年春、文化庁の補助を受けて、ここに立山信仰を中心にした「立山風土記の丘」がつくられた。

囃（なわて）文兵も直木賞候補になった。小矢部市に住み、地元

長。

こう書いてくると、昨今の人物ばかりだ。明治から大正、昭和初期にかけては、人がいないのだろうか。お隣の石川県が、泉鏡花、徳田秋声、室生犀星の、三大文豪を擁しているのに比べれば、たしかに少ない。わずかに数人をあげれば、三島龍川がある。明治九年高岡市巾田の下麻生の医師の家に生まれた。父の死後一八歳のとき、一家をあげて東京へ移ってしまった。彼を知る人のことばを借りると

「霜川の人生は、家庭的な悲劇に始まったものとみられる。庄川河畔のさびしい町に育った多感の一青年を、文学に走らせ、やがては作家としての霜川をつくり出したのも、ひとつには、天分豊かな文才と情熱とによることはもちろんだが、ひとつにはまた、少年時代から断ち切れない因習への苦悩、社会的環境の影響も少なかつたのではないか」

父の死は毒殺とのうわさもあり、三島家は郷里では、白い目の差別感で見られていたらしい。それで上京以来、彼は一度も郷里へ足をむけていない。そんな故郷だったが、彼は常にその山川風物をなつかしんだ。号の「霜川」も、ふるさとの川庄川の名をもじったもの。そして、人並みに扱われぬ運命を、さびしい秋の「霜」に托したもののか。

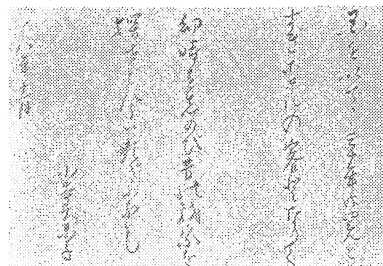
明治三十一年、「新小説」に「埋れ井戸」を発表して認められ、文壇の大家尾崎紅葉の門に入った。同門の徳田秋声とは、隣県どうしのせいかとくに親しかった。四十年「中央公論」に発表した「解剖室」は、評判になった代表作で、いまでも文学全集に採録されて

いる。運筆で有名で、三〇歳を半ばすぎると、ほとんど作品を書かなくなった。晩年は「演劇画報」に劇評などを担当して「大正役者芸風記」などを著した。昭和九年、ガンでなくなっている。

暮れそめて 鐘なりわたる 臨終かな

が辞世の句で、五九歳だった。没後三十年を記念して、その誕生の地にりっぱな三島霜川顕彰碑が建てられている。

女流作家小寺菊子は、明治三十二年、富山市の尾島という売薬さんの家に生まれた。明治三十五年ごろ三島霜川の紹介で、徳田秋声の門下生になった。処女作は「破家露」。その後「妹の嫁」「赤坂」などを発表して認められていったが、明治四十四年、大阪朝日の懸賞小説に「父の罪」が入選。女で入選したのははじめてだというので、一躍女流作家としてゆるぎない地位を確保した。大正四年に、洋画家小寺健吉と結婚。「父の罪」に



書んだつなを郷の子菊小

しろ「哀しき祖母」にしろ、その作品は、北国のかたくな仏教信者で、我執の強い人物を主人公にしている。父は、米相場に失敗して逃亡。客死する。一家は離散するが、祖母は自分のありつたけの財産を、みな寺へ寄付してしまふ。そして一生寺に住んで往生を上げようとする。老残の身は、寺でもころよく迎えられる、ある夜コタツからボヤを出して、寺か

ら出てゆけと迫られる。最後は、雪の積った墓場のわが家の石塔の前で、夫や子の名を呼ぶところで終っている。暗い北陸のイメージがきまっとした。果人らしい体質の作品である。昭和二十二年、脳溢血で倒れ、夫健吉の十年にわたる看病に守られながら、三十一年十一月永眠した。

山の随筆家として知られた田部重治は、富山市。英文学者だが、山に恵まれたふるさとのせいか、山を恋い、山を愛した。「山と溪谷」などは、いまでも読まれている。

新進文芸評論家に佐伯彰一がいる。英文学者で、立山町の立山行者、立山ガイドで知られた佐伯一族の出身。

四 北方の詩とうた

「かごの鳥」のなつかしいメロディで親しまれている作詩者の佃（つくだ）血秋は、明治三十七年氷見市池田に生まれた。電力県富山の工業化は、大正末期まず紡績からはじまっている。彼の歌には、自由の身にならぬ女たち、芸娼妓、女給、そして女工たちの、切々たる悲哀がうたわれている。紡績女工として、身をすりへらして働いた富山の娘たち。彼女たちの女工哀史のうえに、紡績工業が発達したのである。

血秋は、帝国キネマに入って映画監督になったが「かごの鳥」はその出世作。シナリオはもとより、俳句、詩にも多才を発揮。昭和三十六年、ロケ先の長野県小諸で、教育映画「ドレミファ先生」を撮影中、急死した。

「北方の詩」「北の貌」など、北方のきびしい自然と風物を、男性的にうたいあげた高島高は、明治四十三年の生まれ。郷里の滑川市で医院を開業のかたわら、詩作に専念。

剣岳が見え 立山が見え

一つの思惟のように 風が光る

昭和四十年、没後十年を記念して、この詩碑が市の行田公園に建てられた。

ほしがれいをやく においがする

ふるさとの さびしい ひるめし時だ……

「ふるさとにて」で、少年の日の黒部市生地、わびしい海浜風景をうたった、詩人の田中冬二は、「青い夜道」「山鴨」「海の見え」など、数々の詩集がある。

田中と同じ明治二十七年、富山市に生まれた渡辺順三は、一三歳で父を失い、一四歳の夏母とともに上京。石川啄木の歌に感銘を受け、小僧をしながらプロレタリア文学運動に参加。治安維持法にふれてたびたび検挙されたが、戦後新日本歌人協会を結成して「人民短歌」を創刊。歌集に「貧乏の歌」「烈風の街」「生活を歌ふ」などがある。

歌人、篠井嘉一（明治三十二年～昭和四十六年）は、北原白秋門の高足。高岡市の俳人篠井竹の門（虎次郎）（明治四年～大正十四年）の子。古城公園に、竹の門の

寝つづく 思ひの朝寂 さえずり

の句碑とともに、その歌碑

ゆめさめて さめたるゆめは恋はねども

春荒寥と わがいのちあり

が、父子なかよく並んでいる。

このほか歌人では、明治のすえから昭和のはじめにかけて活躍した、小杉町出身の藻谷銀河がある。

俳壇では、俳文学者として大正から昭和にかけて大きな足跡を残した、志田義秀がある。明治九年富山市の生まれだが、はじめは歌謡史の研究で「民謡概論」などを著したが、なんといっても俳諧、連歌の研究は偉大。「俳文学の考察」はその成果で芭蕉研究の書も多い。素琴と号して句も作った。その蔵書五千冊は県立図書館に寄贈されたが、同館の前庭に句碑

ひよこ共 浴びよ 木蔭の砂涼し
が建てられている。



父一嘉・竹の門・井篠だ並よく仲
子の碑（高岡市古城公園）

山口花笠（かりつ）（林造）

は、明治十一年、高岡市和田の生まれ。前記の篠井竹の門らとともに正岡子親の指導を受け、地方俳壇の興隆に努力した。昭和十九年、六七歳で急死したが、古城公園に次の句碑がある。

雪解の 北に流るる 大

河かな

俳誌「辛夷（ごうし）」による小矢部市の中島杏子（正

文)は、地方俳壇の元老。「風」の沢木欣一は富山市出身。

また「季節」主宰の金尾梅の門(嘉八)は、富山市水橋の出身だが、晩年上京して活躍。

角川源義は、梅の門と同じ水橋の生まれ。角川書店の社長だが、俳人としても知られている。戦後の混乱に「出版を通じて日本の美点を残そう」とのり出した。みずからチラシをくばるほどささやかな店から、十数年にして出版界のAクラスに成長。「角川文庫」がヒットして芽を出し「昭和文学全集」で大をなした。文学博士でもあり、随想集「雉子の声」は、昭和四十七年第二〇回日本エッセイストクラブ賞を受賞。

もうひとり、忘れてはならない人に、童話作家大井冷光(信勝)がある。明治十八年富山市常願寺の生まれ。新聞記者をしながら、久留島武彦に師事して童話を書いた。朝夕に仰いだ立山に題を求めた作品が多く「雲の子ども」を始め美しいメロディを奏している。大正十年、神奈川県逗子小学校で童話講演中倒れ、三八歳の若い生涯を終えた。

五 伝統芸術のふた

富山県の伝統工芸は、加賀藩の助成策もあって、高岡市の銅鉄器、漆器、井波町の木彫、魚津市、城端市の漆器など、いまでも衰えずに受け継がれ、育てられている。なかでも高岡市は、美術工芸の中心地だったので、明治二十七年、金沢、高松とともに全国にさきんじて、はやくも県立工芸学校が設置された。初代校長納富介次郎

は、名校長としてその基礎をつくり、名門高岡工芸は多くの俊才を輩出した。

芸術院会員、日展理事長として、ニラミをきかせている漆芸家の山崎寛太郎や、日本画家の郷倉千艸、彫刻家の畑正吉、佐々木大樹など、みなこの卒業生である。

山崎寛太郎は、明治三十二年富山市岩瀬の生まれ、色漆が得意で、日展には毎回バイトリティ溢れる作品を出展している。さらに日展運営の中心人物として、複雑な美術界をまとめている手腕についても、高く評価されている。

畑正吉は、明治十五年高岡市の生まれ。東京美術学校の教授として、工芸彫刻を教え、さらに造幣局の技術指導者として、貨幣の原型やメダルなどをつくり、レリーフ彫刻の第一人者といわれた。

佐々木大樹は、明治二十二年宇奈月町の生まれ。仏像を得意とし日展評議員である。

芸術院会員郷倉千艸は、明治二十五年小杉町の生まれ。早くから日本美術院に参加、評議員、監事として重きをなしている。近代的な色感を示す華麗な画風は、装飾画や壁面に優れた作品を残している。なかでも昭和三十八年・東京本願寺「釈尊父王に会いたまう図」昭和四十四年・四天王寺「仏教東漸」の両壁画は、代表作。長女の和子も日本画家で、院展同人。

このほか日本画では、四条派の石崎光瑤がある。明治十七年福光町の生まれ。金沢の画家山本光一について光琳派の絵を学び、さらに京都へ出て、四条派の竹内栖鳳の門に入った。けんらん華麗な装飾風の花鳥画を得意とし、印度や欧州にも留学して、東西の画様を

換取している。京都絵画専門学校の教授をつとめていたが、昭和二十三年六三歳で没した。

日展会員の下保昭は、砺波市出身。西山翠峰門で、将来を囑望されている。若手では、院展で最近メキメキ頭角をあらわしてきた下田義寛がいる。滑川市の生まれで、幻想的な画風は清新。このほか塩崎逸陵や村島西一がある。

洋画壇は、日本画に比べるとややさびしい。水彩画の荒谷直之介は、一水会に属し、日展評議員。人物を描かせては、この人の右に出るものはない。

なお、シュールを基調に、特異な画風で知られる自由美術協会の前田常作は、入善町の生まれ。最近仏教に根ざしたマンガラ図をよく描いているが、仏教王国富山の体質を物語るものか。このことは、郷倉千艸に仏教をテーマとする作品が多いこととあわせ、表現の次元は異なるとはいえ、なにか共通点を感じさせる。

美術評論家として活躍している滝口修造も、富山市呉羽の生まれ。北国人らしいこまやかな感性で、さえた論理を展開する。

「美術評論家という看板を一日も早くおろしたいのですが、この面での啓蒙も大切ですからね」と静かに笑う。著書に「ダリ」「ミロ」「クレール」「幻想画家論」「詩集」「妖精の距離」などがある。

がんらい明治期の県内画壇は、藩政以来の伝統に基礎を置いたものが多かった。

松浦守美(文政七年〜明治十九年)は、富山市の人。山下守胤に学び、藩主前田利保の著書「本草通串証図」の絵を描き、また明治天皇ご巡幸の際、船橋、呉羽山の景を献上している。

木村立嶽(文政十年〜明治二十三年)も富山市。藩のお抱え画師として狩野派に学び、明治二十年にできた新皇居に彩筆を振っている。

谷口鶴山(あいざん)(文化十二年〜明治三十二年)は立山町の生まれ。江戸に出て、谷文晁と高久鶴屋に学び、さらに長崎に遊んで、清人陳逸舟に文人画を学んだ。勤皇画家であり、気品の高い山水画を得意とし、京都兩宋画壇に重きをなした。

吉田公均(文化十三年〜明治十三年)は、上市町の人。京都に出て、四条派の松浦景文に学んだ。写生に立脚した精密な文人画がうまかった。このほか、藤田呉江、鷹田其石らが活躍した。

異色の洋風美術では、結城正明(天保七年〜明治三十七年)がある。富山市の生まれで、青野桑州に銅版画を学び、東京美術学校で教鞭をとった。

彫刻は、井波木彫の作家群や、高岡工芸学校の卒業生など、多士セイセイ。高岡市に生まれた本保義太郎は、東京美術学校卒業後直ちに助教授に任じられ、わが国初期洋風彫刻の鬼才といわれたが、二七歳の若さでパリに客死している。このほか先に書いた、畑正吉、佐々木大樹のほか、横江嘉純、長谷川義起、柚月芳、松村外次郎らがある。最近若手彫刻家で、これら諸先輩をしのぐ有望作家がドンドン輩出している。

井波町の木彫は、地方都市でこれだけの作家群を擁しているものは、全国で比類があるまい。日展評議員の横山白汀(四十七年十一月没)、横山一夢を面横綱として、横山玉抱、加茂壽山、横山豊介、横山善一など、若手作家が陸続として続いている。心強い限りであ

る。

金工は、彫金の民野照親（富山市）、蠟型の須賀松園（高岡市）、梵鐘の老子治右衛門（同）。

釜師の島春斎（同）らがある。鍍金の山室百世（富山市）は、「平足扁盤」で芸術院賞を受けている。

漆芸も、伝統ある高岡市を中心にして、彫漆、象眼に色漆を用いた丹甫、勇助風を基調として発達した。作品の色調の明るいのが特色。日展会員彼谷芳水や福沢健一、山崎立山、村田吉生らの高岡グループが活躍している。

木象眼の中島空堂（大沢野町）も、書きもらせない一人。

最後に、人間国宝石黒宗磨も県人。庄川が海に注ぐところ新湊市に「陶工石黒宗磨生誕の地」と書いた石碑が建っている。宗磨は、明治二十六年この生まれ。鉄釉（てつゆう）陶器の第一人者として、志野の荒川豊蔵とならぶ名工。鉄釉というのは、鉄を使った黒または褐色のうわ薬のかかった焼物。茶人はこの人の作品に、随喜の涙をこぼす。一七歳の時上京して、たまたま美術クラブで見た熊



石 黒 宗 磨

恋天目の美しさに魅せられて「一生かけてこれを研究してみよう」と決意。京都の八瀬に居を構え宋磁、唐三彩、絵高麗の写しなどにも名品を生み出した。昭和四十三年、七五歳でなくなった。

六 芸 能

わが国音楽教育界の先覚者、福井直秋は、上市町出身で、名譽町民になった。昭和四年、武蔵野音楽学校を創立。当時音楽専門の学校といえば、官立の東京音楽学校が上野に一つだけ。そこへ最初の私立音楽専門学校をつくったのだから、行手はイバラの道だった。音楽教育に対する情熱と、県人特有のネバリが、今日の武蔵野音大を築いた。昭和三十八年、八六歳の天寿を全うした。卒業生には、大谷列子（ソプラノ）、渡辺はま子（流行歌手）、石井敏（作曲）など、キラの星のよう。長男直俊（ピアノ）は芸大教授、次男直弘（バイオリン）は武蔵野音大校長。「音楽一家」である。

高岡市の壺崎琴月（清太郎）は、童謡「ギンギンギラギラ、夕日が沈む」の作曲で有名。郷里の音楽教育にも尽した。

人間国宝になった人に、謡曲の松本謙三（城端町）がある。宝生流ワキ方で「張良」「井筒」「安宅」などを得意とした。

さて、富山県はすぐれた民謡の多いことでも有名。がんらい雪の多い北国は、民謡の数も多いものだが、福井、石川、富山の北陸三県では、富山が一番。八尾町の「越中おわら節」を東の横綱とすれば、五カ山の「むぎや節」は西の横綱。「おわら節」は、毎年九月一日、二日、三日の「風の盆」に、町を挙げて歌に踊りに明け暮れ、全国から数万の観光客を迎える。元禄以来、三百年の伝統をもった古い歌だが、明治のころ一時衰微しかかった。八尾町の医師川崎順二は「おわら保存会長」として、保存と普及に努力した。ま

た、江尻豊治は、おわらの名人として美声をもって名をはせた。いまの完成されたおわら節の、優婉な節廻しは、歌い出しの音律の高さ、半句を息を切らずに一息で歌うむずかしさなど、一般には「なんとうたいにくい歌だ」といわれるが、これは江尻豊治の節を基本にしたからだといわれる。おとなりの新潟県の佐渡おけき、村田文蔵名人に匹敵する人物である。

「むぎや節」は、合掌づくりで有名な秘境五カ山。黒紋付にはかま、白だすきに帯刀、すげ笠を持って踊るこの歌は、平家の落武者部落にふさわしい、格調高いもの。五カ山は民謡の宝庫といわれ「トイチンサ」「お小夜節」「四ツ竹節」「古代神」など数多い。なかでも「こきりこ節」は、古老の伝承が一時断絶しかかっていたのを、地元の高桑敬親が採譜普及し、それが文部省唱歌に採用されて有名になったもの。

田中首相の「日本列島改造論」が、世論をにぎわしている。過密、過疎は、文化にもある。中央集中の傾向をできるだけきけ、なんとしても、父祖伝来の風土に根ざした、特色ある地方文化を守り育てていかねばならぬその反面、優れた他の文化を流入させ、刺激することも必要である。

不屈の精神からくる根強い富山文化を、いやがうえにも伸ばし、暗さを明るさに、陰を陽に、独得の文化をつくることこそ、われわれ県人全体の責務であろう。

（富山県文化課長事務取扱
富山県郷土史会副会長）



人物を中心とした

文化郷土史

—石川県—

亀田五呂



89-91

明治維新は三百年にわたる我が国の封建体制に終止符を打った。そしてその風の前に、百万石を誇った加賀藩も根こそぎ壊滅させられた。大藩の土台をくつがえされてみると、そこには天下の大勢判断に疎い藩の不決断による薩長閥に対する出遅れと、裏日本という風土的制約がもたらす経済上の後進性が目を追って明らかになってきた。

近代日本の思想界に足跡をのこす

明治の曙光を迎えた郷土文化に、近代思想の最初の炬火を掲げた先覚の一人に三宅雪嶺があげられる。雪嶺は維新前夜の風雲険しい万延元年（一八六〇）金沢で、加賀藩士の家に生まれた。明治四年、彼が十二歳のとき、金沢に設けられた私立学校のはしりである仏学塾に入ってフランス語を学ぶ。明治九年上京、東京開成学校（東京大学の前身）から、次いで東京大学文学部哲学科に入った。当時哲学科の学生は雪嶺ただ一人で、アメリカ人の講師フェノロサからマン・ツウ・マンの授業を受けたという。明治十六年卒業後は同大学准助教の肩書きで同大学編輯所（のち文部省編輯局）に勤めるかたわら日本仏教史を研究した。

明治二十年には東京専門学校（早稲田大学の前身）に招かれて講師となったが、そのころから当時の鹿鳴館に象徴される欧化主義の



三宅雪嶺

氾濫に反対、井上円了、志賀重昂、杉浦重剛、島地黙雷らと政教社を組織し、中産階級の欧化主義を唱える徳富蘇峰の「国民新聞」、雑誌「国民之友」に対抗して、雑誌「日本人」を発行して国粹主義の論陣を張り、かたわら陸羯南の新聞「日本」にも「真の国民主義」のために筆を振った。しかしこうした主張は当然欧化万能主義のときの政府の嫌忌に触れ、「日本人」「日本」ともしばしば筆禍事件を起こし、発行停止処分を食った。そのつど「日本人」は「亜細亜」に、「日本」は「大日本」「小日本」などと改題、変身して弾圧をくり抜けてきた。さらに明治三十九年には長谷川如是閑、古島一雄らと「日本及日本人」を発刊、大正九年（一九二〇）には雑誌「女性日本人」を発行。大正十二年九月一日の関東大震災で政教社が焼失すると、間もなく我観社を設立し、雑誌「我観」を出した。「我観」は一時「東大陸」と改題したが、のち再び「我観」に戻り、彼の終生文明批評の舞台となった。

雪嶺は第二次大戦が終わった直後の昭和二十年（一九四五）十一月二十六日、八十六歳で死去したが、明治、大正、昭和の三代にわたって言論人として終始し、主な著作には「哲学消論」「真善美日本人」「偽悪醜日本人」「我観小観」「王陽明」「宇宙二世の中」などがある。晩年にも死の床にあって、敗戦で方途を失った国民を導く口述を続けていた。彼は生来どもりだったが、その名演説は人訥弁

の雄弁として知られた。明治三十四年文学博士号を贈られたが、当時夏目漱石が学位を返上、話題をにぎわしたのに比べ「辞退するほどのものでもなからう」と、淡々として受けた。昭和十八年には文化勲章を贈られた。彼の妻電子は花園と号し、「女性日本人」に才筆をふるった。長女多美子は第二次大戦中、東条内閣と争って割腹自殺した代議士中野正剛の夫人である。

三宅雪嶺に次いで大きな足跡を残し、明治の三太郎と呼ばれた哲学の西田幾多郎、国文学の藤岡東園（作太郎）、禅の鈴木大拙（貞太郎）はともに明治三年（一八七〇）の生まれだ。

西田幾多郎は明治三年五月十九日、金沢にほど近い石川県河北郡宇ノ気村（現在宇ノ気町）の十村（庄家）の家に生まれた。明治二十年新設されたばかりの四高予科第一学級に入学した。このとき藤岡東園と鈴木大拙とがそろって予科三年に編入されている。しかしこのうち藤岡は成績優秀で特待生に選ばれたが、西田と鈴木は学業不良で落第、退学の憂き目を見ているのが注目される。

ともあれ、幾多郎は明治二十四年東京文科大学（東京大学の前身）哲学科選科に入り、卒業後の明治二十七年から郷里の石川県尋常中学校七尾分校教諭や四高の講師、山口高校教授を経て明治三十二年から再び四高教授となったが、明治四十二年に学習院講師をしていた鈴木大拙に誘われて同院教授として上京、翌年京都文科大学（京都大学の前身）の助教授に就任、のち教授となり、大正三年文学博士号を受け、以来昭和三年（一九二八）定年退職するまで後進の育成にあたった。彼の教えを受けたものには天野貞祐、三木清、高坂正顕、谷川徹三らのほか郷土出身の戸坂潤（羽咋郡富来町）木村

素衛（加賀市大聖寺）西谷啓治（鳳至郡門前町）らも名を連ね、学界に八京都学派の名を響かせた。

西田が初めていわゆる八西田哲学の体系を打ち立てた著書「善の研究」は、これまで欧米哲学の翻訳追隨に過ぎなかったが哲学界に初めて日本人による、日本語で書かれた独創的な哲学書として不朽の意義を持っている。これに次いで「思索と体験」「自覚に於ける直観と反省」「意識の問題」「芸術と道徳」「働くものから見るものへ」「統思索と体験」「一般者の自覚的体系」「無の自覚的限定」「哲学の根本問題」等を戦前、戦中を通して発表、昭和十五年文化勲章を贈られたが、終戦直前の昭和二十年六月七日鎌倉の自宅で没した。七十六歳。

藤岡東圃は明治三年七月十七日、金沢早道町でもと加賀藩の足輕の長男に生まれた。石川県専門学校から四高に入学、在学中西田と机を並べたこともあった。明治二十四年東大国文科に入学し、在学中から「李花亭抄録」十数巻をはじめ、平出鑑二と共著で「日本風俗史」などを著し、芳賀矢一らとともに欧化思潮氾濫の学界に国文学を樹立した。

東大卒業後大阪府立一中、京都大谷大学、三高などで教鞭を執る一方「日本風俗史下巻」「国史綱」「日本史教科書」などを書いていく。明治三十三年東大助教となり、明治三十八年に「平安朝文学史」で文学博士となった。この間故郷の北国新聞に請われて明治二十六年八月同紙の創刊号から「小説管見」以下「薄曇月橋物語」「この春」「われから草紙」「いろ奴」などの小説を載せ、多趣味、多才なところを発揮したが、幼年時代から持病の喘息に悩まされ、明治

四十三年（一九一〇）二月三日、四十一歳で早世した。長男由夫は埼玉大学、山梨大学の学長となっている。

鈴木大拙は明治三年十月十八日、金沢本多町の藩医の四男に生まれ、明治二十年石川県専門学校附属中学校から四高予科三年に編入されたが明治二十二年に落第、退学した。その後小学校教師などをしてから上京、東京専門学校に通ううち、先に東大哲学科選科に在学中の西田に奨められて、明治二十五年同科に入った。彼は少年時代から禅にひかれていたが、上京以来鎌倉円覚寺の今北洪川和尚、のち釈宗演について参禅、時には彼とともに幾多郎も古刹の山門をくぐった。

翌年シカゴで開かれた万国宗教会議に出席する釈宗演の原稿を英訳したのに続いて、アメリカの哲学者ポール・ケラーの「仏陀の福音」を和訳したが、これが機縁となって、明治三十年にケラーの「老子道德教」の英訳作業の助手として渡米した。以来十一年間アメリカに滞在し、「大乘起信論」の英訳や「大乘仏教概論」の著述などを通して東洋思想と禅の紹介に尽くした。明治四十二年にヨーロッパ経由で帰国、藤岡の世話で学習院講師となった。大正十年（一九二一）には京大教授の西田幾多郎のあっせんで大谷大学教授となり、間もなく学内に東方仏教徒協会を設立し、英文雑誌「イースタン・ブデスト」を創刊した。以来九十種を超える著作や欧米各国の大学や宗教大会に出席、席の暖まる暇もなく活躍、八禅の鈴木の名を世界に知られた。昭和八年に文学博士、昭和二十四年に日本学士院会員に推され、文化勲章を贈られた。このほかコロンビア大学客員教授、ハワイ大学名誉法学博士、インドのタゴール賞受賞な

と国際人としての榮譽に飾られ、昭和四十一年（一九六六）七月十二日九十七歳で死亡した。夫人ピアトリス・レーン（アメリカ・ラッドクリフト大学出身、鈴木がケラーのもとにいたとき知り合った才女で、昭和四年鎌倉に動物愛護慈善団を創設したほか、仏教関係の著書がある。昭和十四年没。

北国の生んだ文学者たち

小説家

明治のはじめ、金沢は相次いで二人の文豪を生んだ。泉鏡花と徳田秋声だ。

まず徳田秋声（本名末雄）が明治四年（一八七一）十二月二十三日、金沢横山町で元藩士の三男として生まれ、それから二年後の明治六年（一八七三）十一月四日に、泉鏡花（本名鏡太郎）が下新町の彫金師の長男に生まれている。二人が初めて相見したのは町の養成小学校に入学してからで、鏡花は八歳、秋声は病弱のため一年遅れて九歳で同学年となった。しかし口を利き合うようになったのは上級校の精練小学校に入学後であった。それから間もなく鏡花はミッシン・スクールの北陸英和学校に転校し、ついで相前後して石川県専門学校を受験したが、秋声は合格、鏡花は失敗して、以来各自の道を歩くことになった。それは両文豪の終生の関係を示唆するきわめ



徳田秋声

まず徳田秋声（本名末雄）が明治四年（一八七一）十二月二十三日、金沢横山町で元藩士の三男として生まれ、それから二年後の明治六年（一八七三）十一月四日に、泉鏡花（本名鏡太郎）が下新町の彫金師の長男に生まれている。二人が初めて相見したのは町の養成小学校に入学してからで、鏡花は八歳、秋声は病弱のため一年遅れて九歳で同学年となった。しかし口を利き合うようになったのは上級校の精練小学校に入学後であった。それから間もなく鏡花はミッシン・スクールの北陸英和学校に転校し、ついで相前後して石川県専門学校を受験したが、秋声は合格、鏡花は失敗して、以来各自の道を歩くことになった。それは両文豪の終生の関係を示唆するきわめ



泉鏡花

て暗示的な出来事であった。さて鏡花の生い立ちには、その母の影響が最も大きかったと言われる。彼の母は鈴と言ひ、萬野流鼓の中田万三郎の女子で若いころ江戸で育ち、幼い日の鏡花に良く草双紙の絵解きなどをして聞かせた。鈴は鏡花が十歳のとき世を去ったが、彼の文学的素質はこの母から伝えられたところが多い。鏡花は県専門学校に落ちてから私塾に通って英語を学んでいたが、十七歳のとき尾崎紅葉の「二人比丘尼色懺悔」を読んで感動したのが小説家志願の動機となった。そして明治二十三年十一月上京し、翌年十月ようやく紅葉の門をたたいて玄關番となり、文学修業の道に入った。明治二十六年京都日出新聞に処女作「冠脉左衛門」を発表して以来、「義血俠血」「夜行巡査」「外科医」「一之巻」「誓之巻」「照葉狂言」「誓題目」などを書いて明治文壇に地歩を固め、明治三十三年には幻想的な作品「高野聖」で浪漫派の代表的作家となった。その後も「婦系図」「歌行灯」などの代表作を送り出し、大正、昭和にかけても「卵塔場の天女」「龍胆と撫子」などの名作に優艶な八鏡花文学の世界を展開したが、昭和十四年（一九三九）九月七日六十七歳の生涯を閉じた。

一方、秋声は県専門学校から四高予科に進んだが、家計の事情もあって三年で退学、文学を志して上京、尾崎紅葉を訪れたのは明治二十五年三月だった。たまたま応待に出たのが、紅葉の玄關番をし

ている鏡花であった。そのとき秋声は鏡花から体よく玄關払いを食わされて引き下がらねばならなかった。その後大阪や郷里金沢や長岡で新聞記者や筆耕などをしていううち、読売新聞で鏡花の「義血俠血」を読んで奮然し明治二十八年一月再び上京、博文館に校正係の職を得てからまたしても紅葉を訪れた。すでに一足先に文壇に乗り出していた鏡花は、今度は快く紅葉に紹介の労をとった。

秋声は二十九年文芸クラブに「藪柑子」を発表、その後作品は次第に写実的傾向を示し、日露戦争後自然主義文学が入って来ると、その旗手となった。彼の出世作となった「徹」は恩師尾崎紅葉の異常な最期の病状を描いたところから「忘恩の徒」と怒る鏡花と快裂した。反目は長く続いたが、昭和八年に鏡花の実弟斜汀(本名豊春)が兄と喧嘩したあげく、当時秋声が経営していたアパートにこころげ込み間もなく病死した。秋声がそれを手厚く葬ったことから鏡花の感情も溶け、二十二年ぶりに手を握り合うという一コマもあった。

秋声はその後も「仮装人物」で第一回菊池寛賞を受けたり、「縮図」(未完)で近代最高作品の好評を買う一方で、山田順子との恋愛事件や昭和五年の総選挙に郷里で社会民主党から立候補(のち断念)するなど、いつまでも若々しい情熱の火を消さなかったが昭和十八年(一九四三)十一月十八日死去した。七十三歳だった。



室 生 犀 星

鏡花、秋声と並ぶ郷土出身文豪が室生犀星だ。

に処女作「茶三の父」や出世作「厄年」などを発表した。大正二年博文館に入って「文章世界」を編集、この間に室生犀星と親交を結んだ。大正十年博文館を退き、創作に専念したが、その題材はほとんど陰惨な能登の漁村の風物やおれの身近事に限られ、それが一部的好评を呼んだが、昭和十六年(一九四一)八月五日不遇のうちに五十六歳で死去した。昭和二十七年富来郷文化協会から遺作集「このわた集」が刊行された。

島田清次郎という一介の無名の青年が「地上」一巻をひっさげて、彗星のごとく登場したのは大正七年であった。清次郎は明治三十二年(一八九九)二月十六日石川県美川町の回船問屋に生まれたが、のち母の実家の金沢市内の遊郭街で育った。県立二中、金沢商業を中途退学、新聞記者や郡役所書記などをしていううちに、理想主義の長編「地上」を書き、長谷川如是閑らに認められて発表したのが反響を呼び一躍寵児となったが、同郷の海軍少将の娘との恋愛事件で告訴されて失脚、その後は巢鴨精神病院に収容され、昭和五年(一九三〇)四月二十九日結核で、三十二歳の短命を終わった。

不遇の作家では藤沢清造がある。清造は明治二十二年(一八九九)鹿島郡矢田郷村(現在七尾市)に生まれ、「演芸画報」記者となったが、大正十一年長編「根津権現裏」を発表、その後随筆や小説を「文芸春秋」などに寄せていたが、昭和六年「此処にも皮肉がある」を最後の作として、翌年一月東京芝公園で凍死しているのを発見された。四十三歳であった。山岳作家深田久弥は明治三十六年(一九〇三)三月十一日江沼郡大聖寺町(現在加賀市)に生まれた。東大在学中から創作活動に入り、小林秀雄らと「文学会」を創刊、「津軽の野づ

犀星(本名照道)は明治二十二年(一八九九)八月一日、金沢裏千日町の旧足輕組頭の庶子に生まれ、千日町雨宝院住職室生真乗の養子になった。少年時代から腕白で学業成績も悪く高等小学校を三年で退学し、金沢地方裁判所の給仕となった。そのころ俳句好きな書記から手ほどきを受けて、彼の文学の目が開いたのが十四歳のとき。以来地元「北国新聞」や「文章世界」「新声」などに投稿し、のちに隻脚の歌人として知られた尾山篤二郎と交わるようになった。その後地方新聞記者などを勤めたが明治四十三年に上京、友人の下宿などを転々として、やがて北原白秋の門に入り、次第に頭角を現し、若山牧水、斎藤茂吉、日夏耿之介、芥川竜之介、谷崎潤一郎らの歌人、詩人、作家らと知るようにになった。やがて詩から創作に移り、大正八年(一九一九)「性に眼覚める頃」を出世作として、昭和三十三年の読売文学賞受賞作「杏子」昭和三十四年野間文学賞の「かげろう日記遺文」まで数多くの私小説や王朝物に多彩な才能を発揮した。また、昭和二十三年には芸術院会員に推されている。昭和三十七年(一九六二)三月二十六日、七十四歳で死去した。犀星は大正十二年の関東大震災直後をはじめしばしば郷里に滞在、地元詩人や作家の指導に尽くし、郷土文化の上に大きな影響を及ぼした。

犀星の多彩な官能的作風に対し、自然主義派の質実な手法で故郷能登を描いたのが加能作次郎である。

作次郎は明治十八年(一八八五)一月十日、羽咋郡西海村(現在同郡富来町)の漁師の長男に生まれた。富来高小を出ると京阪地方に出て労働、帰郷後は準教員の検定をパスし小学校に勤めたが、間もなく上京、苦学して二十七歳で早大英文学科を卒業した。在学中ら「鎌倉夫人」等の代表作がある。少年時代から山に親しみ、戦後はヒマラヤ登山もした。昭和四十年に「日本百名山」の著作で読売文学賞を受けた。昭和四十六年(一九七二)三月二十一日、山梨県の茅ヶ丘に登山、尾根付近で心臓麻痺で急逝、山岳作家にふさわしい最期だった。六十七歳。久弥は戦後、昭和二十二年九月から三十年八月にかけて大聖寺、金沢などに住み、故郷に取材した作品を発表する一方、地方文学界の育成に寄与した。

伝記小説に異色を放っている杉森久英は明治四十五年(一九一二)能登半島の七尾市出身。東大国文科を出て雑誌「文芸」の編集長を勤めるかたわら創作にしたがい、昭和三十七年には島田清次郎の伝記小説「天才と狂人の間」で直木賞を受賞。その後も「石川啄木」「徳田球一」「辻政信」「後藤新平」「大谷光瑞」などに独特の人物観を展開している。

森山啓(本名森松慶治)は新潟県出身ながら、昭和十六年以来夫の郷里小松市に在住し、以来三十余年間同市に住みついている。明治三十七年(一九〇四)新潟県村上本町の生まれ。東大文学部を出て創作活動に入り、小松在住後「海の扇」で新潮賞を受賞。そのほか「うたたねの橋」「泡沫」はじめ県内に取材した作品が多く、石川近代文学館から「市之丞」と「青葉」を刊行している。「北国新聞」や「小松文芸」などの作品審査にもたずさわるなど地方文化の指導につくし、北国文化賞を贈られている。

△歌人など▽

いっぽう、歌壇では△隻脚の歌人▽として知られた尾山篤二郎がある。彼は詩友室生犀星と同じ明治二十二年十二月十五日、金沢市

横安江町の生まれ。少年時代には犀屋らと二葉会を結び短歌、詩を作っていたが明治四十二年に上京。窪田空穂に師事し、大正二年如女歌集「さすらい」以来「雪客」まで歌集十数巻があり、その放胆で明るい歌風から「歌壇の鬼才」と呼ばれた、昭和三十六年「大伴家持の研究」で文学博士となる。昭和三十八年（一九六三）六月二十三日死去。七十三歳。

女性では新保千代子の業績が最も光る。千代子は故新保辰三郎（県観光連盟事務局長）の未亡人だが、昭和三十八年に「室生犀星・ききがき抄」で第十一回日本エッセイスクラブ賞を受けた。次いで石川近代文学館の設立を計画、まず自らの蔵書を提供して県や金沢商工会議所などに働きかけて、ついに旧四高図書館を改装し、昭和四十三年十一月三日開館にこぎつけた。千代子は現在同館長として中央、郷土作家の各種記念行事や講演会、名作映画の会などを引き続き開催、地方文化活動の中心的役割をはたしている。このほか水声光子が昭和二十一年に詩集「雪かと思う」を発表したのも上京、火をつけに来た男」や郷土を背景とした「雪の喪章」みだれ扇「あざやかな樹」などの創作に、北陸女性の繊細な情緒を描いている。また「女流短歌会」を主宰、「女人和歌大系」四巻で文学博士となった長沢美津（東京）も金沢市の出身である。

科学方面では、明治、大正にかけてタカジアスターゼ、アドレナリンの発見者高峰譲吉（安政元年〜大正十一年）理化学研究所創設の桜井錠二（安政二年〜昭和十四年）、植物細胞学、遺伝学の藤井健次郎（慶応二年〜昭和二十七年）、天体学でZ項発見の木村栄（明治三年〜昭和十八年）などの名が輝いているが、その後は文学界ほど

活発ではない。

郷土の伝統を伝える

伝統美術工芸では友禅の木村雨山（金沢）、沈金の前大峰（輪島）、銅羅の魚住為楽（金沢）、丸谷焼の徳田八十吉（小松）、木工芸の水見晃堂（金沢）のほか郷土出身で蒔絵の松田権六（東京）、衣装人形の堀柳女（同）らの重要無形文化財作家を送り出した。このうち魚住、徳田、水見の三作家はすでに世を去ったが、残る文化財作家をはじめ小松芳光（蒔絵）談議所栄二（友禅）高橋介州（金工）浅蔵五十吉（丸谷焼）その他の作家が制作や後進指導につとめている。また絵画では二紀会の総師だった宮本三郎（明治三十八年〜昭和四十九年小松市）や日展審査員の高光一也（明治四十年〜金沢市）一水会の堀忠義（明治三十九年〜同）らを中心に、中堅、新進画家たちが毎年中央、地方美術界を彩っており、彫刻でも畝村直久（東京）矩幸成（金沢）長谷川八十（同）山本力吉（同）らが都加田勇馬、吉田三郎らの制作が見られなくなった現在、造形の世界に活動している。

芸能

芸能では、まず、藩政以来その手厚い庇護の下に栄えてきた能楽がある。維新後武士階級の愛好から庶民の手に移された能楽は、佐野吉之助らによってようやく大衆の間に浸透し、やがて金沢能楽会が組織された。第二次大戦後能楽会が改組され佐野能舞台も財団法人金沢能楽堂となった。さらに四十七年には県立金沢能楽会館が

建設され、三代目吉之助に当たる佐野正治が社団法人能楽協会北陸支部長の職にある。また初代吉之助の甥佐野敏は上京して宝生流家元宝生九郎に師事し、宝生会理事として活躍、雑誌「宝生」の刊行にあたりとともに自らも雑誌「記舞往来」を発行、俳誌「ほととぎす」の同人として趣味の広さを示した。本業の能楽では宝生流シテ役として妙技を見せ、昭和四十年には重要無形文化財保持者に指定されたが、同年（一九六五）十一月二十日六十八歳で没した。

一方、こうした古典芸能に対していち早く近代舞踊の新風を吹き入れたのが原せい子（のち高田）であった。せい子は明治三十九年（一九〇六）金沢市に生まれ、県立第一女学校を出て上京、帝劇女優から上野音楽学校卒。イギリスにも遊学、のち東京で夫高田雅夫とともに高田舞踊研究所をつくり、昭和七年には郷里金沢でも公演し、洋舞の草分けとなった。第二次大戦後再び洋舞熱が高まり各所に洋舞教授所が生まれたが、その一つ中村祐子モダンバレエ研究所（金沢）はしばしば中央舞踊界に進出、昨年秋季にはバレエの本場モスクワ、レニングラードなどで公演、石井渙賞を受けるなど華やかな話題を投げた。演劇方面の郷土出身者では北村喜八があげられ



中村祐子
から東大文学部を出て小山内薫の門に入り、築地小劇場の文芸部員となった。昭和二年十一月同劇場が金沢にも来演、「海戦」「狼」などを上演して地方好劇家に大きな刺激

を与え、当時のアマチュア劇団であるトルコ座が早速「海戦」を上演するなどの反響を呼んだ。喜八はその後も欧米近代作家の戯曲の翻訳や演出を通して新劇の発展に尽くしたが、昭和三十五年（一九六〇）六十一歳で死去した。

さらに明日へ向かって

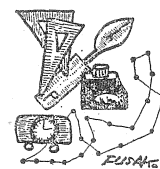
明治以降の本県出身者の残した足跡を文学を中心に紹介してきたが、これはあくまでも郷土文化地図にそびえる山脈の一面で、その麓にはこれらの高峰を積み上げた地平がひろびろと横たわっている。それは石川文化懇話会であり、石川県児童文化協会であり、日本児童文学者協会北陸支部であり、石川県俳文学協会であり、それから「北国文化」「北陸文学」「小松文芸」「能登文学」はじめ詩誌「笛」「つば」「石川詩人」、歌誌「新雪」「新歌人」「雷鳥」「日本海」俳誌「あらうみ」「蟻の塔」「山脈」「越船」などが発行され、それぞれ同人たちの研磨の場となっている。これまでも「北国文化」から竹本貞子（女性改造）、「北陸文学」から荒川義清（文学界）などが中央に発表、児童文学の勝尾金弥は「天保の人々」でサンケイ児童出版文化賞を受けている。詩壇、歌壇、俳壇などへの進出、美術、工芸界での活躍も数十氏を数えるであろう。しかも文化石川の地層はいよいよ広く深く、そこには多くの可能性が明日へ向かってさらに逞しく伸びようとしているのだ。

（本稿の執筆にあたって石川県現代史編（石川県編集）「石川百年史」（石川文吉著）などを参考にした）

（「石川自治と教育」嘱託）

文化郷土史

一 英 部 廣



福井県は越前、若狭の国から成る。藩政時代には伴信友、梅田雲浜、杉田玄白、笠原良策、橋本左内など国学・医学等の分野で、先駆的な業績をのこした幾多の人物を輩出、進取の精神の旺盛な国柄であった。しかし、近代日本の黎明を告げて発足した明治新政府の支配権力が、地方に及ぼした政治の中央集権化は、教育・文化の面にも強力にあらわれて、これが地方から東京への頭脳の流出をさそった、近代以降の地方文化の発展をいちじるしく阻害することになったのは皮肉な現象といえる。このことは、いま、郷土文化史上に足跡をのこした人物系譜をたどってみて気付いたことである。

本文では、文化の谷間と呼ばれてきた福井県に生まれて、逆境を克服、新しい郷土文化の確立をめざして、風雪の中を生きた人物や、若越の風土を宿命のように背負って、日本文化を推進してきた群像を紹介してみたい。

作家の血脈

越前平野を横切つて、九頭龍川が日本海に注ぐ河口の町、三国は、古くから港町として栄えてきた。この三国町平木に明治四十年二月十八日、高見順（明治四〇——昭和四〇）（一九〇七——一九六五）が生まれた。実父は当時の県知事、母は三国の町娘であつた。この私生児としての暗い出生の秘密は、高見順の文学の核として、生涯の作風に決定的な影をおとすことになった。生まれて間もなく、祖母、母と共に上京したの

村（現在丸岡町）一本田の自作農の次男に生まれた。この現代日本文学を代表する作家は、越前人の粘り強い気性を内側に秘めている。骨格のたくましさと共に、その精緻な描写で高い芸術的境地をひらいている作風は独自であり、読者層も思想的な立場をこえている。福中、四高、東大を卒業した。東大在学中からマルキシストとして活躍、また、プロレタリア文学の旗手として早くから、詩・小説・評論と精力的に仕事を積んできた。『中野重治詩集』『歌のわかれ』『茂吉ノオト』『むらぎも』『梨の花』などの代表作にあられるゝあいまいさを許さない、きびしい文学精神と日本語の美しさは定評がある。戦後、共產党から参議院議員に当選したこともある。故郷・丸岡町主催の成人大学の講師として帰郷することがあるが、飾り気のない人柄から受ける印象は、作家ではなく、福井弁を話す百姓おやじの風である。

若狹の風土を抱かしめるようにして小説を書いているのが水上勉（大正八—一九）である。水上勉は大正八年三月八日、大飯郡本郷村（現在大飯町）岡田に寺大工の次男として生まれた。八歳のとき、口べらしのために京都の臨濟宗相国寺塔頭瑞春院の徒弟にだされた。修業が辛く、同院を脱走、放浪の後、等待院に拾われる。花園中に卒業後、同院を出て、店員や売薬の行商などをしながら立命館大に入學したが、一年で退學、就職のため渡満した。だが拳天で咯血、故郷に帰った。この帰郷の日、若狹の寒村の小駅には母が、病んでゐる息子を運ぶためのリヤカーをひいて出迎えてくれたと、後年、水上勉は書いてゐる。この闘病生活の中で、水上勉は小説家への道を選ぶことを決意した。戦後ふたたび上京、宇野浩二に師事し

ころ打たれる。

中野重治（明治三五
一九〇二）は明治三十五年一月二十五日、坂井郡高棕

て『フライパンの歌』を発表したが、生活は苦しく、職業を転々とする。雌伏十年、昭和三十四年、従来の推理小説を脱皮した新しい社会派推理小説『霧と影』を出版。文筆生活に入り、『雁の寺』で第四十五回直木賞を受賞した。『五番町夕霧楼』『越前竹人形』『波影』『弥蛇の舞』とその後の八面六臂の活躍は、当代流行作家の第一人者にふさわしい。とくに『越前竹人形』が文豪谷崎潤一郎の絶賛を受けたことや、『拜啓池田総理大臣殿』で身体障害児の施設の不備をうったえた社会的発言は、今も読者の記憶に鮮明である。「幼いころから数奇な運命にもあそばされてきた水上勉君の人生は、波瀾に富んだ小説さながらである。かれの小説の基調になっているものは暗い宿命である。北陸の暗い陰鬱な天候に似ている。それはまた人間性の奥底に触れたものである。かれは魂につながるものを贅かずにはいられないのである」これは丹羽文雄の水上勉評である。

福井市からは多田裕計(大正元—と津村節子(昭和三—)のふたりの芥川賞作家が生まれた。多田裕計は昭和十六年『長江デルタ』で第十三回芥川賞を受賞した。多田裕計の『荒野の雲雀』は昭和二十三年六月二十八日の福井震災を被災者として目撃、惨状をつぶさに描写した小説である。津村節子は十二歳のときまで福井市に住んだ。昭和四十三年『玩具』で第五十三回芥川賞を受賞した。四十年秋、戦後はじめて帰福した津村節子は、震災・震災の廃墟から不死鳥のようによみがえった福井市街を歩きながら『幻の町』とつぶやいた。

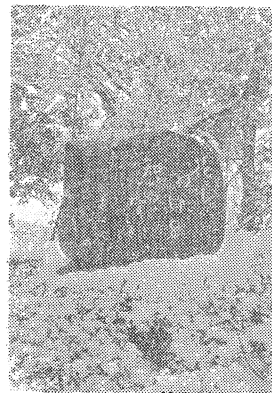
新潟県出身の森山啓(明治三七—)は福井市宝永小学校、福中で学

び、四高で中野重治から詩の指導を受けた。東大卒業後、東京で活躍したが、戦後は石川県小松市に在住して小説を書きつづけている。日本海辺を清冽な抒情でうたった詩篇や戦前の福井市お泉水界隈の面影を正確な輪郭で写しだした小説『緑の袴』『自然の子』などには福井の風土性があふれていて、土着の文学として精彩を放っている。

児童文学の山本和夫(明治四〇—)は若狭の遠敷郡松永村(現在小浜市)門前に生まれた。昭和三十九年『燃える湖』で児童文学賞を受賞した。詩集もある。童心でとらえて、作中にちりばめる若狭の風物は、道端の草一花にいたるまで故郷をこよなく愛している作者の血が通っていて、若狭の子供たちの心の糧となっている。校歌作詞も多く、これまでに若狭の小・中学校を中心に十九校の校歌を作詞している。

詩人群像

詩人の中野鈴子(明治三九—昭和三三)は中野重治の実妹である。兄



中野鈴子詩碑

重治の影響でプロレタリア文学の道を歩んだ。病気で、昭和十一年に帰郷したが、以後、三十三年一月五日、五十二歳で死去するまで二十二

年間、鉄をにぎり、泥と汗にまみれながら農民の詩をうたい続けた。詩集に『花もわたしを知らない』がある。昭和四十四年一月、兄重治は生家(丸岡町一本田)の庭の奥まった場所に中野鈴子詩碑を建て、雪の降る午後除幕の集いがおこなわれた。素朴で小振りの詩碑は、碑文の「花もわたしを知らない」によく似合っている。

三好達治(明治三三—昭和三九)は大坂出身であるが、戦時中の昭和十九年春から戦後の二十四年春、東京に移住するまでの五年間、三國町に流寓した。三國海岸の自然に魂をひたすようにして、この地で『故郷の花』『砂の砦』などの名詩集を編んだ。この三好達治の三國行は萩原アイと達治の愛の逃僻行であったと、萩原朔太郎の長女、萩原葉子は小説『天上の花』で書いている。三好達治の三國町在住はわずかな期間であったが、戦後の県内の文化活動の推進に原動力をもたらした。昭和四十三年四月五日、三國町東尋坊の一隅に三好達治文学碑が建てられた。碑文には漂泊の詩人の序詩ともいわれる処女詩集測量船巻頭の「春の岬」が自筆で刻まれている。「春の岬旅の／をはりの鷗とり／うきつつとほく／なりにつけるかも」除幕式に参列した文芸評論家河上徹太郎は、白い波頭をきらめかせて押し寄せてくる日本海を眺めて「これじゃ鷗もうきつつ遠くというわけにはいかん」と苦笑された。福井県民歌(昭和二十九年制定)三國高校歌、大野高校歌の作詞もした。「長江は野に横はり／青海は岬にうたふ／国どころ越前若狭／たたなはる山しうるはし」これは県民歌詞の一番である。

朝鮮から故郷の山陰米子に引き揚げた則武三雄(明治三八—)が、三國の三好達治を尋ねて来町、同居したのは昭和二十年の冬であ

る。以後、福井に住みつくことになったが、戦後の県内文芸界のリ

ーダーとして果たしてきた役割は中野鈴子と並んで、きわめて大きなものがあった。『浪漫中隊』『偽詩人』『紙の本』などの詩業のほか、越前和紙研究の成果をまとめた高著『幻の紙』を近刊した。竹部勝之進(明治三八—)は吉田郡松岡町に生まれた。戦後、外地から帰り、鯖江市に居をかまえ、こつこつと詩を書いている。胃ガンを手術を受け、目下病床にあるが、闘病生活の中でまとめた詩集『はだか』『続はだか』は、いずれも澄みきった宗教的な境地を現出している。「この道はさんまいへ行く道／両側に菜の花が咲いていてよい気持だ／きょうはまだ煙があがっていない／焼いてもらうにはこんな日がい」ハ詩集『はだか』から「さんまいへ行く道」ここには真宗王国といわれる越前の風土性が、確かな鼓動で息づいている。

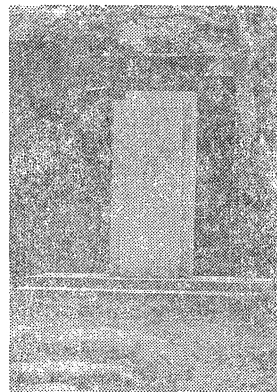
四季派に属する主知的抒情詩人として『曇の衣裳』『貝殻の墓』『果樹園』などの名詩集をのこした阪本越郎(明治三九—昭和四四)は福井市の知事官舎に生まれた。父は当時の県知事であった。「越の人」にもなで「越郎」と名付けられたが、生まれた翌年父、の転任で鹿兒島県知事官舎に移住した。高見順は異母兄にあたる。また永井荷風と阪本越郎は従兄弟である。

越前の詩人としては丸岡町霞生まれの内田忠(明治三八—昭和一九)金津町六日生まれの館高重(明治三七—昭和六)敦賀市神楽生まれの白崎礼三(大正三—昭和一九)などがある。丸岡町文化協議会は昭和四十七年に『遺稿内田忠全詩集』を出版した。

北国の歌人

短歌では越前の橘曙覧（文化九——慶應四）と若狭の山川登美子（明治二——明治四二）が文化遺産をのこしている。

曙覧（あけみ）は福井城下の商家の長男として生まれたが、家業を弟に譲って自分は福井市・足羽山の「黄金舎（こがねのや）」西山町（現在福井市照手二丁目）の「藁屋（わらのや）」に移り住んで、歌づくりに専念した。国学も本居宣長の田中大秀（飛騨高山）の門に学んだ。生活は困窮をきわめ、短冊に歌を書いて売り歩いたという挿話が伝えられている。歌集に『志濃夫廻舎歌集（しのぶやかしゅう）』がある。現実を直視し、ありのままを題材にしてうたう曙覧の歌風は、風流の短歌が主流であった当代の新感覚として、明治歌壇に新風を送った。「たのしみはまれに魚煮（に）て児等皆がうましようましといひて食ふ時」曙覧の歌集は、死後三十年を経て、正岡子規によって発掘されたものだが、赤貧にあつてゆるがず、歌道一筋に生きた曙覧の強い文学精神は、風土によって培われた生



橘曙覧歌碑（藁屋跡）

粋の越前人の粘り強い土着のエネルギーに結びつく。県短歌人連盟では明治百年を記念して、歌集『橘曙覧』を昭和四十三年八月二十八日に出版したが、こ



山川登美子

述べて、登美子の文学に若狭の風土が深くかわりあっていることを指摘している。「いくひろの波は帆を越す雲に笑み北国人とうたはれにけり」小浜市公園に建つ山川登美子歌

碑の碑文である。

曙覧、登美子の遺産を受け継いで、地元で活躍する歌人には、県内歌誌で最も長い歴史を誇るアララギ系「格」の石原真一（明治三——東条源四郎（明治三八）——熊谷太三郎（明治三九）——『百日紅』主宰者辻森秀英（明治四〇——一九〇七））らがいる。石原真一の自宅庭には自作「たたかひの炎に入りし仏よ 母ハナミ 父七十六」を刻んだ歌碑が建っている。

一筋の俳句

高浜虚子の小説に名作『虹』がある。この『虹』のヒロイン、森田愛子（大正六——昭和二）は三国町で豪商森田三郎右衛門と町の名妓よしの間に生まれた。胸を病んで鎌倉の療養所にいた昭和十五年ごろから、愛子は虚子の弟子、伊藤柏翠（明治四四——一九一一）のすすめで俳句をはじめた。相親を通じて虚子に出会った。太平洋戦争で、愛子は三国に戻ったが、愛子にとって俳句はもはや生きがいのすべてであった。昭和十八年十一月、虚子は三国を訪れたが、その前後の愛子との思い出をつづったのが『虹』である。娘の師である虚子の旅

の日は曙覧没後百年の命日にもあたるのである。福井市内の足羽山と曙覧の宅跡（藁屋）には歌碑が建っている。

明治歌壇で「白百合の君」と呼ばれた、若狭の関秀歌人山川登美子（戸籍とみ）は明治十二年七月十九日、遠敷郡雲浜村（現在小浜市）竹原に、山川貞蔵の四女として、八人兄弟第六子に生まれた。

山川家は代々小浜藩主酒井家の目付役・側用人として仕えた格式の高い士族の家柄であった。この武家の家柄に加えて、父の家族に対する態度は厳格であったから、登美子はきびしい封建専制的な家風にしつけられて成長した。郷里の小学校を卒業して、大阪の梅花女学校（ミッシン）に遊学した。姉みちが同校を卒業、また長姉いよが大阪に嫁いでいた。梅花の自由で進歩的な校風は、都会の生活環境とあわせて文学少女登美子の多感な感受性をかきたてていった。明治三十三年、与謝野鉄幹主宰の『明星』が創刊されると、登美子はいち早く参加した。自我の解放、個性の尊重を基盤思想とした芸術至上主義を旗印とする明星派の革新的な歌風が登美子のこころを大きくゆさぶったのである。登美子の短歌は『明星』に参加すること、鉄幹の指導やライバルにめぐまれて開花、晶子と共に明治歌壇に咲いた二輪の大花と注目された。しかし、登美子の人生には鉄幹をめぐる晶子との恋愛相克、意に染まぬ結婚、夫との死別、結核と不幸がつきまとった。堺の商家出の晶子の奔放な生き方に比べてみても、登美子の運命を甘受する犠牲的な生き方は、やはり若狭の士族の家庭に育ったことと無関係ではない。さらに福井大学教授坂本政親は「感じ易い少女の眼に映じた山水の美しさは、その詩心を養い育てるのに最も恰好なものであった」『山川登美子集』と

情をなぐさめるために愛子の母は、山中節、三国節をうたい、そして踊った。いつの間にか、かぼそい、弱々しい愛子までが母と一緒に踊っていた。病身の愛子が、この場所にあられることにはないと信じていた虚子にとって、この愛子の突然の出現は驚ろきであった。虚子の胸には、こみあげるものがあり、思わず声を放って泣いた。『虹』に描かれた、師と愛弟子のこころのふれあいのさまを見せる感動のシーンである。愛子は病床で俳句を書き続け、戦時中、鎌倉から小諸に疎開している虚子に句を送った。「虹の上に立ちて見守てふことも」「虹の上に立てば小諸も鎌倉も」虚子からは「浅間かけて虹のたちたる君知るや」「虹たちて忽ち君の在る如し」「虹消えて忽ち君の無き如し」の句が葉書にいたため送られてきた。やがて愛子の病状は悪化した。「ニジ キエテスデ ニナケレド アルゴ トシ アイコ」こんな電報が小諸の虚子に届いて間もなく、昭和二十二年四月一日、愛子は母と柏翠の手を左右にとって死んだ。虹のように美しく、はかない二十九歳の一生は、山川登美子の生涯と似通う。三国町東尋坊には、虚子、愛子、柏翠の句碑が寄り添うように並んで建っている。愛子の句碑は「雪国の深き此や寝待月」である。愛子と結婚した伊藤柏翠は東京出身であるが、愛子亡きあとも三国町に在住して、俳誌『花鳥』を主宰、戦後の県内句界の発展のために貢献している。

俳誌『雪解』を主宰している皆吉爽雨（明治三五——一九〇二）は明治三十五年二月七日、福井市に生まれた。生まれてすぐに丸岡町長をしていた父の兄、皆吉五郎の養子となった。大正三年、福井に入學、同級に中野重治がいた。中学卒業後、会社勤めをしながら、高浜虚子に

師事して俳句を学んだ。昭和四十二年、句集『三露』で第一回蛇笏賞を受賞した。誌名の『雪解』は故郷の冬に想いを馳せて名付けたという。

自由律の牧田雨煙樹（明治二二—八八九）は福井市に生まれた。俳句を始めて今日まで六十八年間を、この道一筋に生きている。句集『青い石』『泉』を持つ。足羽山公園には「吾が生涯を無花実は青み一つの井戸」の牧田雨煙樹句碑がある。『幹』主宰の石川銀栄子（明治三〇—）と共に、戦前戦後を一貫して地元を腰をすえて、地方文化の充実のために精進している業績はけっしてみのがせない。

音楽

洋楽の新星

若くして死んだ今川節（明治四一—昭和九）は、短い生涯に二百数十曲の作曲をした天才作曲家として忘れられない。今川節は明治四十一年八月、丸岡町巽に今川ヤスの長男として生まれた。私生児の孤独感からメソジスト教会へ通うようになり、牧師夫人からオルガンの手ほどきを受けた。これが機縁で音楽への関心が深まり、高等小学校を卒業すると森田銀行丸岡支店の給仕として働



今川 節
（『ベチカは燃える』から）

らきながら、ほと

んど独学で作曲の勉強を始めた。地元の青年たちで結成した「ローレル楽団」の仲間にも加わった。十五歳のとき、北原白秋の詩「てふてふ」に即興的につけた曲が、鈴木三重吉主宰の雑誌「赤い鳥」へ大正十四年八月号に推薦作品として掲載された。処女作曲であった。これに自信を得た今川節の作曲への精進は、大正十五年、十八歳でついに代表作『ベチカ』の誕生をみたのである。白秋の詩『ベチカ』の作曲には山田耕作のものもあるが、白秋自身は「私は今川君のベチカが好きだ」と言ったと伝えられている。昭和三年には「御大札奉祝歌」楽譜募集に応募して二等入選、昭和五年、讃美歌四三六番『波風あらぶる』作曲、そして昭和八年には楽壇の発龍門である時事新報主催（現在は毎日新聞社・NHK共催）第二回日本音楽コンクール作曲部門に交響曲『四季』が入賞、今川節は日本楽壇に輝かしい新星として登場したのである。これらの仕事を頂点にして宝永小学校歌、福中校歌など十一校の校歌をはじめ童謡、讃美歌を中心に作曲を続けていった。病んでいる体を気力で支えて作曲する、この無理がたたったのかもしれない。交響曲『四季』が入賞した昭和八年の暮に咯血、翌九年の五月二十五日、二十五歳の若さで死去した。逆境にくじけず、クリスチャンとしての敬虔な祈りの生活の中で、音楽への情熱の灯を燃やし続け、名曲の数々を生んだ青年作曲家の死は、多くの人から惜しまれた。昭和二十三年五月十六日、丸岡町緑幼稚園の庭に胸像「作曲家・今川節君之像」が建てられた。また、昭和三十八年十月一日には今川節顕彰会が伝記『ベチカは燃える』を刊行した。

邦楽の巨星

彫刻家・ハープ演奏家として著名な雨田光平（明治二六—八三六）は箏曲京極流の二代目宗家である。京極流とは宮城県出身の鈴木鼓村（明治八—八三）が明治三十四年に創始した箏曲の新流派で、筑紫派、八橋流などの系統をひくものである。素朴高雅なメロディーを簡潔な技法でする独奏が主旨であることは、筑紫、八橋の各流と似ているが、演奏にさいしての曲の内容を特に情緒的に表現するのが、京極流の浪漫的な特色とされている。雨田光平は明治二十六年二月一日、福井市相生町（現在足羽三丁目）で生まれた。父薄金次助、母たき。光平は父の母方の雨田家の家名を継いだ。明治四十四年、福中を卒業した光平は、大正元年、東京美術学校彫刻科に入学した。上京とともに鼓村に師事、本格的に箏曲を学び始めた。鼓村は明治三十一年四月から一年余、福中で教壇に立ったことがあり、福井は鼓村にとって青春の思い出多い土地でもあったので、この福井出身の青年に、鼓村が特に目をかけたとしても不自然ではなかった。光平もまた、鼓村の期待にこたえ、やがて鼓村門下の高弟としての実力をたくわえ、鼓村の生前から、すでに後継者に見られるまでに



雨田 光平
（福井県文化財調査報告、第16集から）

なるのである。大正五年、美術学校卒業。大正九年にはアメリカに渡っ

て、家具会社でアルバイトをしながら、彫刻とハープの演奏を学んだ。大正十四年にはフランスに移って、彫刻修業のかたわら世界的ハープリストのマルセル・ツルニエの特別指導を受け、ハープ演奏に磨きかけた。外遊十年の生活を終えて、昭和四年、帰国したが、このときから箏曲、ハープ、彫刻の三分野での目覚ましい活動が始まったのである。昭和六年三月十二日、鼓村は京大附属病院で亡くなった。死水は光平がとった。光平は鼓村没後、京極流宗家を継ぎ、二世となり、東京・池袋で楽堂を経営した。昭和二十年四月、戦災で帰郷、以後、現在に至るまで福井市に住んで、常に地方文化のリーダーとして音楽、美術の各界で業績を挙げている。なかでも昭和二十九年五月から翌三十年七月まで、ヨーロッパへ演奏旅行したおり、アイリッシュ・ハープを日本に普及することを発想、帰国後、その改良と製作指導にあたって、福井市にアイリッシュ・ハープ合奏団を結成した功績は特筆に価する。京極流は昭和三十九年六月五日、福井県無形文化財に指定され、さらに昭和四十八年春には国の無形文化財に指定された。

美術

前衛と伝統

日本の近代美術の父といわれる東洋思想家岡倉天心（文久二—大正二）は横浜で生まれたが、父岡倉寛右衛門、母このの両親は共に福井県人である。『東洋の思想』『日本の目覚め』『茶の本』の名著や東京美術学校創設、日本美術院創立などの業績で知られる、この国際的な先覚者天心は、生前「自分は福井県人だ」と人に語っ

ていたそうだが、渠人もまた、郷土が生んだ偉人として、岡倉天心の名前を深くここに刻んでいる。

天心の妹、てふ子をめとったのが、三國出身の彫刻家山田鬼斎（元治六——明治三四）である。鬼斎（幼名常吉）は三國清に生まれ、二十歳のとき、山田家を継いだ。在郷時代すでに一家をなしたが、明治十九年、上京、天心、竹内久一らと知り、東京美術学校木彫科の教師となった。代表作には、明治二十三年、第三回内国勸業博覧会に出品、銀賞を受賞した『大塔宮馬上像』明治二十五年、シカゴで開催されたコロンブス記念万国博覧会の日本事務局から製作を委嘱され、これを浮彫りに完成した『平治物語図扇額』などがある。

世界的な陶彫芸術家沼田一雅（明治六——昭和二九）は福井市木田新町（現在のみのり二丁目）に生まれた。本名は勇次郎。幼時一家は大阪にでた。父について彫刻を学んだが、明治二十四年、上京して、岡崎雪声（蠟型鑄造法）竹内久一（彫刻）に師事して修業した。明治二十九年、東京美術学校助教教授（同四十二年教授）となった。明治三十三年、パリ万国博覧会に銅の『猿面し置物』を出品して、一等金牌を受賞した。明治三十六年、農商務省の海外藝術練習生として渡仏、国立セーブル陶磁器製作所で陶磁彫刻の研究をすすめたが、この在仏時代に、ロダンの指導を受けたことは記念すべき成果であった。明治三十九年、帰国したが、大正十年に再び渡仏、彫刻物焼成法と釉薬調合法を研究し、翌年、帰国した。日本の技術に外国の技術を導入して、新技術を開発した沼田一雅は日本の陶磁器彫刻の創始者の地位を確立したのである。フランス政府は一雅の功績に對して、明治四十三年、芸術章（アカデミー・ド・オフィシエ）

を、また昭和二年には「レジオン・ド・ヌール」という最高の勲章を贈った。代表作には『原嘉道像』『竹内久一像』などのブロンズのほか『正木直彦先生像』『ワグネル博士像』『中沢岩太像』などの陶像がある。昭和二十九年、造型美術への貢献と陶器彫刻という新分野を開拓した功績によって、第十回日本美術院恩賜賞を授与された。昭和二十九年六月五日、東京で亡くなった。八十一歳の生涯であった。

雨田光平（音楽の章参照）は沼田一雅の東京美術学校教授時代の教え子である。雨田光平の中学時代の彫刻をみたのが、生まれてはじめてみた彫刻作品だったと語る国際的彫刻家高田博厚（明治三三——）は石川県出身であるが、三歳から福井市に住んで、福中を卒業した。大正八年、東京外国語大学に入学したが、翌年、中退して、彫刻勉強のため渡仏した。戦争をはさんで、パリに二十七年間滞在し、昭和三十四年、帰国した。昭和四十三年五月に開館した福井文化会館にはブロンズ像『水浴の女』が飾られている。

日本画には島田墨仙（慶應三——昭和一）がいる。墨仙は慶應三年十月九日、福井城下の東子安町（現在宝永四丁目）で福井藩士島田雪谷の二男に生まれた。幼年時代から絵を好み、父雪谷に学んだ。明治二十九年、東京に出て、橋本雅邦に師事した。明治三十六年、第五回内国勸業博覧会に出品した『大石主税刺鼠之図』で認められた。昭和十八年には『山鹿素行先生で』帝國芸術院賞を受けた。墨仙の画風の特徴は繊細典雅な技法を駆使する歴史画、人物画にあり、『山鹿素行像』などが代表作である。昭和十八年七月九日、七十六歳で亡くなった。

丸岡出身の長田雲堂（嘉永二——大正二）山田介堂（慶應三——大正一）と敦賀出身の内海吉堂（嘉永元——大正一四）は、福井の三堂々と呼ばれ、小浜出身の村田香谷（文政二——明治四五）と共に明治から大正にかけての日本画壇で活躍した。内海吉堂は、吉堂の鯉々うたわれるほど、鯉の絵が得意であった。

洋画壇では芸術院会員で創元会の鈴木千久馬（明治二七——新槐樹社の堀田清治（明治三一）が福井市出身である。鈴木千久馬は明治四十一年福中三年のとき一家が上京したため、東京・日本中に転校した。大正十年、東京美術学校卒業。帝展、文展に出品、昭和十六年、仲間たちと創元会を創立した。『てっせん』で昭和三十一年度日本芸術院賞を受賞した。

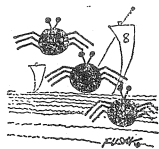
異色の前衛画家小野忠弘（大正二——）は青森県出身であるが、長く三國町に在住、独立美術協会に所属する盟友松崎真一（明治四三——）と共に、県内画壇のパイオニアとして気を吐いている。特に小野忠弘は三國町松ケ下に仕事場をかまえ、ロンドン近代美術協会主催国際彫刻展（一九五三）サンパウロ・ビエンナーレ国際展（一九五九）ベニス・ビエンナーレ国際展（一九六〇）などに現代日本を代表する画家・彫刻家として出品、国際的作家として精力的に制作をすすめている。三好達治は随筆『小野さんとの交友録』で小野忠弘を「爆発的人物」と評している。

美術評論家岡秀太郎（明治二九——）は戦前から戦後の今日に至るまでの県内の画壇の確立のために働いてきた。大正十一年、北荘画会を結成、中央展の招致、前衛美術の啓蒙、洋画講習、自費による美術館建設、また戦後は北美文化協会を主宰して後進の育成指導を

中心に幅広い活動を推進している。土岡秀太郎の、この美術運動は「地方における文化運動のモデルケース」として全国的に注目されている。

△おことわり 福井県関係の学者、宗教家など、本文に紹介した以外の文化関係者も多し済済である。紙数の都合で割愛せざるを得なかった。▽

（福井県立図書館振興課長）



人物を中心とした

文化郷土史

—山梨県—

中川武秀



発足期の三傑

近代山梨の学芸、文化の新発足を準備し、その土壌醸成に重要な役割を果たしたのは、芸術における真下晚菰、学術では広瀬元泰、欧化思想の啓蒙家としては中村敬宇の三名を忘れることはできない。

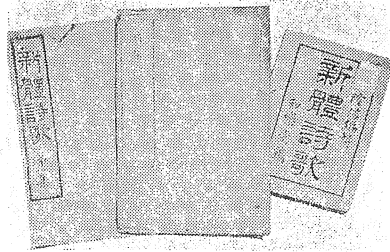
真下晚菰（専之丞）塩山市中萩原の出身で陸軍奉行並支配などを歴任したが、藩書調所調役組頭時代に果たした新知識の導入、とりわけ高橋由一など、近代洋面の胎動期にあたって多くの洋画家を育成し、浅井忠一から黒田清輝へと展開する近代洋面の発足を遺憾なく育んだ晩菰の近代洋画への貢献は偉大である。

また樋口一葉の父則義は晩菰とは同村の出身で幕末の則義の江戸遊学は晩菰の導きによるものである。後年一葉が春日野しか子名で「経づくえ」を甲陽新報（明治二十五年十月十八日付けから七回にわたっての分載）に発表したのも、晩菰の弟子野尻理作が同紙の主幹をしていたことによるもので、一葉が野尻理作を遙して、父の恩義を晩菰に返したものである。

広瀬元泰は若草町藤田の出身で幕末の蘭学者、緒方洪庵と並び称される人物である。その私塾時習堂の「弟子籍」によれば佐野常民、陸奥宗光、田中久重、小野泉などが元恭門から巣立っている。種痘法の解説書に「新訂種痘奇法」などがあるが、兄広瀬和達と協同して、甲州では初めて種痘を行うなど、単なる理論家ではなく、

実務面でも優れた活躍をしている。明治元年初代官軍病院長などに就任して、我が国の近代医学の発展に尽力すると同時に、「理学提要」「知生論」など二十種を超える著述によって近代日本の自然科学の展開にきわめて重要な役割を演じている。

中村敬宇と山梨との結びつきは安政四年十一月、甲府徴典館学頭を命ぜられたときに始まる。敬宇の任期はわずかに一年余であったが、この間に徴典館の学生として敬宇の指導を受け後年近代日本文学の創造に活躍する者が輩出する。我が国におけるアラビアンナイト



新体詩歌

トの初訳「暴夜物語」、キゾの「欧州文明史」の翻訳などで活躍する永峰秀樹、初代駅通正杉浦謙、山梨日日新聞社長野口英夫、また竹内節をして「新体詩歌」を編集させて刊行させた甲府徴古堂の東浦栄二郎周辺の英学愛好家などがそれであるが、啓蒙思想家中村敬宇と甲州文化界とは敬宇没年にまで強い紐帯で結びついていた。

明治期の学芸・文化

東浦栄二郎によって「新体詩歌」が刊行され、広瀬元恭門下の小

野泉によって新教育が準備されたというものの甲州文壇とその出身者の伝統詩歌に対する態度は俳句における橋田春湖、小林見外、保科倍之にみられるように月並調を脱することはできなかった。春湖は為山、等哉と共に江戸三大家の一人にあげられながらも俳句革新を意企するほどに前衛的ではなく、見外、倍之も宗匠俳諧の世界にとどまっていた。山梨の俳句は子規の弟子神奈桃村によって新しい創作活動がスタートし、飯田蛇笏によって大成することになるのであるが、明治期の新俳句には桃村の和歌への転向によってみるべきものがない。

和歌においては三井甲之、岡千里、日原無限、神奈桃村など「アカネ」から「アララギ」への子規門流の発展過程で多彩な作歌活動を展開している。

甲之は明治十六年中巨摩郡敷島町の出身で、明治四十一年二月、根岸短歌会を代表して「アカネ」を刊行し、アララギ派と甲州歌壇との提携の中心となり、そこから千里や桃村、無限などの「馬酔木」や「アララギ」での活躍の道がひらかれてくるのである。

とりわけ桃村と千里とは伊藤左千夫とともに「馬酔木」の創刊に参加し、「アシビ」の甲州御岳歌会を明治三十九年主催し左千夫や甲之の甲州行を実現したりした。

天人の笹吹川の河の辺に甲斐の風流士男子産ませり 左千夫は岡千里の長子の出生を歌ったものである。

近代小説では明治期を代表する山梨の作家は自然主義末期に「少



中村星湖

年行」をもって文壇に登場する中村星湖である。富士山麓と甲府とを背景に少年とその友人との友情をリアルに歌いあげたもので、甲州の風土と人情とを深い人間愛にまで昇華させて自然

と人間とを一元的に描出した名作である。

なお星湖の活動は創作以外にフランス文学の翻訳、文芸評論など広範囲にわたるが、晩年は故郷河口湖畔に定住して、山人会の主要メンバーとして山梨の芸術文化の発展に貢献した。

星湖の学友前田晃は博文館「文章世界」の編集などを通じて自然主義文学運動の推進に尽くすかわら、ゴンクールやモーパッサンなどの翻訳紹介につとめた。山梨市の出身で後年は創作童話などにも手を染め、「青い目のカニ」「少年国史物語」などの作品がある。またその夫人前田ひさの筆名徳永寿美子も幼年童話作家として「赤い帆の舟」や「ばらのおどり子」などを発表し、昭和十年代に酒井朝彦、千葉省三らと「児童文学」を創刊して衰退期の童話文学に活を入れていく。

樋口一葉(夏子)を山梨の作家として位置づけることには多少の無理があるが、両親の故郷山梨への一葉の関心の深さと、山梨の文化界の一葉への敬慕を考えるとこの項において一葉を除外すること



樋口一葉

とは県民感情の許さないとこである。

一葉没後の山梨日日新聞を思いつくまよにくってみても、明治二十九年十一月二十七日「才媛一葉女史逝く」とか大正七年十一月二十五日「一葉女史追悼会」とか大正十一年八月二十七日「一葉女史記念碑除幕式」といった記事を記録することができるし、一葉はまたその作品「琴の音」や「花ごもり」では父の故郷山梨の歌枕、塩の山や差出の磯について書き、明治二十八年には「ゆく雲」において塩山市中萩原を「見わたす限りは天目山、大菩薩峠の山々峯々垣をつくりて、西南にそびゆる白妙の富士の嶺はをしてみて面かけを示めさねども冬の雪おろしは遠慮なく身をきる寒さ」と描写している。その描写の正確さは幼少期に両親によって語られた塩山市中萩原の自然についての記憶によったものであろうが、それだけに「心の故郷」として山梨の風土が後年の彼女の心を支配していたとも言えよう。

明治の山梨において一葉とは逆の形で山梨の美術界を代表する女流に野口小蘗がある。弘化四年十一月大阪生まれである。幕末京都に出て南宋面を日根対山に学び山水花鳥を好んで描いたが、明治十五年野口正章に嫁がすに及んで山梨との関係が生じた。夫正章は十

一屋と号する酒醸家で甲府市朝日三丁目に工場を持ち、横浜在住の英人コプランを招いてビールの醸造を開始するほどの開明家であった。

小蘗の作風は南宋面の伝統を守り、構図、筆法とも穏健着実であったが、気品の高尚性が多くの鑑賞家の共鳴を呼び、跡見花蔭、奥原晴湖とともに明治の三閨秀の一人にあげられている。晩年には帝室技芸員、華族学校教師などを歴任し、我が国の芸術教育の振興にも貢献している。なお正章との間に生れた小恵も女流南宋面家として名を成している。

小蘗の同門に「歳寒三友」の作者、三枝雲岱がいる。北巨摩郡明野村の出身で、小野泉の弟である。若くして京都の日根対山に南宋面を学び、「玉堂富貴図」「御岳新道」の二帖は明治天皇に激賞され、明治三十三年五月、大正天皇の成婚にあたり賀図の依頼を受けて、傑作「歳寒三友」図を創作したりしている。

雲岱と並んで明治の山梨の画壇を代表する絵師には中沢年章と中丸金峰とがある。年章は大蘇芳年の門弟で山梨最後の浮世絵作家である。晩年は日本画に転向、歴史物語に取材したり、新聞雑誌の挿絵などにも手を染めている。明治三十五年刊の「孝志五恩図解」の挿絵、県立図書館所蔵扇面、「樋口一葉像」などはそののびやかな描線の自由と洒脱さを余すところなく発揮した彼の代表作である。

中丸金峰は本県最初の油彩画家で、本名中丸精十郎、金峰はその号である。少年期甲府の南画家竹村三陽に師事したが、江戸に出て

真下晩菰を頼り、蕃書調所画学局出身の川上東涯に洋画を学んだ。後年神田に画塾を開き多くの油採画家の育成につとめたが、かたわら参謀本部陸地測量部に出仕したりしている。遊就館揭示の武将像の多くは金峰の作品であるという。

このほか山梨には中村蘭林、岡村松里など南宋面家が輩出しているが、金峰を継ぐ洋画家としては広瀬元恭の甥、広瀬和育ひとりである。「和育蘭画集」一巻が刊行され、その画風をしのぶことができるが、作品の多くは散逸して現存しない。

工芸・建築面で明治の山梨を代表するものは「藤村式建築」と呼ばれる本造洋風建築様式の創始者、小宮山弥太郎である。弥太郎は通称で実名は正広、塩山市塩後の出身である。十五歳の時島村半兵衛に社寺建築の工法と彫刻を学び、幕末田安家の作事頭となったが、明治六年県令藤村紫朗が着任するとその信任を得て、本造で石造建築を模倣した和洋折衷様式の建築を多数造った。

明治二十年藤村の愛媛県知事への転出にともなわれて愛媛県に駐在し、諸官庁の庁舎の建築を行っている。

大正期の学芸と文化

前田晃の評論、翻訳、中村星湖の創作など明治期に文壇に登場した文学者の活動が大正前期の山梨文壇の中心となるが、大正八年「文章世界」に発表された星湖の「火を失ふ」は大正期の我が国の農民文学を代表する佳作である。

しかし大正後期となると白樺派や新理知主義の台頭、続くプロレタリア文学運動などの興隆の中で星湖の創作活動はにわかに鈍って行く。

一方歌壇においても神奈桃村なく、甲之はアララギ派の本流からそれて実作に見るべきものなく、わずかに千里がアララギの同人として明治以来の山梨のアララギの伝統を伝えるのみであった。

こうした山梨文壇の衰弱を救ったのが、高浜虚子と相知り、「俳諧散心」に参加して、近代俳句作家として大成した飯田蛇笏である。観照の確実さと格調の正しさ、重厚な調べとで、「ホトギス」雑詠の巻頭を村上鬼城や前田普羅らと争いつつ、やがて大正七年、



飯田蛇笏

「雲母」の主宰となり、生涯をこの俳誌の経営と多くの門弟の育成にかけた。

「雲母」は大正初年「キララ」という誌名で愛知県内で発刊し、大正四年主選者に飯田蛇笏を迎え、翌年「雲母」と改題して発展したものであった。大正十二年編集及び発刊所を山梨県東八代郡境川村小黒坂の蛇笏の自宅に移すとともに、「山嵐集」「雲芝」などの句集を刊行した。蛇笏には

秋立つや川瀬にまじる風の音
芋の露連山影を正しうす

などの代表作があるが、前記句集以外に「雪映」「家郷の霧」「樺花集」などの句選集などがあり、随筆や評論には「土の饗宴」「現代俳句の批判と鑑賞」などがある。

定型俳句の蛇笏に対応する甲州出身の俳人に秋山秋紅がある。明治十八年南巨摩郡鯉沢町に生まれ、本名を鉄雄という。内藤鳴雪によって句作の指導をうけ、佐藤紅緑と知り、「とくさ」の同人となる。その後野尻拘影らと「かふふ吟社」を起こして甲州俳壇のリーダーとなるが、その後萩原井泉水の自由律俳句運動に参加して、非定型俳句の一方の雄となる。

夕べの富士の晴れてるを貧しく住む

ふるさとの月夜の子ども

などがあり、晩年は俳誌「層雲」の編集を担当したりしたが、昭和四十一年一月没した。句集に「兵隊と桜」「夜の富士」などがあり、評論集に「俳句表現論」など非定型俳句論がある。

中央文壇に二人の偉材を送り出した俳壇に比べると山梨の歌壇はやや貧しい。アララギの同人伊藤生更、飯野真澄はその将来を期待されながらもその才能を開花するには若く、わずかに網野新一郎が、明治四十三年刊行の「黎明」などに作品を発表しつつ、大正期に至って松村英一などと交友しながら、後年国民文学の一翼を担ったにすぎない。

また原阿佐緒、岡本（大貫）かの子と共に新詩社晩年の三闘秀にあげられた原田琴子は愛知県名古屋市の出身で、山梨県の名家遠藤

氏に嫁したものである。興謝野昌子選の「白光」（明治四十一年六月刊行）に

うつくしく少女と生れ花さかず

鳥もうたはぬ路をゆかんや

などを発表しているが、大正末年に没している。

絵画では大正七年赤蓼会などが組織され地方画壇としては活発な活動が行われたが中央画壇に人を送るには至っていない。後年その特異な描線で、自由で洒脱な独自境を開拓した近藤浩一路が画家としてスタートする。近藤は明治十六年九月山梨県南巨摩郡睦相村、今の南部町に生まれ、和田英作に師事するが、大正八年第八回院展に入選し、日本画家として認められ、日本美術院同人となる。

なお近藤は政治漫画や社会派漫画などにも手をそめ、日本漫画史を画する業績も忘れ難い。

清水高嶺、菊地龍岳も明治期に画業を志し、大正期に大成する本県出身の日本画家である。高嶺は北巨摩郡安都郡村の出身で、松本楓湖、龍和亭らに師事し南宋画の正統を継承する。柔らかなフォルムと豊かな色彩とで描く花鳥画は絶品である。

龍岳、菊地甚作は南都留郡東桂村、現在の都留市出身、鈴木松年日本画を学び、山水を好んで描いたが、晩年は京都三条通広道ですごした。

昭和期の学芸・文化

蛇笏は「雲母」の拡充に励みながら、いよいよその格調を高め求道者の風貌を深め、星湖は山人会を組織して、郷党の子弟の芸術文化の育成に専心する中で、昭和前期の中央文壇に甲州が送り込んだ女流作家に小川正子がいる。

瀬戸内海の離島、長島愛生園での救ライ生活を通じて得た体験を素材に、限らない人間愛を歌いあげた小説「小鳥の春」は昭和前期のベストセラーの一つとなり、映画化されたが、正子は東山梨郡春日居町の出身、東京女子医専に学び、昭和四年卒業と同時に光田健輔に私淑して救ライ生活に入ったのである。

福祉と文学との接点を追求した小川に対称される女流には村岡花子がある。明治二十六年甲府の生まれで、評論、随筆にも活躍したが、NHKのラジオ放送「子どもの新聞」で、全国の少年少女に、その母性的な優しい声で夢と希望とを与えた。モンゴメリーの「赤毛のアン」「乞食王子」などの翻訳、「女性の生き甲斐」などの評論を通じて、女性と児童とを中心にした社会教育と文学との接続を通じた文化活動にみるべきものがあった。

千里、無限らによって育くまれたアララギ派短歌では、伊藤生更と飯野真澄とがその同人として活躍する。生更は斎藤茂吉門下で、昭和十年アララギの姉妹紙、「美知思波」を刊行し、後進の指導にも力を入れる。創刊号には今泉忠義の「短歌の表現とその語法」、今井福次郎の「上代鷹狩の素描」などの論文をも掲げた水準の高い短歌同人誌である。

飯野真澄は、土屋文明の門下、「山梨歌人」の主要メンバーとして活躍するが、山梨日日新聞など地方紙の選者をつとめ、農民の生活と心情とを格調高く歌い上げた。

非定型派の歌人としては一葉の父母の故郷塩山市大藤生れの萩原大助がいる。昭和九年「短歌論評」に参加して、労働歌を詠みつけた。昭和十年五月、渡辺順三によって編集された歌集「世紀の旗」には交通労働者としての生活の中からすくい上げた抒情を

電車従業員の歌

車掌台の

窓をとほして見る空に

星が瞬いている風が強いのだ

と歌いあげている。

山本周五郎の文学的出発をどこに画するか多分に問題のあるところである。周五郎が「南桑川村」を書いて万朝報に佳作入選したのは十六歳の時である。しかし山本周五郎の小説家としてのスタートは「日本婦道記」をもって、直木賞候補となった頃とすべきであろう。明治三十六年六月二十二日、山本周五郎、本名清水三十六は山梨県北都留郡初狩村八二番戸（現在の大月市下初狩三〇七番地）で生まれた。父は清水逸太郎、母とくろの長男であった。

家業はまゆの仲買商で、祖父伊三郎の代から初狩に住んでいたが、その原籍は韮崎市大町若尾区八二一番地であった。

日常生活において周五郎は故郷初狩については多く語るところが

富士川べりの地域を舞台に閉鎖的な山村の人々の人情や欲情をあまりとなく書いたもので、昭和十六年芥川賞候補作品に選ばれた。

甲州出身の小説家にふれたついでに、作家の妻となつて、その創作活動の底辺をささえた甲州の女として正宗白鳥夫人の福と大宰治の妻、美智子について一言しておきたい。

白鳥夫人は甲府市清水徳兵衛の三女で、中村吉蔵の媒酌で結婚した。この結婚前後の様子は作者自らが「事実と創造」において述べているように「泥人形」に詳しく描かれている。広津和郎をして「文章世界」で「あの罪のない細君をあんなに残酷に皮肉に取扱う主人公の気持にはムカムカする。」と批評させるほどのもので、その後日談は「黙阿彌」に書かれている。

大宰夫人美智子は理学者石原初太郎の孫、数学者石原明の娘である。昭和十四年、井伏鱒二の紹介によるもので、甲府市美咲一丁目に新居を構えたが間もなく東京都下三鷹に移った。

憂愁とデカダンスに心身を痛んだ大宰治との生活が美智子をいかに悩ませたか多くふれる必要もあるまい。

文学界の多彩さに比べ美術界はやや淋しい。浜武雄の白穂会、辻葦夫の野獸派同人会など洋画家の創作活動はあるものの中央画壇をリードするほどの作家は生まれていない。わずかに高野真美、桑原福保、古尾浩蔵らの文展作家と、文展無鑑査の望月春江、穴山勝堂、大河内夜江などの日本画家を認めるのみである。

なかったが大草については昭和二十六年六月から朝日新聞に連載された「山彦乙女」で詳しくふれている。

「樅の木は残った」「青べか物語」など戦後次々に佳作を発表したが、昭和四十二年二月十四日絶筆「おごそかな渴き」を未完のまま他界した。

山本周五郎に後れること二年にしてこの世を去ったのは木々高太郎のペンネームで、昭和十一年直木賞を受賞した林謙である。受賞作品「人生の阿呆」のほかに「文学少女」「折声」「睡り人形」などがあるが林は慶応義塾出身の生理学者である。母校慶応大学の教授を務めるが、昭和二十八年には探偵作家クラブ、第三代会長になっている。

故郷山梨の風土を描いた作品には終戦直後山梨日日新聞に発表した「雲と詩のあの頃」があるが、林謙をジャーナリズムで有名にしたのは晩年人生二度結婚説を提唱、自ら、これを実践したり、探偵小説芸術論などを唱えて常に常識を破る特異な発想での提言によって話題をふりまいたことによる。

生涯のほとんどを山梨に送りながら創作活動に専念したのは石原文雄である。昭和十五年山内一史らと同人雑誌「中部文学」を発刊し県内文学界の中心的役割を果たしたが、昭和四十六年四月他界した。

「大陽樹」「ひかりの枝」「青春の笛」など農民を素材に写実的な手法で山梨の風俗と人情とを描いたが、とりわけ「断崖の村」は

勝堂穴山義平は御坂町八千蔵生まれ、松岡映丘の門弟で、新興大和画会に所属した。昭和六年第十二回帝国美術展で、長野県別所温泉別所神社の神木を画材にした「夕映えの松」が特選となり、第十四回にも「磯松図」が特選となった。以後帝展無鑑査となるが、第二十七回の「富士賛歌」は有名である。

大河内夜江は本名政宣、塩山市大藤の出身、菊地梨月に師事して、大正十五年帝展で、「秋の大原」をもって特選となる。南画のタッチと大和絵風の色彩とを統合した独自の世界を創造し、第八回帝展特選作、「たにまの春」は秀逸である。

戦後の学術

戦後の山梨の学芸文化を育んだのは山梨大学とその教授たちである。

初代学長安達禎は明治十七年仙台市に生まれた。浜松高等工業学校長、旅順工科大学長などを歴任、昭和二十四年から山梨大学学長に就任して、全国から有能な教授を招いて、草創期の山梨大学の経営に努力した。醸酵化学研究所の附置など、山梨の産業の振興にも貢献している。

こうした安達の指導下で山梨の自然科学の開発につとめたのが矢崎為一。美学、芸術学的視点を山梨文化界に導入したのが井上政次である。

矢崎為一は明治三十五年甲府市八日町生まれ、東京大学理学部助

手から理科学研究所に移り、仁科研究室の主要メンバーとしてサイクロトロン建設につとめ、昭和二十四年、故郷山梨大学の教授となる。原子核理論や宇宙線の実験で活躍、昭和四十一年退官後は東海大学教授となる。なお論文には「ウラニウム原子核非対称小分裂」などがある。

井上政次は阿部次郎門下の秀英で、明治三十五年、中巨摩郡敷島町安寺で出生。日本美術史の研究と山梨美術の育成に生涯を捧げた。著書には昭和十六年日本評論社刊行の「大和古寺」、昭和二十三年同社刊の「関東古寺」などがあり、とりわけ「大和古寺」は和辻哲郎の「古寺巡礼」と双壁をなす日本美術史の名著である。

翻記にはニーチェの「反時代的考察」岩波書店、ボザンケ「美学通史」雄山閣などがあるが、その執筆分野は広く、河合栄治郎編の「学生叢書」や、人生論読本「阿部次郎」など教養随筆や人生論などをも執筆している。

山梨師範学校時代から戦後の山梨大学へかけて教務担当主事を務め、その後高校長に転出、全国高校長会常任理事などを務め、高校長を退職後は山梨県立女子短期大学の教授となった鳥居礼三もまた戦後山梨大が山梨の文化界に送った偉材である。専門は経済地理学で、「山梨の地理」などの編著があるが、鳥居の影響はその学術より教育者としてのそれの方が山梨の教育文化に多い。

広瀬元恭らの先導でスタートした山梨の近代百年の掉尾を飾るものは元恭の生家に近い櫛形町曲輪田生まれの内藤多仲である。明治

十九年六月十二日生まれ。東京大学から米國留学、大正十三年工学博士となり、翌年早稲田大学工学科長に就任、建築家としても有名で、貯蓄銀行日本橋支店、第十銀行東京支店などは内藤の手になるものである。

著書には建築耐震、電気溶接、建築材料学などがあり、日本建築学会会長などを歴任した。昭和四十五年没したが、その自邸は遺言により「内藤会館」と称して早稲田大学に寄付されている。

（山梨県教育センター研修主事）



人物を中心とした

文化郷土史

—長野県—



塚田正明

長野県は、幕末以来、わが国の近代化に貢献した人材を輩出してきた。郷土にあってその文化の向上に寄与した人物、郷里を出て中央各所に大きな足跡を残した人物、まことに多士済々である。そして、かれらが直接間接郷土におよぼした感化影響によって、多くの後輩が、有為の人材としてそだち、こんにちも県の内外で活躍している。

まず、これら人材の進出した活動分野をみると、概して政治・軍事・実業方面より教育・学問・芸術の世界により多くの人物を出しているのが注目される。これには、一般的にいって、明治の新政府が討幕を主導した西南雄藩の出身者でしめられ、その後藩閥政府が支配し、陸海軍も薩長藩閥に牛耳られてきたため、他藩出身者の進出が困難だった事情が指摘できよう。ことに幕末信州の諸藩は、松代藩（真田）をのぞき、ほとんど譜代ないしこれに準ずる大名で討幕にふみきれず、最後まで日和見的態度におわり、松代藩ですら、勤王に藩論の統一できたのはよくよくの最終段階になってからで、信州諸藩は明治維新に積極的役割をはたさなかったのである。また、実業界にしても、そこには、江戸時代以来の豪商や藩閥権力と結託した政商、やがては財閥が君臨していた。しかも、幕末信州の産業経済は、東山養蚕地帯の一環として、なお中進的發展段階にとどまり、蚕糸業の興隆をもって重きをなすのは明治時代も半ばをすぎたからのことで、その後とても戦前までは製糸業と若干の紡績業のほか、内陸という立地条件の不利から、みるべき近代産業がおこらず、農業人口六〇％余という農業県にすぎなかった。そもそも長

野県人が実業界に進出しうる経済的基盤ないし背景は、きわめて弱体だったのである。多くの俊秀が、活躍舞台を文化面の諸分野に見出し、刻苦勉勵その才能を発揮したのも、自然の成行きといわねばならない。

それに、長野県人には「信州人気質」ともいふべき共通の気風ないし性格がある。狷介で妥協をゆるさず、孤高を潔しとするところがあり、また、寡黙実行よりも理窟すきで理想家肌のところがある。だから、性格的にも政治家・軍人・実業家などにはむいていないのである。だが、それらの気質・性格も、魅力ある個性、明晰な論理的知性や批判精神、敏感な美的感受性や創造性が物をいう教育者・学者・ジャーナリスト・芸術家等にとっては、かえって積極的な資質といふことができる。長野県が文化面の諸分野に頭角を現わす人材を輩出してきたのも、こうした性格的素因に負うていることは否定できない。ただ、長野県人の人物評でよく指摘されるように、いずれもその道の一級的人物ではあっても、その統率者となる器量にかけている。むしろ、政界の小川平吉・財界の後藤慶太・学界の藤原咲平のような、スケールの大きい人物もいないではないが、総じて清濁あわせのむ抱容力のある親分肌の人材にとぼしいことはたしかである。それは、あたかも、戔々とした峻峯が雲表にそびえつらなる信州の山容にもなぞえられる人物群像である。

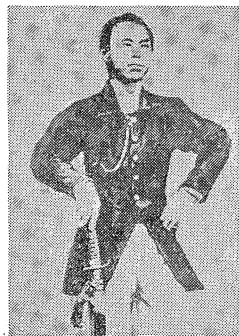
—黎明期—

近代の黎明期、幕末から明治初期にかけて信州の生んだ代表的人

物の筆頭は、松代藩の佐久間象山（一八一—一八六四）である。

かれが一朱子学者から後世に名をのこす先覚者となったのは、もとより卓抜した才能に負っているが、天保十一年（一八四〇）勃発したアヘン戦争の衝撃から天下の安危に国家意識に目覚めたこと、また藩主真田幸貫（松平定信の二男）の知遇をえ、幸貫が同十二年老中となり海防を管すると、顧問に重用されて西洋事情の調査と海防の献策を命じられたことから、世界の大勢に開眼できたからだ。かれは江川英龍に西洋砲術を、黒川良庵に蘭学の手ほどきをえたが、晩学ながら非常な努力で自学自習したのであった。その新知識は万般にわたっていたが、西洋自然科学の朱子学の「理」をもつてよく理解し、しかもこれを实地に験してみなくてはたまなかった。だから、かれの開国論は、このような知識によって、わが国力の到底及ばぬことをかれは自覚し、むしろ国を開いて外国の長所を撰取し、殖産興業・教育の刷新等により国力を培養することが急務であり、その上で国防の備を厳にし、外敵の窺察するを未然に防ごうというにあった。その遠識は、まことに時流を抜いていたのである。ただ、象山は、政治的には幕藩体制維持の改良派にとどまり、西欧民主政治を理解できず、天下安危を前に、朝暮は争うべきではなく、公武合体してこれに対処しようとしたのであった、かれは元治元年（一八六四）七月、京都で尊攘派の凶刃に倒れたが、結局、政治家ではなく、思想家・教育者であった。人柄は狷介不羈、過剰なまでの自信、その孤高さは信州人の典型であった。

小象山の称がある赤松小三郎（一八三一—一八六七）は、上田藩の下級藩士の家に生まれたが、一八歳で江戸にて幕臣内田弥太郎



赤松 小三郎

駐留の英国士官について英学や英国式兵学を学び、藩政や幕政の改革に上書するところがあった。慶応二年（一八六六）一旦藩をで京都に私塾を開き英国兵学を教え、かたわら英国兵学書の翻訳にしたがったが、薩摩藩に招かれて軍事師範となり、東郷平八郎はじめ後のわが国陸海軍の将師となった人材を教えている。翌三年九月、帰藩命令で帰らんとするや、すでに討幕に決していた薩摩藩は、かれのような才幹ある人物を幕府方にまわすことをおそれ、九月三日桐野利秋らをして京都東洞院通り五条近くの路上で斬殺させたのであった。享年三七歳の若さであった。象山はかれに一度会っており、文通もしていたが、かれは蘭学から英学に進み、象山に欠如していた議会政治の理解をもち、慶応三年五月松平春嶽に政治の一新を建白した中で、議政局を設けて上下二局による議会政治を提唱している。かれの年齢をもつてしたらと、まことに惜しむべき人材であった。

この時期にわが国洋画界の先駆者となった川上冬崖は上水内朝陽村（現長野市）の農家の出であった。養家先を転々として江戸に出、一九歳のとき四条派の大西椿年に弟子入りしたが、かたわら蘭学を

学んだ。二五歳、その才を見込まれ御家人川上家の養子となり、幕府蕃書調所に仕出、ついで絵図調出役となった。かれは蘭書や銅版画等によって洋画の遠近法や陰影法を学んだ。明治政府になって、絵図や地図作成をもって大学南校・文部省・陸軍省等を歴任し、ために明治十五年参謀本部の秘密地図（横須賀軍港図）紛失の責任を感じ自殺する非運に終ったが、かれが明治二年（一八六九）私塾「聴香読画館」を開いて洋画の鼓吹にあたったり、洋画学生を育成したことは、没後その弟子小山正太郎の不同舎によって継承されて、かれの洋画界に果たした先駆的役割としてわが国洋画界史上高く評価されている。

また、幕末の信州は平田派国学の盛んな地域であり、王事に尽瘁し王政復古をみたものの、新政府が西欧文化の摂取に転じたため志をえず、国学の道を完了した一群の人材がいる。その代表として、岩村田藩の角田忠行（一八三四～一九一八）と諏訪藩の飯田武郷（一八二七～一九〇〇）があげられる。角田は脱藩して足利尊氏の木像梟首事件などに活躍、王政復古後は一時皇学所監察・学制取調御用掛等に出仕したが、その後は、もともと神官の出であったため、加茂神社官司・熱田神宮司等に歴任、ことに熱田神宮の復興はかれの功績に負っている。飯田武郷は、高島藩勤王党の思想的指導者で、岩倉具視に通じて維新に画策し、赤報隊相楽総三の首を盗みだし葬ったことは有名である。かれは学究肌で、皇学所御用掛を拝命したが、高島藩に皇学校が設けられると、辞して皇学校教授となった。その後東京大学・皇典講究所・国学院・慶応各大学で皇学を講じたが、畢生の大著「日本書紀通釈」をもって知られている。平田派ではないが、水戸学から独自の皇学に進んだ松代藩の長谷川昭道（一八一五～一八九七）も逸することができない。かれは象山の

政敵であったが、藩学文武学校生みの親であり、戊辰に際し、藩論を勤王に統一し、松代藩を信州勤王方の触頭としたのは、かれの努力によっている。王政復古後維新政府によって重用され学校掛となり、学制について建議するところがあった。また、松代藩・県政の行政を執掌し、松代県が旧長野県に合併されたとき県令に擬されたが辞している。かれの主著に「皇道述義」がある。中国古代制度史で知られる飯島忠夫はその孫にあたる。

一方、藩学の師範や私塾の師匠として、また新しい学校制度への引継役として、明治時代に活躍する人材を育成した人びとを見ずしてはできない。その代表的人物の一人は松代藩の山寺常山（一八〇六～一八七八）である。かれは象山と鎌原桐山の同門であり、数少ない郷党の同志であり、ともに藩政改革にあたった。また町奉行・郡奉行・鉄砲奉行助役また文武学校掛となった儒者である。明治四年七月、長野県学校が妻科村（現長野市）正法寺に開校するや、招かれて教官の中心となっていた。一人は高遠藩の中村黒水（一八二〇～一八八四）で、中村家は高遠藩に医官・儒官としてつかえたが、父中保（元恒）は古学派で実用の学を重んじ、藩の学風を振興した。冤罪で監居中、郷土の史料「路原拾葉」を編輯した。黒水（元恒）は、父の遺風をうけ藩校進徳館の設立につくし、その師範となり、洋学を採用している。廃藩後は筑摩県に出任、県学の創設にあたり幹事兼教授をつとめた。晩年は「路原拾葉」（一四〇巻）の完成にささげた。とくに高遠藩字は人材を生んだことで有名である。もう一人、木曾福島山村氏の学問所菁莪館学頭武居用拙（一八一六～一八九二）も無視できない。かれの名がこんにち憶起されるのは、明治三年菁莪館が廃止となり、木曾谷をさって安曇の平に出て、安曇の野に燃えさかった自由民権運動に啓発的役割を果たした

からだ。かれは髮医社の名付親であり社員でもあった。また筑摩郡新村の作新学校・洗馬村（現塩尻市）の克己学校あるいは安曇郡豊科村（現豊科町）の成新学校等で変則科によって青年教育にしたがった。成新学校は用拙の命名で猶興義塾ともよばれたが、松本の師範学校とともに民権思想を培養した。

二 明治期

この時期は、新時代を迎えた信州の下級士族や豪農商の有為な青年たちが、中央に広い活動舞台を志向し、県内とすれば、近代的諸制度の整備に有能優秀な人材を迎え入れ、後半期ころからは、蚕糸業によって経済的基盤が成立することとあいまって、長野県民としての郷土意識をもようやく高まり、郷土に眼が向けられてくる時代で、「信濃の国」の出現がそれを象徴していた。

この時代を代表する人材をまず中央志向的な人物からそれぞれ文化の分野ごとにあげるならば、教育界では辻新次・伊沢修二・沢柳政太郎の三人であろう。辻（一八四二～一九一五）は、松本藩士の家に生まれ、文久二年（一八六一）藩書取調所に入り蘭・仏語を学び西欧近代文化にふれた。維新後大学南校校長、ついで文部官僚として学制の固定にあたり、果進して明治十九年文部次官となった。また十六年大日本教育界を創立、初代会長になっていた。伊沢（一八五一～一九一七）は高遠藩士の家に生まれ、進徳館に学び、明治三年中村黒水の推薦で藩貢進生として大学南校に入り、卒えて文部省に仕出し、二十四年辞職するまで辻とともに草創期の教育行政を指導したが、かれの最大の功績は学校教科に唱歌を採り入れ、小学校唱歌集をつくり、また東京音楽学校も創設して初代校長となるなど、近代音楽教育の基礎を築いたことであった。かれは、辻の温良

な性格に對し、狷介ですぐ上司と衝突し、ために次官にも大學總長にもなれなかった。警視總監・台灣總督・樞密院顧問官等となった伊沢多喜男は、かれの弟である。沢柳（一八六五—一九二七）は、松本藩士の家に生まれた。東大文科大学哲学科を卒業して文部省に入り、一時辭職して第二・第一各高等學校長となり、文部省に返りざいては普通學務局長となり、次官となった。この間、小學校令の改正・義務教育年限の四年から六年への延長準備等國民教育制度の根本をつくった。ついで東北大學初代總長・京都大學總長を歴任し、帝國教育會長にもなっている。かれは、小學校教育を重視したが、大正六年成城小學校を創立し、調和ある人格養成・個性尊重・自學自律等の教育を目標に、年來の理想であった自由教育を実現したのであった。かれもまた筋を通す信州人であった。

學界では、まず、人工ガンを世界ではじめてつくった山際勝三郎（一八六三—一九三〇）であらう。かれは上田藩士山本家に生まれたが、非常な秀才で一七歳で江戸の藩典醫山際家に養子に入り山際姓を冒した。明治二十一年東大醫學部を卒業すると、周囲のすすめの開業醫とならず、病理研究の道を選んだ。二十四年助教授、三年のドイツ留學をおえ、二十八年三二歳の若さで教授となった。かれは留學中に世界的病理學者ウィルヒウに会い、そのガンの刺激説をきいていたが、大正二年、コールタールをウサギの耳にぬるガソリンを實驗にかかり、東北大農科大学を卒業した大學院研究生市川厚一獸醫士を實驗者として、肺結核を病うなかで、忍耐つよい實驗を重ねて、大正四年ついに成功したのであった。ノーベル賞は他にさらわれたが、世界の醫學界で山際・市川・タールガンこそ人工ガン第一号と承認されている。つぎに司法や法學の畑に人材をだしていることだが、その筆頭は、大審院長となった横田秀雄（一八六二—

一九三八）である。かれは松代藩の上士教馬の長男に生まれたが、裁判官を天職とし、一代の名裁判官とうたわれ、数々の名判決をのこしている。たとえば夫にも貞操の義務ありとしたのもかれであった。かれは司法權の獨立のため權力に屬せず、行刑には教育刑主義をとり、また法解釈は社會の實狀に應じて推移すべきことを説いた。このほか破産法の權威で東大教授・樞密院顧問官となった法学博士加藤正治（一八七一—一九五二）は東筑摩郡生坂村（現明科町）の生まれであるが、また犀水と号する俳人でもあった。弁護士原嘉藤（一八六七—一九四四）は、須坂藩足輕小頭の家にも生まれたが、東大法科大学をでて一旦農商務省に入ったが、官界を去り弁護士となり民事を専門とした。日本弁護士會・國際弁護士協會の設立につとめた在野法曹界の重鎮であった。のち司法大臣・樞密院顧問官・同議長の要職を勤めている。もう一人弁護士として忘れられぬ人物は今村力三郎（一八六六—一九五四）である。かれは飯田在の農家の出であるが、二〇歳で代官人試験に合格し、しばらく長野地裁飯田支部判事などしたが、辭めて弁護士となった。かれは幸徳事件の弁護をし、その判決には後のちまで承服できぬとし、大正九年の森戸事件をはじめ思想事件の弁護にあたつて人權を擁護し、昭和九年の帝人事件にも弁護して檢察ファッショに抵抗、これに勝訴するなど、在野法曹の精神に徹した弁護士であった。

芸術界では、なんといっても文學の藤村、島崎春樹（一八七二—一九四三）である。中山道木曾馬籠宿の本陣に生まれた。その経歴は周知のとおりだが、かれは明治・大正・昭和三代にわたつて作家活動をつづけた文字どおりわが國の文豪である。だが、作家として

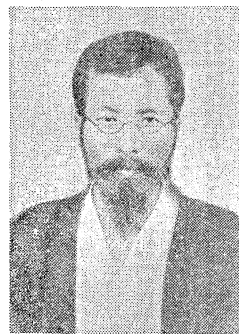
の地位は明治時代に確立している。かれは、明治二十九年九月から「文學界」に發表、翌三十年八月刊行の「若菜集」をもつて、詩人として文壇に出た。そして詩人藤村は日本近代詩の母として、その影響力が評価される。だが、旧師木村熊二に招かれた小諸義塾での沈潜時代をしめくつた小説「破戒」は、かれの詩人から作家への轉換であり、またわが國近代文學の圖期的作品とされている。以後、自然主義作家として、島崎家をめぐる自伝的作品を多く書きつづけ、最後の大作「夜明け前」で父正樹（青山半蔵）を主人公に結実をみせている。かれの作品・人間についてはいろいろな批判があるが、さすがに文豪の名に恥じないものがある。次に画壇では洋畫の村中不折・丸山晩露があり、日本画では菱田春草が代表的畫家であらう。不折（一八六六—一九四三）は、高遠進徳館に学び、江戸にて冬崖の門人小山正太郎の不同舎で洋畫を習つた洋畫壇草分けの一人である。第一回文展審査員（明治四十年）・帝國美術院會員（大正八年）となった。日本画もよくし、中國の史實を主題にした作品が多い。また書をよくした。晩霞（一八六七—一九四二）は小県郡東部町の出身で、若いとき南面の児玉果亭（一八四一—一九一三、下高井郡山ノ内町）に師事したが江戸にて洋畫に転じた。三宅克己らとともにわが國水彩畫の創始者の一人である。小諸義塾で藤村とともに教鞭をと



菱田 春草

で藤村とともに教鞭をと

り親交を結んでいる。春草（一八七四—一九二二）は飯田に生まれたが、高等科のとき中村不折に教わつてゐる。かれには絵の才能があり、次兄の推めで一七歳のとき美術學校に入ったが、校長は岡倉天心で一年先輩に下村観山・横山大観・松本出身の西郷孤月（一八七三—一九二二）らがいた。在學中からその天分はめきめきのび、卒業制作は優等賞となった。明治二十九年母校囑託となったが、三十一年の岡倉排斥運動のとき、岡倉擁護派の一人として、大観らとともに懲戒免職となった。これを機会に天心・大観と日本美術院を創設し日本畫の近代化にのりだしたのである。かれらは没線彩画「朦朧體」をもつて日本畫と洋畫の統一をはかうとした。大観とはよき友であり、またライバルであった。ともにインドに渡り、天心にしたがつてアメリカに行き、また欧州もまわり作品展を開いている。作品は海外では好評だったが、國內では依然として評判が悪く、一同都落ちして茨城県六浦海岸にこもつて苦悶した。かれの作品がようやく認められるようになったときはすでに眼疾を煩う身であった。そしてついに失明し明治四十四年九月一代の鬼才春草は三八歳の若き生涯をこした。かれの最高傑作「落葉」と「黒き猫」は重要文化財として、いまも異彩を放っている。春草に比すべき彫刻界の天才は萩原諒山（一八七九—一九一〇）である。かれは南安曇郡穂高町の農家に生まれた。高等小學を卒へ、井口喜源治の研成義塾に學んでいる。明治三十二年一〇月、相馬愛蔵夫妻の斡旋で上京し、小山正太郎の不同舎に通學し美術修業に入ったが、三十四年単身ニューヨークに渡り、苦學してアートスクールで學んだ。二年にして渡仏、パリでコランやローランスに學んだ。たまたま渡仏中の中村不折



江 尚 木 下

り、長野で弁護士資格を得ている。松本では中村太八郎（一八六八—一九三五）らと普通選挙同盟を結成し、わが国初の普通選挙の炬火をあげている。その最中県議選挙にからむ恐喝容疑で逮捕

と知り合っている。学費がきれ一年足らずでニューヨークへ戻り、二年余りで再びパリへ渡った。三十九年一〇月二六歳であった。ここでロダンの「考える人」に接して感動し、彫刻家になろうと決意しロダンの教えをうけた。かれの進歩は急速で四十年には各種サロンに入選している。かれはそのサロンの一つで日本の天平古仏像の展覧に感激して帰国を決意し、四十年一二月出発、イタリア・ギリシャ・エジプトで古美術を見学、翌四十一年三月帰国した。かれは奈良や京都の古美術をみてまわり、新宿角筈新町にアトリエ「忘去庵」を建て制作に当たった。だが、かれは帰朝後文展に三回出品しただけで、四十三年四月二〇日夜、突然多量に咯血して世を去った。三〇歳の生涯であった。しかし、かれの作品はわが国近代彫刻の先駆とされ、その代表作「坑夫」、「北条虎吉像」、「女」をはじめかれの作品と遺品が郷里穂高町の「礫山館」に展示されている。

この時期に社会的に活動した木下尚江（一八六九—一九三七）を落とすわけにいかない。かれは松本藩の下級士族の出であるが、松本中学から早稲田法律学校に学び、帰郷して松本で新聞記者になり、長野で弁護士資格を得ている。松本では中村太八郎（一八六八—一九三五）らと普通選挙同盟を結成し、わが国初の普通選挙の炬火をあげている。その最中県議選挙にからむ恐喝容疑で逮捕

され、無罪となったが、出獄を機会に上京毎日新聞に入社した。かたわら社会運動に入り、腐娼運動や渡良瀬川鉾毒事件で救護活動を行なった。そして明治二十六年日露開戦が迫ると、幸徳秋水・堺利彦らの平民社の反戦運動に参加し、毎日紙上に「火の柱」「良人の告白」など社会小説を書き、その戦争批判と平和の主張をもって青年たちの心をとりえた。平民新聞が弾圧と財政難から三十八年一月廃刊となると、尚江は安部磯雄・石川三四郎らキリスト教社会主義者と「新紀元」を発刊したが、三十九年五月母の死を転機に、日本社会党を脱し、「新紀元」の編集からも手を引き、十一月伊香保山中に籠居し、自伝「懺悔」、小説「霊か肉か」を書いた。そして四十年帰京して一切の政治運動から足をあらう、文筆生活に入っている。かれのこの転向については、かれの本領が転向前にあるのか転向後にあるのか、批判も様々であるが、かれがこの時代・社会にあたえた影響には少なからぬものがある。

一方、県内についてみれば、有能な他府県人を迎えて制度・機関・施設面に近代化が進められるとともに、共に働きあつたのはその指導のもとに育成された若い人びとの間に、県民意識も高まり、郷土の研究・その文化の向上に開眼してくるのは当然であったし、それを経済的に支えるものが蚕糸業の興隆であった。まず、郷土研究は、なお未分化の状況であったが、長野に長野博物館ができたのが明治二十八—九九年で、その中心人物は諏訪郡中洲村（現諏訪市）出身で東京高師の博物科を卒業、長野県尋常師範に奉職していた矢沢米三郎（一八六八—一九四二）であった。そして三十五年、河野

蔵（一八六五—一九三九）と協力信濃博物館学会を結成している。河野は矢沢と師範同級生で東筑摩郡島内村（現松本市）出身であった。ここに高山研究、動植物の生態観察などが行なわれるようになった。保科百助（一八六八—一九一一）も、また県下鉱物標本の採取を行なっている。また、郷土史研究も渡辺敏（福島県、一八四七—一九三〇）が、明治三十三年長野高女建設にあたって敷地から出土した弥生式土器（箱清水式土器）や境内から出土する善光寺瓦に注目して考古学研究的先駆をなし、また長野の大勧進はじめ旧家所蔵の古文書を筆写して史料集をつくるなど、郷土の歴史研究に先鞭をつけている。明治末期になると郡誌の編纂が行なわれるようになり、郷土の自然・地理・歴史等が研究されたのである。

一方、文芸方面では、上諏訪町（現諏訪市）出身の島本赤彦（久保田俊彦）（一八七六—一九二六）や東筑摩郡広丘村（現塩尻市）出身の太田水穂（貞一）（一八七六—一九五五）ら、長野師範生徒の短歌愛好者の間に、正岡子規の写生論などが新しい動きとして注目された。卒業したかれらは、それぞれ任地で歌道に励んだが、太田は松本に窪田空穂らと「この花会」という短歌会をつくっている。また、俳句も、子規の門下で東筑摩郡島内村（現松本市）の上原川三（一八六六—一九〇六）が、子規の俳句革新に共鳴、三十六年八月、松本で金県俳人大会を開いているなど、新しい短歌・俳句が県下にも興るうとしていたのである。

三 大正・昭和期

この時期は、前時期に芽ばえた郷土研究が各部門に分化し、開花

する。また教育面ではいわゆる信州教育の黄金時代であった。なおこの時期にも中央に活躍する人材は豊富であるが、かれらが郷土の人びと協力して郷土文化の発展に寄与しているのが注目される。まず、教育界では、たとえばクリスト者の、信仰による魅力ある人格をもって、後進に大きな感化を及ぼした人びとがある。その先駆者は明治三十一年南安曇郡穂高村（現穂高町）に研成義塾を開設して、農村子弟の教育にあたった井口喜源治（一八七〇—一九三八）であろうが、この時期では手塚縫蔵（一八八〇—一九五四）があげられる。かれは東筑摩郡広丘村（現塩尻市）の出であるが、長野師範在学中から長野教会日曜礼拝に通った。内村鑑三・植村正久に教えをうけ、その生涯、信徒としてかわらぬ信仰を堅持した。かれには国士風の気骨と信州人らしい独立不羈、筋を通すところがあり、東西南北会（明治末年）の提唱者の一人であったが、信仰による愛とあいまって、後進に大きな感化影響をあたえた。長野県の教師は、当時、信仰にかぎらず哲学・芸術・学問のなにか一つを専門に身につけることで、自己の人間を鍛錬し人格を磨こうとした。教育は人であるという信条からであった。だから、他にも挙げるべき人物はあるが、一斑をあげるにとどめたい。

郷土研究の代表的人物として、三人の地方史家がでている。一人は栗岩英治（一八七八—一九四六）である。かれは下水内郡外様村（現飯山市）に医師の子として生まれた。その半生は記者・政治家と波乱にみち、その足跡は朝鮮・満洲・樺太に及んだ。この人生経験は後半生の郷土史研究に多角な視点をあたえ、いわゆる栗岩史学の特色となった。かれには主著はないが、信濃講座による臨地調査

は「わらじ履きの史学」の普及に役立った。また四十三年完成した「信濃史料」の生みの親であった一人は市村威人（一八七八—一九六三）である。かれは下伊郡山本村に生まれた。農家の長男で病身だったため高等小学校も四年で退いている。講義録で勉強し、二一歳のとき県師範学校第二種講習科に入学でき、五月で修了、教員となった。かれは当初地図の作成に熱中している。郷土史に取組んだのは大正元年（三五歳）のときからで、下伊郡資料蒐集委員となつたのが契機であつた。以来八六歳で亡くなるまで郷土史一筋に終始した。その著書は多いが、その主著は五か年を要して六一歳のとき完成した「建武中興を中心とした勤皇史攷」（実は「信濃荘園の研究」であり、その学術的価値はいまも高い。その他、伊那史料叢書の編纂、「下伊那史」（古代まで三巻）伊那谷関係数種の著書がある。昭和三十六年、多年の地方史研究の功をもって紫綬褒賞の栄に浴した。もう一人は一志茂樹（一八九三—）である。北安曇社村（現大町市）の仁科神明宮社職の家に生まれた。長野師範を出て教員となつたが、長野付属小学校の訓導時代は白樺派の一人であつた。当時は文学や絵画に没頭した。ついで地理学・民俗学等と学んで歴史に入ったが、その史風は栗岩史学に近い。また親交があつた。「古代東道の研究」で学位を得たが主著の刊行をみない。栗



市村威人

岩の始めた「信濃」を第二次・第三次と現在も月刊を続け、信濃史学会長として、本県地方史学の最高指導者である。栗岩の遺跡をついで「信濃史料」全三一巻三二冊の刊行を終え、いまた「長野県史」全四〇巻の編纂刊行を主宰している。かれは、中央学者の地方史料を求めるテーマ研究や文獻中心のデスクワークに反対して地方史の独自性を主張し、その方法論も文獻のみに頼らず、考古学・民俗学・地理学すべてを駆使しての地方史像の構想を主張してやまない。昭和四十一年、市村につづいて紫綬褒賞を受賞、ついで四十五年勲四等瑞宝章の叙勲に浴した。

地理学の代表的人物は三沢勝衛（一八八五—一九三七）である。更級郡更府村（現長野市）に生まれ、学歴は高等小学校卒にすぎないが、猛烈な勉強家で十数種もの資格を得ている。大正四年地理科中等教員の検定試験を通り、九年諏訪中学に赴任して昭和十二年没するまで地理学の研究に没頭した。かれは風土性に立脚した郷土地理を主張し、「新地理教育論」「信濃の風土産業」等の名著がある。かれの授業は、教科書を使用せず、地図帳と自分の調査した郷土資料を図化したものを使い、このような郷土の地理的事象を教材とする授業は生徒に魅力があつた。かれの研究領域は自然・人文地理にかぎらず、歴史・土壌学・農学・林学・植物生態学・天文学等の教養をもっていたため、その授業により生徒の学問研究への意欲をわきたたせ、教え子のなから多くの学者が育っている。

考古学・民俗学も盛んであるが、栗岩以下の三人や三沢ほどの指導的人物はまだでない。

芸術界では、なんといっても短歌と俳句であるが、信州は短歌王

国と称されるがその直接の要因は赤彦・水穂の指導と影響によるものである。赤彦は、周知のとおり、短歌において写生と鍛錬道を説いた。これは、かれが短歌の道と教育とは一体であるとの体験にたつており、自らは歌人であるとともに、すぐれて教育者だったからだ。かれは大正三年四月上京して「アララギ」の編集にあたり、専門歌人になつても「信濃教育」（信濃教育会機関誌）の編集を引受けたりして、信州教育とは切れなかつた。信州はアララギの本拠地といわれるほど会員が多く、赤彦の下に土田耕平・森汀川・今井邦子・四賀光子など一流の歌人がで、いまなお信州歌壇の主流である。太田水穂は赤彦と長野師範で同級で卒業し、一緒に詩歌集「山上湖上」を出したほどだったが、歌の道はしだいに別れていき、水穂は万葉調から象徴的歌風に転じ、やがて新古今的な独自の境地に入つていった。水穂は赤彦より早く明治四十一年に上京したが、かれの「潮音」の県下への影響はいまなお存続している。俳人としては、小諸の出身である白田亜浪（一八七九—一九五二）の「石楠」の幹部であつた須坂市の栗生純夫（一九〇四—一九六二）が「科野」を発行し、また、一茶の研究家として知られた。一茶の農民詩人としての新生面も開拓した。

○

ここで、この時期に中央で活躍した人物をあげると、枚挙にいとまないほどだが、代表的人物をあげれば、教育者としてベスカロッチの研究の権威長田新（一八八七—一九六二）、学者としては結核の権威熊谷岱蔵（一八八〇—一九六二）、お天気博士で人氣のあつた東京天文台台長藤原咲平（一八八四—一九五〇）、哲学者では波多

野精一（一八八七—一九五〇）、務台理作（一八九〇—）、国語学者西尾実（一八八九—）、仏文学者吉江喬松（一八八七—一九四〇）、歴史家では今井登志喜（一八八六—一九五〇）農村社会学の権威有賀喜左衛門（一八九七—）、考古学の八幡一郎（一九〇二—）、司法官の最高裁長官横田正俊（一八九九—）、出版関係の岩波茂雄（一八八一—一九四六）、ジャーナリストでは丸山幹治（一八八〇—一九五五）、清沢冽（一八九〇—一九四五）、作家では藤森成吉（一八九二—）、平林たい子（一九〇五—一九七二）、詩人で日夏耿之介（一八九〇—一九七二）、歌人・国文学者の窪田空穂（一八七二—一九六七）、演劇の松井須磨子（一八八六—一九一九）、演劇史の河竹繁俊（一八八九—一九六七）、音楽では日本のフォスター中山晋平（一八八七—一九五二）、画家では中川紀元（一八九二—一九四七）、小山敬三（一八九七—）、彫刻家では清水多嘉示（一八九七—）、漫画家の近藤日出造（一九〇八—）等まことに多士済々といわなければならぬ。ただ、務台理作や西尾実が教育界に助言をあたえ、今井登志喜や八幡一郎が郷土史や考古学で地方研究者を指導し、小山敬三や清水多嘉示が信州美術界に県展審査員として後進を育成するなど、赤彦や水穂がそうであつたように、郷土文化の向上発展に直接大きく貢献していることは、前代と異なるところであり、注目に価する。

（長野県史編纂委員）

人物を中心とした

文化郷土史

—岐阜県—



船戸政一

風土と人間

近世の美濃は、多くの領主に分割支配された。その上、隣国には御三家の尾張徳川家領、近江彦根に譜代の雄井伊家領が配置された。それは「美濃を制するものが、天下を制する」という言事のように、美濃が古来たえず東西両勢力の接点にあったことによるものと思われる。江戸幕府のこのような政治支配は、いきおい「最も恰愴な処世術は、大勢を觀望して、その有利に就く」という美濃人を形成する大きな要因にもなったといえらるる。

元和元年（一六一九）十六歳で商人となった中島面以は、木曾山の木材を商い、一代にして美濃随一の豪商となったが、それは尾張徳川家の御用商人となったが故であった。また、近世末の美濃綿の渡辺佐左衛門・美濃焼の西浦田治・美濃紙の武井助右衛門など、いずれも尾張さまの力をバックに巨額の富をなした美濃の商人であった。

美濃の西南部は、木曾・長良・揖斐の三大川が合流する低湿な輪中地帯である。慶長十七年（一六九二）美濃国代官となった岡田普同や元禄十二年（一六九九）美濃郡代となった辻守参らは、築堤や川普請に力を注ぎ、美濃の治水施策の基礎をつくりあげた。だが、尾張藩「御困堤」や近世中期以降の新田開発は、美濃側にますます洪水の被害を多くし、この地域の人びとの生活と人間形成に大きな影響を与えた。それは「輪中根性」ともいわれるもので、洪水と輪中对輪中の相剋の中で、土地と家を守り続けなければならない生活態度であった。

美濃が小領主に分割支配されたことは、領主財政が窮迫した幕

末・維新期に及んで、多くの人材を出すことになった。東美濃岩村藩の改革に当たった丹羽瀬清左衛門、西美濃大垣藩の改革を進めた小原鉄心、苗木藩の廃仏毀釈を断行した青山直通らがそれである。

さらに文化面でも、舊門の高弟で美濃藩を起こした各務支考、漢詩文を学びのちに白鷗社を結成した勤王の志士梁川星巖、その同人で五十三か村の給庄屋を務めた村瀬藤城、星巖の弟子棚橋天籟（天保五〇明治四三）らがいる。棚橋天籟は漢学者であったが、諸国の勤王の志士と交遊し、梅村速水を初代高山県知事に推挙するなど政治手腕にもすぐれていた。明治二十一年には尋常師範学校長となり子弟の教育に当たった。また、本草学から漢方医、西洋医学を修めた飯沼慾斎もその一人である。

※

※

近世の飛騨には、慶長五年（一六〇〇）金森長近が封ぜられたが、元禄五年（一六九二）金森頼皆が移封されると、それ以後は幕府直轄地すなわち天領となった。

しかし、飛騨は「人余って食足らざる下々の国」といわれ、鉱業、林業のほか見るべき産業もなかった。そこでいきおい、金森氏は鉱業に、歴代飛騨代官は林政・民政に治政の重点をおくこととなった。なかでも、幕府の享保の改革遂行を背負った長谷川忠国・忠崇父子は、とくに郷民の生活安定に力を注いだ。忠崇は飛騨専任代官としてはじめて高山に在勤した代官で、「石代闘合法」や「人別米制度」を実施した。彼は俳歌を好み、千家流の茶道にも通じていたばかりか、延享二年（一七四五）には「飛州志」をも著した。この著述は、後世飛騨郡代の施政指針の一つとなったばかりでなく、

独特の風土と人間の中に育つ飛騨文化の主流ともなっていたのである。すなわち、「天領飛騨人」の意識は、このときに培われたものともいえる。

「斐太後風土記」や「運材図絵」など多くの名著を残したは、富田礼彦（文化八〇明治九）飛騨の国学者田中大秀の高弟で、明治維新のときは高山県判事となった。梅村騒動の責任をとって辞任したが、彼の生涯には「天領飛騨人」の姿をみる事ができる。

飛騨には、わが国の一揆史上特筆すべき大事件が起こっている。大原騒動と梅村騒動がそれである。ここにも「六六州人国記」や「飛州志」が「生得は石鉄の性」と記す飛騨人の側面を見ることが出来る。

高山町は、明治のはじめまで、美濃・飛騨を通して最大の都市であった。高山三町に住む町衆が、飛騨の商業経済から町文化までいっさいをその手にぎっていた。金融・酒造業の加賀屋長右衛門などは、儒学・心学を修め、詩を赤田臥牛に学ぶかたわら、木内石亭と親交を結び、石器の採集と図解をなしたほどである。今も華やかな高山祭り、この町商人の財力と飛騨工の技術が相まって生まれたものである。

明治以降の「岐阜県の文化郷土史」を考えると、どうしてもそれ以前に遡らねばならないところに、岐阜県文化郷土史の一つの特質があるといえる。

※

※

新しい時代の風潮は、例外なく岐阜県にもおよんだ。美濃では、「西の大垣・東の岩村」といわれる二つの旧藩がその母体となっ

た。明治のはじめ、大垣藩の藩校「敬教堂」には一五〇人の子弟が学んでいたが、ここに学んだ人たちが新時代の新しい手となったのである。まず、明治十三年には大垣士族が中心になって「濃飛共立協会」を結成し、自由民権運動ののろしをあげた。この気風を受けた大垣町では、同十四年に「興文講社」を結成して、教育振興のために四万円の基金を集めた。こうした環境の中から東京帝国大学総長となった松井直吉、真宗大学長となった南条文雄など、明治の初めから多くの学者が生まれた。また、鉄道院総裁松本莊一や政治小説家の戸田欽堂なども大垣の生んだ英才である。

一方、岩村藩は、江戸時代を通して美濃一帯の学問の中心地であった。藩校「知新館」の創設は、元禄末年に遡るほど全国的にみても古く、藩主の三男林述斎や藩家老の子佐藤一斎などは「昌平黌」の教授にまで出世した。幕末期に「知新館」の教授となった平尾信亨の子下田歌子は、明治の女性教育者の第一人者であり、歌人としてもすぐれていた。また、植物学の三好学も岩村の出身である。

この二つの地域と飛騨



坪内逍遙

高山の文化を素地として出版した近代岐阜県の文化は、つぎつぎとすぐれた人物を生んだのである。明治新文壇の先達となつた坪内逍遙（安政六〇昭和一〇）は、美濃太田

（現美濃加茂市）の代官屋敷で生まれた。「ひつじ年の生まれ、紙食い虫」などと家族にいわれたが、明治十四年東京帝国大学本科の学年試験に失敗し留年、それというのも、芝居すきで寄席に通いつづけた楽天主義のおかげであったという。この年、彼はわが国ではじめてという写真主義の小説「当生書生氣質」を発表した。

「日本上代史の研究」「文学に現われたる国民思想の研究」など、実証的で科学的な歴史学の研究を続けた津田左右吉（明治六〇昭和三六）は、加茂郡（現美濃加茂市）に生まれた。また、日本画壇の重鎮前田青邨（明治一八〇現在）や陶芸家の荒川豊蔵（明治二七〇現在）らは東美濃に育ったのであり、ともに文化勲章を受章した人たちである。

世界的名著といわれる「解析概論」を著した数学者高木貞治（明治八〇昭和三五、昭和一五、文化勲章受章）は西美濃の本巢郡に生まれ、伝統的な日本画に更に新しい画法を加えた川合玉堂（明治六〇年〇昭和三二、昭和一五、文化勲章受章）は、幼少時代を岐阜で過ごした。



牧野英一

刑法学の牧野英一（明治一一〇昭和四五、昭和二五、文化勲章受章）は、飛騨高山に生まれた。「よりよき刑法より、刑法のない社会こそ望ましい」と刑法における応報主義、客観主義を批判

し、目的刑主義、主観主義に立つ新理論を展開した。また彼は、「そもそも生活は、努力の連続である。その努力は、不完全なるものが完全化せんとするところに成立する」と著書の一節に記すが、自身もまた努力の人であった。飛騨の生んだ著名な政治家であり、法学者であった。牧野良三は彼の実弟で、売春禁止法が成立した当時の法務大臣であった。それに大垣出身の刑法学者岡田朝太郎は、彼の先輩であった。

文明開化と新聞

文明開化の波は、大垣と岩村にとどまらなかった。明治五、六年ごろから岐阜町や高山町、その周辺の地主の間に、新聞を媒体としてひろまっていた。当時の新聞は、高山町の区長船坂雅平が高山を開化せしめるため毎月一ノ日に戸長・割戸長を集め、「御布告公開ヲ提唱シ、且ツ新聞其他論説ヲ弁解シ、以テ知ヲ開キ、一層開明ニ進歩セシメン」と主張したように、治政の方向を見定めるものであった。県内には、当初いくつかの新聞が創刊され、明治の中頃まで開化の指導的役割を果たしていた。その代表的なものが、岐阜日日新聞と濃飛日報であり、多くの記者が活躍した。

鍵谷竜男は、可児郡久々利村士族で、明治十二年英風新聞を発刊、その後岐阜新聞編集長、岐阜日日新聞記者として活躍した。とくに明治十五年板垣退助岐阜遭難当時には、県下の改進黨主義の代表的論客となっていた。読売新聞の創刊に当たって中心的役割をなした子安峻は大垣藩士の家に生まれた。藩留学生として江戸に派遣され、砲術と蘭学を学んだが、のちに明治三年の横浜毎日新聞創刊

など少女雑誌を編集した藤村耕一など出版関係に逸材が出た。

文 芸

— 美濃派俳諧 —

美濃派の俳諧は、岐阜県に生まれた文芸として、近代以降もなお盛んであった。美濃派は山県郡北野（現岐阜市）出身の舊門俳人各務支考にはじまる。この派の俳人は「獅子門」とよばれ、道統宗匠といわれる統率者のもとに固い団結を保ってきた。美濃派の特色は、伝統の保持と平易な庶民性にあるといわれる。しかし、このうちの庶民性が特に問題とされ、時には「田舎舊門」と批判されることすらあった。

昭和十二年発行の「獅子門俳人名鑑」にのる三七六人についてみると、農業一一〇人、商工業一〇三人、官吏・会社員五四人、僧侶・神官二三人、医師二二人、教師一六人、その他四七人となっており、美濃派は、地主・商工業者および一部知識人にその基礎をもち、支考の「俗談平話を正す」という俳諧理念を守り続けてきたものといえる。また、全国的に同門の俳人が分布していたのも美濃派の特徴の一つである。昭和十二年には愛知・福井・山口・三重など三府十二県にわたっていた。江戸時代の中ごろ、美濃派は以哉派と再和派に分かれたが、それぞれ道統宗匠のもとに発展した。明治以降の道統宗匠も、やはり地主層に多かったが、異色の道統宗匠として、以哉派の二十八世森孫一郎がいる。森は第三高等学校教授、学習院教授を歴任した学識者であった。

— 俳句と和歌 —

にあたってこれに関与した。同七年漢字にはすべてカナをつけ、庶民的報道紙を目ざした読売新聞を発刊し、同十一年には社長となった。なお、彼は日本銀行の創立にも参画するなど、広く経済活動も行った。

武蔵寅一は、大正三年岐阜電灯争議のとき、岐阜日日新聞の青年記者として電灯会社の態度を鋭く追求したが、数年にして読売・東朝・大阪時事などに転じた。朝日新聞在社時代は、論説委員として「天声人語」欄を担当し、名声を高めた。なおその後、同欄を担当したのが飛騨の吉城郡神岡町出身の荒垣秀雄であった。特異な新聞記者・評論家に尾崎秀実がいた。彼は明治三十四年東京に生まれたが、故郷は岐阜県加茂郡であった。朝日新聞社勤務中に、中国革命の研究に専念したが、昭和十九年にはいゆるゾルゲ事件に関連して処刑された。その獄中書簡集「愛情は降る星のごとく」は、第二次大戦後ベストセラーの一つとなった。このほか新聞記者として、また地方文芸の振興に努力した人物に小木曾旭晃がいる。

日本の開化と出版、書籍業に貢献した人物に早矢仕有明がいる。彼は慶応三年（一八六七）慶応義塾に入り、福沢諭吉に師事した。そしてその影響で医業から商業に転じ、横浜に丸屋商社（後の丸善）を創立して、洋書、薬品、医用器械などの輸入販売を行なった。その趣旨は、すべて西洋のものを取り入れることによって、文明開化を目標とするものであった。このほか、明治九年東京で、三宅雪嶺を編集責任者に金港堂書籍を経営した羽島郡出身の原亮三郎、同三十四年東京宝文館を設立した大桑久吉、また、博文館で少年雑誌「少年世界」を編集した木村少舟、宝文館で「令女界」「若草」

正岡子規が俳句の革新運動を起こしたころ、岐阜県からは五十川茶村・五十川鴨脚子・松原夢園などがでた。さらに、これに続く者として、柘植潮音と塩谷華園（鵜平）がいた。潮音は大垣町に生まれ、俳人として活躍したが、子規が短歌革新を進めてからは、短歌にも力を入れ、歌人として名をなした。したがって新しい俳句で県下に影響をもったのは、塩谷鵜平であった。

塩谷鵜平は明治十年（一八七七）稲葉郡鏡島村（現岐阜市）に生まれた。明治三十一年早稲田専門学校卒業後、俳句に専念し、子規の没後は一時虚子に近づいた。しかし、のちには碧梧桐門下の重鎮となった。大正二年（一九一三）「土」を創刊し、これを中心に岐阜で新傾向の自由律俳人の育成にあたった。そのため、大正から昭和にかけて多くの自由律俳人がでた。幕末の県下で、最も有力であった和歌の流派は、宣長の学統をひくものであった。その代表が飛騨の田中大秀と美濃の田中道磨である。後世まで岐阜と愛知が和歌の盛んな地とされたのもその影響であった。

明治期の代表的歌人としては、恵那郡岩谷出身の下田歌子と本巢郡北方で生まれた矢部正子があげられる。明治後期には、小木曾旭晃ら多くの岐阜県関係者が、中部地区短歌誌の編集者や選者として活躍したが、なかでも明治四十二年に小木曾が編集者となって創刊した「教育新聞」は、多くの歌人を育てたといわれる。また、このころには、若山牧水の親友であった平賀春郊や高山の福田夕咲らの指導のもとで、新しい飛騨歌壇が育っていた。

昭和期に入ると、新進歌人が一時に頭をもたげたが、その現われが昭和三年の歌誌「砂丘」の復刊であった。

—文学—

大垣藩士の家に生まれた野村藤陰（文政一〇～明治三二）は、少年のころ江馬細香（頼山陽の弟子で詩文にすぐれた）に学び、十八歳で大垣藩校致道館の助教となり、敬教堂の教官にもなった。明治になって、大蔵省に出仕したが、やがて辞任して大垣に帰り、私塾を開いて多くの青少年の教育にあたった。彼は詩文に長じ、経史にも通じた大教育者で、県下に大きな影響を与えた。

また、厚見郡佐波村（羽島郡柳津町）に生まれた木蘇岐山（安政四～大正五）は、東都詩壇の諸名家とともに星吟社同人として詩壇の興隆に尽くし、また、大毎詩壇の選評を担当した文人であった。

明治新文壇の先達となった坪内逍遙（安政六～昭和八）は、加茂郡太田村（美濃加茂市太田）の生まれであった。このほか近代文学において活躍した人物には、森田草平（明治一四～昭和二四）や十和田操（明治三三～現在）がいる。森田は、与謝野鉄幹らの知遇を受け、また、「芸苑」にも参加したが、のちに夏目漱石に師事し、木曜会に出席した。明治四十年英語教師になったが、翌年教え子の平塚らいてうと情死を企てて失敗し、漱石に救われた。その後、東京朝日新聞に「煤煙」を連載して一躍世にでた。その他代表作に「輪廻」がある。十和田は、時事新報、朝日新聞記者をへて、昭和四年第二次「葡萄園」の同人となった。作品には「判任官の子」や「屋根裏出身」・「二階の無い学校」などがあり、その作風は心理主義的傾向をもつとともに、童話風の清純さを漂わせていて、人生の哀愴をユーモラスに描いたものであった。

現在明治大学教授の小島信夫は、大正四年岐阜市に生まれた。昭

山花袋の書生や代用教員を務めるかたわら、創作に着手し、明治四十四年に「酒」・「照江」を早稲田文学に発表した。漱石門下とも交わり、「白樺」にも接近して人道主義的傾向を強めた。大正五年に「受難者」を発表して認められ、やがて人道主義の限界を感じて、昭和二年には日本プロレタリア作家同盟に加入した。昭和九年高山に帰り、民俗考古雑誌「ひだびと」を編集、かたわら長編「山の民」を執筆した。

滝井孝作は、江馬より四年後の明治二十七年に生まれた。上京して俳句を学び、のちに芥川竜之介、志賀直哉らの知遇を受けて、創作活動に入った。代表作には「無限抱擁」・「折柴随筆」・「風物誌」などがある。文体は簡潔で、随筆や短篇のものが多く、芥川賞創設以来の選考委員で、昭和三十四年芸術院会員となった。

大正三年に飛騨の古川町で生まれた早船ちよは、恵まれぬ環境の中にあっても、はつらつと生きる若い人たちを描いた「キューポラのある街」を発表した。これはのちに日活で映画化され、マスコミの波に乗ったが、彼女は、社会の底辺にあってけなげに生きぬく人を書き続けている社会派である。

また、名古屋で「東海大学」を主宰している江夏美好は、早船ちよと同じ飛騨の出身で、鉢山の町神岡に生まれた。「東海文学」に連載した「下々の女」は、名もなく、貧しいが必死に生きる飛騨の女を描いた物語である。この作品は昭和四十五年に田村俊子賞を受賞した。

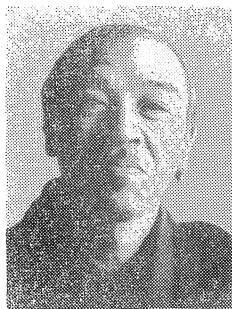
—書・画・陶芸—

県下の画壇には、すでに維新のころから秀れた人物がでていた。

和二十九年に代表作「アメリカンスクール」で芥川賞を受賞し、昭和四十年には「抱擁家族」で第一回谷崎賞を受賞した。浜本武雄の解説によると、小島文学の主人公は、アタフタと小走りに走り、わけもなく笑い、苦しくなると通行人に向って叫びたくなるという三つの癖を持っているのが、この不安定な人間を宇宙遊泳のような文体でとらえた小説であるとしている。まことに難解な小説である。このほか「長良川」で昭和四十五年直木賞を受けた豊田穰などもある。

飛騨では、旧幕時以来多くの文人がでた。幕末には、国学の田中大秀、漢学の赤田臥牛、それに地役人であった富田礼彦らが代表的人物であった。近代に至って福田夕咲（明治一九～昭和二三）や江馬修（明治二二）・滝井孝作らがでた。

福田夕咲は、野口雨情らとともに、早稲田詩社で新しい「詩境の開発、詩語の発見」に努力した。早稲田大学を卒業ののち、読売新聞をへて憲政新聞文芸欄を担当しながら、「文章世界」・「創作」などに詩を発表した。作品には流麗な調子と日本の詩情があふれ、高く評価された。大正三年に高山へ帰ってからは、飛騨文芸のリーダーとして詩や短歌・小説と幅広い創作活動を行なうとともに、後進の指導にもあたった。



福田夕咲

江馬修は、明治二十二年高山町に生まれた。田

書画の村瀬秋水・村瀬太乙・高橋杏村、水墨画の山田納斎がそれである。近代に至っては、明治画壇の最高峰といわれた山本芳翠がいる。彼は明治元年に京都の日本画家久保雪江に南画を学び、ついで、東京の洋画家五姓田芳柳に師事した。代表作として「日光の紅葉」・「浦島」などがある。

川合玉堂は、明治六年愛知県に生まれたが、九歳のとき、一家が岐阜の米屋町に移住して文具店を始めた。このため玉堂は岐阜で育ち、その上岐阜生まれの妻を迎えた。こんなことから岐阜を生まれ故郷のように愛し、公共事業に資金したり、画を寄贈したりしたが、こうしたことはあまり知られていない。昭和三十二年八十四歳で没したが、岐阜県関係の門下生には加藤栄三らがいる。加藤は昭和四十七年に川端康成の自殺後間もなく自殺した。

前田青邨は、明治十八年恵那郡中津川町に生まれ、三十四年に上京して、梶田半古に師事した。昭和四年の第十六回院展に出品した「洞窟の頼朝」は著名な作品である。このほかにも秀れた画家には、大垣生まれの大橋翠石、黒田清輝門下の長原止水などがある。

書道には、大野百鍊（元治元～昭和一六）・山本寛山（文久三～昭和九）など日本的な書家がでた。山本寛山は岐阜の松尾町に生まれ、明治三十年ごろ京都で修行した。詩を木蘇岐山に学んだが、のちに中国へ渡って、当時の中国書道の大家楊守敬や呉昌碩と交遊し、書法を研鑽した。晩年京都に移住したが、門下生は数千人といわれ、関西書道界を風靡した。

大野百鍊は、「筆を用うることとお刀を用うるが如し、刀の生命は刀先三寸にある。筆の生命も鋒先三分にある」として、もっぱら

軟毛長鋒の筆を用いた。大正十三年に帝国書道院の設立に努めるなど、わが国書道界の重鎮となった。

東美濃の焼物の歴史はきわめて古い。縄文、弥生の時代以後、須恵器の窯跡があり、平安・鎌倉・室町と焼物製作の絶えたことがない。しかし、もともと日本的特質をもつ桃山時代の志野・瀬戸黒・黄瀬戸・織部などが、この東美濃で作られたものであることがわかったのは、昭和五年のことで、荒川豊蔵が、可児郡大萱村（現可児町）の窯跡を発見してからである。これは日本陶磁器史上すばらしい発見であった。それ以後、荒川豊蔵は、志野焼の復興に努力し、独特の境地を開いた。

このほか近代の陶芸家には、不破郡赤坂（現大垣市）の清水温故、多治見の加藤土器萌、市之倉の加藤幸兵衛などがある。

学問

日本の近代的学問の発展に貢献した岐阜県出身者も数多いが、県内に在任し、実践と密着した研究によって、県下の学問、産業に貢献した人々が多くあった。

まず、郷土の歴史研究に情熱を傾けた人に神谷簡斎がいる。彼は可児・恵那などの郡長を歴任したが、晩年は、郷土史の研究に専念し、「新撰美濃志」を編集した。また飛騨の押上森蔵は、陸軍中將で、陸軍の兵器改良と増進に尽くして名声を残したが、明治十一年高山に帰り、郷土史の研究や史跡の保存など飛騨文化の向上に尽くした。明治二十八年、帝国大学文科大学に史料編纂掛が設置され、各地で史料採訪が実施されると、郷土史研究にも新しい面を迎えた。



名和靖

可児に生まれた。明治十五年岐阜県農学校を卒業して後、中学校・農学校で教鞭をとる傍ら、昆虫採集と標本の作成に没頭した。明治十六年春、郡上郡祖師野で新種の「ギフチョウ」を発見した。明治二十九年教職を辞し

て、岐阜市京町に名和昆虫研究所を創設したが、その後三十七年には岐阜公園内の現在地に移築された。彼の研究の特色は、害虫駆除と益虫保護にあった。機関誌「昆虫世界」に発表した螟虫などの駆除法は、農蚕業にも大きく貢献した。また特に白アリの駆除と予防法の研究は有名で、鉄道のマクラ木の被害予防に尽くした。大正十五年、七十歳で没したが、彼の門下生には、本巢郡木田村（現穂積町）に生まれた関谷俊治がいる。名和昆虫研究所でレンゲの研究を続け、ついに「晩生大レンゲ種」の品種改良に成功し、大いにレンゲ栽培の普及に尽くした。その結果は、レンゲが岐阜県の県花となっていることで知られよう。

昆虫翁名和靖に対して、竹林翁に坪井伊助がいる。揖斐郡本郷村（現池田町）に生まれ、青年時代から村の庄屋をつとめ、大垣藩から苗字帯刀を許された。維新以降も郡内の名望家として、地方自治に貢献すると共に、竹林の改良に着目した。明治十四年には、竹林四ヘクタールを試験地にして、害虫駆除、人工変形、販売方法など



坪井伊助

の一貫した研究を行なった。又熱帯・寒帯の比較研究や各地の竹林を視察して珍種を入手し、その栽培も試みた。大正二年、「竹林造成法」「竹類図譜」を出版し、大正十五年に没した。

また西堀弥市は、明治

実証的な研究方法が郷土史にもとり入れられ、県下でも、史料採訪の動きが高まった。大正元年には、岡村利平らによって「県史編集に関する意見書」が通常県会に提出され、県民の修史事業に対する関心も高まった。

大正十年頃になると、「岐阜県飛騨国大野郡史」など多くの「郡史」が盛んに刊行された。こうした動きの中で生まれた阿部栄之助の「濃飛両国通史」（大正十二年刊行）は、県下の古文書をはじめとする諸史料を十分に駆使すると共に、県外の諸史料も豊富に活用した名著である。飛騨では、岡村利平の校訂によって、長谷川忠崇の「飛州志」や上村曾左衛門の「飛騨国中案内」が出版された。この他に郷土史家としては、林魁一や伊藤信・小川栄一・片野温などがあらわれた。こうした人達の業績の上に立って、昭和四十七年「岐阜県史全二十二巻」が完成した。本稿もその成果、特に「近代」によっていることを特筆しなければならない。

二十一年から杞柳栽培の研究に着手し、糸貫川沿岸の低湿地に植えつけ、美濃特産杞柳の基礎をつくりあげた。羽島郡八剣村の渡辺寛は養蜂業の研究と発展に貢献した。

山県郡保戸島（現関市）に生まれた岡田只治は、明治二十四年各務用水を完工させた功労者であるが、わが国の工法の代表といわれる「岡田式河川改修法」や「岡田式正流護岸法」などを案出した研究実践家でもあった。

不破郡岩手村（現垂井町）の旗本竹中氏の家臣に生まれた神田孝平は、とくに蘭学の研究を深めた。維新政府に登用されてからは、洋学の知識によって諸制度の整備に尽くし、明治二年には、早くも地租改正についての建議をしている。晩年には考古学も研究しているが、文章論への見識が特に深かった。明治十八年、東京学士会院雑誌に「文章ヲ読ム」を発表して注目された。

外科の佐藤三吉と内科の青山胤通は、明治のわが国医学界の双壁といわれた。佐藤三吉は、大垣藩士の家に生まれ、少年時代に野村藤陰の教えを受けた。明治十六年、ベルリン大学で外科学を学び、止血法の權威となった。青山胤通は、東美濃苗木藩士、廃仏毀釈を断行した青山直通の弟である。佐藤三吉とともにベルリン大学へ留学し内科学を学んだ。帰国後は東京帝大医学部教授、内科大学長となり、明治天皇の主治医でもあった。

なおこれらの他にも、磐梯山の噴火や熊本地震の研究をし、明治二十四年の濃尾大震災のとき、余震の心配のないことを断定した関谷清景（安政五〜明治二九）など多くの学者が輩出したのである。

（岐阜県史編集室主任室宣
岐阜県史学会総務委員）

人物を中心とした

文化郷土史

— 静岡県 —

若林 淳 之

一 文化環境の激変

駿河、遠江、伊豆の三国をもって編成された静岡県の近代の展開は、それまでの文化環境の解体と変容という激変のなかから開始されたといっているであろう。

すなわち、駿遠伊三国に配置されていた大名領である沼津藩、小島藩、田中藩、相良藩、掛川藩、横須賀藩、浜松藩などは、大政奉還や戊辰戦争など、幕末・維新の政局の推移のなかで、安房、上総、下総などに転封されることとなったため、長くは二百年余り、短かくても百年内外もつづいた大名やその家臣を中核にして形成されて来た文化社会は解体し、残されたものはかつて大名たちの支配をうけて来た農民たちの間にわずかにその名残りをとどめる、文化社会の残像から近代文化の発展の起点を求めなくてはならないという事となったのである。

もちろん、以上述べたような諸大名の転封した後には、当時日本における最高の水準を示していた徳川家という文化社会の集団が、一時的にせよ駿遠両国に移って来たとはいっても、版籍奉還・廃藩置県といった政治的変革の実現によって、この文化社会を構成していた大部分は、再び東京に回帰し残ったものは、時代の要請に積極的に応えることの出来得ないような部分——例えば漢学——がこの地に残存し、そうした残存部分つまり痕跡と先に述べた農民たちの間にわずかに残る諸大名の形成した文化社会の残像とがあわさっ

て、近代文化の起点をなすという日本の他の地域にあっては全く経験することの出来なかった状況のなから静岡県文化郷土史は始まるのであった。

このような静岡県にみられる文化環境の激変を認識することなしには静岡県の人物を中心とした文化郷土史を考えることはできないものであることをまずその前提として指摘しておこう。

二 近代文化の中の『静岡県』

ここである近代文化を、狭い意味での近代における文学・文芸・芸術などに限定して考えた場合、その発展のなかに『静岡県』は、かなり大きな役割を果たしていた。

富士山をはじめ伊豆半島など、恵まれた自然や風景に恵まれていたり、また日本の東西、換言すれば京都と鎌倉、上方と江戸といった高文化地域の中間にあったから、そこに住み、そこに暮らした多彩な人々の動きなどは、近代文化を創造し、発展させていく上で、しばしばその素材としてとりあげられ、また文化を創造し発展させる思索の場を提供していた。

富士山という日本を代表する山があれば、その美を追求しようとして横山大観・林武などの日本の代表的画家が出現し、静岡県を仕事場としていたし、それを近代的レンズを通して捉えようと岡田紅尚のような写真家もあらわれるのであった。また、新田次郎に代表されるように、富士山頂での気象観測という特異な生活体験が素地と

文学の領域でとらえようとしていたのは山岡荘八であり、また北遠の山合いで日本の近代資本主義の発展に対応し開かれた久根鉦山に働く群像をとらえようとしたのが関宮茂輔の『あらがね』であり、葉山嘉樹の『山谿に生くる人々』でもある。

このように、静岡県にくりひろげられる自然の美しさに、それぞれの分野から追求しようとした人々や、あるいはその自然の懐に抱かれて生まれ、あるいは育ち、暮らした人々の、政治や社会の変動によって強いられれた多彩な人生の遍歴を、多くの作家たちの思索を通して語られるのであるが、それらの多くは日本の近代文化の各領域における、あるものは道標となり、あるものは一里塚となり、さらには記念碑となっていたのであった。

また、静岡県の恵まれた自然などは、これら文化創造の担い手たちに優れた題材を提供していたばかりでなく、時には創作・思索の場をも提供していた。坪内逍遙、尾崎紅葉、幸田露伴、谷崎潤一郎らの熱海での生活であるとか、最近では広津和郎、舟橋聖一をはじめさらには近代短歌の運動に原動力となった佐々木信綱の晩年熱海における生活などもそれであった。

また、丹那トンネルを西に抜けた修善寺、湯ヶ島等いわゆる中伊豆には川端康成、岡本綺堂など、そこでの生活の中で数々の傑作の構想をつくりあげていたし、沼津の若山牧水、一時的であったにせよ静岡における中勘助、蒲原有明などもあげることができるし、変わったところでは焼津を愛して焼津に住み『乙吉の達磨』を書いた小泉八雲など、静岡県に去来する人たちは多彩かつ大量であった。

なって『蒼水』以下の文学作品のつくられていくのはそれである。

いっぽう文化勲章の栄誉を担った川端康成が、伊豆湯ヶ島(湯ヶ島町)は第二の故郷であると呼んだほど、川端は伊豆での生活を好み、文学的思索の場所としながら、名作『伊豆の踊り子』を創作していたし、またこのような伊豆を舞台にして名作を残した人々といえは、尾崎紅葉の『金色夜叉』など、そうした例は数限りはない。

また日本の東西の中間にあって、そこに生きる人間像を描くと言えは、『源頼朝』を素材にした者に吉川英治、幸田露伴、小杉天外、山崎紫紅などが知られるし、伊豆修善寺に悲劇的終焉をした將軍頼家にちなんで書かれた岡本綺堂の『修禪寺物語』伊豆下田を舞台にくりひろげられる開国開港の裏話にかかわる『唐人お吉』にかかわって、真山青果、山本有三、船橋聖一、井上友一郎、就中『唐人お吉』を最初に小説化した十一谷義三郎などの作家の活躍が知られる。

『唐人お吉』の悲話につづき一人の俠客清水次郎長は、その養子天田愚庵が『東海遊俠伝』を発表すると、それを下敷にして村松梢風の『正伝清水の次郎長』が書かれ、それを契機にして清水次郎長の虚像実像のさまざまが、人々の間に浪曲、講談、映画、小説、さらにはテレビと、とめがたいいきおいで広がっていったし、さらには三河の生まれではあるが、浜松・駿府などで長い生活経験をにつづけるなかで、さまざまな政治的試行をくりかえしていた徳川家康を、

このように、日本の近代文化を発展させた多くの担い手たちが、静岡県とかかわるなかで、数々の近代文化を象徴する業績を残しているのであるが、それはたしかに静岡県の文化郷土史の一頁を彩るものではあるが、かといってそれがそのまま静岡県民によって形成された文化郷土史であったのかといえは、そうであったとはいえないものがある。だとすれば、そうした意味での文化郷土史を考えるとすれば、それはどういう事になるであろうか。

三 明治十年代末と二十年代の初頭

旧藩時代において大名たちの城下において成立を見た文化社会も、これら大名の移封によって解体し、そこにはわずかの残像しか見られなかったし、また徳川家を中心とする文化社会がその地に移って来たとはいっても、それもやがて東京にその多くが吸収され、わずかにその痕跡が残ったにしても、それがこの地の近代文化を積極的に形成する原動力になるには十分ではなかった。

もちろん、これらの条件を前提にして旧幕臣の子であった山路愛山(一八六四—一九一七)のようなキリスト教の伝導にあたりながら文明批評や史論を展開した人物の出現もあったが、それはここの風土が育てあげた文明批評でも史論でもなかった。

こうした推移のなかで注目されるのは、明治十年代の末葉から二十年代初頭の動きであった。即ちこの時代における傾向についてみると、オペラ歌手として国際的に知られる三浦環が小笠原浜岡町に生まれたのが明治十七年小説家としても評論家としても有名になっ

た白柳秀湖が、浜名湖北辺に網江町に生まれたのも同年であり、翌明治十八年になると詩人・評論家・医学者として活躍した木下奎太郎（太田正雄）は、湯の町伊東に生まれていた。こえて明治二十年代の初頭の状況についてみると『正伝清水の次郎長』を書いて、大衆文学に新しい分野を開拓した村松梢風が、明治二十二年草深い周智郡飯田村（森町）に出生をしていたし、同二十三年になると法隆寺壁面の模写に力量を発揮、文化勲章も受賞した中村岳陵が開港の騒ぎもおさまり斜陽化した港町伊豆下田に生まれているのであった。

このように三浦環、白柳秀湖、木下奎太郎、村松梢風、中村岳陵らが相ついで出生し、しかも成長するにしたがい、それぞれの分野でいずれも第一人者として活躍するのであるが、いったいこれらの日本の近代文化担い手たちが、明治十年代の末葉から二十年代の初頭になって出生していくのは、どういう意味がこの地方にとってあったのかを考えてみることは重要である。しかもこれらの人々の活躍を契機にしてこれにつづく人々が次々に出現していった事を考えてみるとなおさらである。

このような事実はい、おそらく先にも述べたように静岡県における幕末維新の変動による文化環境の激変の痛手から立ち直るためには、約二十年内外の歳月が必要であったことを示すものであることはもちろん、音楽であるとか、絵画であるとか、さらには評論とか小説といった仕事の価値を、伝統的因習的な状況の濃厚に残る農村的社会においても認めるようになるというのには、二十一年いやそれ以上の歳月が必要であったことを示すものであって、旧藩時代の

文化社会の残像や、徳川家の文化社会の痕跡を下敷きにしつつも、文化発展や形成の基盤を主として農村社会に求めなくてはならなかった静岡県にあっては、文化郷土史の近代化の面目を、明治十年代の末から二十年代の初頭に求めなくてはならないことを三浦、白柳、木下、村松、中村らの出生が物語っているように思うのである。

四 文化郷土史の群像たち

(1) 文学・文芸

明治十七年浜名湖の北細江町に生まれた白柳秀湖（一八八四—一九五〇）は、旗本近藤（井伊谷近藤、金指近藤、花平近藤、大谷近藤、氣賀近藤など五近藤中氣賀近藤）氏の家臣の子に生まれ、上京早稲田大学に学んで、幸徳秋水、堺利彦らの影響をうけ、平民新聞の編集にたずさわり、これらが解散すると、文学に転じて社会主義文学と称する数々の作品を発表、やがて唯物史観の立場から、アカデミズムの歴史学を批判するなどの活躍をしていたが、彼の仕事への軌跡は、同二十二年に生まれた村松梢風にくらべると平坦なものであった。梢風（一八八五—）は百姓の長男に生まれたから、とりわけ家の束縛を強くうけ、上京勉学の中途にもかかわらず父の死により一たんは帰郷、教師などをしてしたが、再度上京永井荷風の影響をうけ、かなり奔放な生活に明けくれ、やがて『正伝清水の次郎長』を発表して大衆作家として不動の地位につくのであるが、それは梢風の書いた次郎長が、これを契機に虚像実像おりまぜて浪曲、講談、映画、小

説、テレビなどに登場、国民の英雄化していったためでもある。

梢風の『正伝清水の次郎長』が書かれるに当たって見逃がしてはならないのは、清水次郎長の養子となり山本五郎ともいった天田愚庵の『東海遊俠伝』（明治十一年刊）が種本にされていたという事であろう。

天田愚庵の『東京遊俠伝』は、彼が奥州平に生まれ、十五歳で成辰戦争に従軍、これが契機で父母に別れてしまい、別れた父母を探して日本中を歩くうち、次郎長宅に食客となり、やがて養子になるという因縁から、次郎長のいいところは書くが、わるいところにはふれていなかったから、梢風の正伝が意味をもって来るわけで、天田のそれを書きなおしながら、さらに森の五郎や石松の事をいれて完成したものであった。

いっぽうこれらの人々と同時代人で、変わり種が木下奎太郎（一八八五—）であった。本名太田正雄といい癩糸状菌の研究で世界的に知られている医学者であったが、湯の町伊東の生まれであったためか文才にも恵まれ詩、小説、戯曲、評論、美術、キリシタン史など多方面に活躍していた森岡外とも師弟関係にあった。

ともあれ木下が医学者であるよりは、文学者として有名であるかに見えるのは岡外の場合と同様であった。

これら、静岡県の新しい文化社会を代表する人々の出現は、それと有形無形の関係をもちつつ、芹沢光治良（一八九七—）、竹山道雄（一九〇三—）、井上靖（一九〇七—）、藤枝静男（一九〇八—）、榛葉英治（一九二二—）、中村真一郎（一九二八—）らが生まれ、さらに若手の作者として吉村昭、小川国夫、吉田知子などに移って来るのであった。

芹沢光治良（本名森次郎）は、沼津市我入道に生まれ、天理教を信ずる父、母、兄弟に別れて育ち、沼津中学、一高、東大とすすみ農商務省に入り役人となったが、貧困とか富とかいう問題を研究したいということでフランスにわたり、途中病気になるスイスで療養生活を送り、帰国して雑誌『改造』の懸賞小説募集に作品『ブルジョア』を投稿、一等入選して、この世界に入り数々の力作を世に送り芸術院賞を受賞していた。

芹沢が学んだ沼津中学は、間もなくここに入学した若者が井上靖であった。父が軍医であったことから北海道旭川に生まれたけれど、父の転勤によって井上も各地に移り歩いてしたが、そのある時から静岡県天城山麓の湯ヶ島の祖母のところで育ち、浜松などに移ったこともあったが十八歳ごろまでは静岡県で暮らしていた。沼津中学を卒業したといっても途中から転校して来て入学したもので、卒業すると金沢、福岡、京都などの学校で学び、毎日新聞社に入り、東京に転ずると間もなく芥川賞をうけてこの世界に入ってしまった。井上に言わせると、伊豆の山村は自分の郷里であることはもちろん、沼津も人間をつくりあげていく上での郷里であったと言っているのは、これらの地域が優れた文学者を育てるにふさわしい風土になっただけを意味するのであろう。

『ビルマの堅琴』を書き、たんたんとした筆の運びの中で、戦争の悲惨さと平和という今日の課題に迫ろうとした竹山道雄は浜松の生まれであり、勝見次郎（一九〇八—）といい生地藤枝の地名をとって藤枝静男という芥川賞候補作家は、本業は医師で浜松に住んでい

る。また直木賞作家櫻葉英治(一九二二)は掛川市に生まれ、この世界に入ったのは戦後のことで、『赤い雪』で直木賞、いまは『怒濤のなかに』『大いなる落日』など幕末維新に視点をあわせて創作にしたがっている。

この間『母子草』で有名になった小糸のぶなどの活躍もあるなかで、やがて戦後派の作家たちが大きく飛躍して来るのであるが、富士市に生まれ、ひとところ戦記物などに新しい境地を開いた吉村昭、あるいはキリスト教の幻影を追って放浪する巡礼者などといわれる小川国夫は藤枝の生まれであり、『無明長夜』で芥川賞を受賞した吉田知子(一九三四)は、浜松に生まれたが父の仕事で浜松から離れて大きくなり、浜松に再び戻って来たのは戦後のことであり、ここで暮らすうちに創作活動に入り、いまま浜松にいます。

こうしてみると、明治十年代の末から二十年代の初頭にみられる文化郷土史上の画期以後、静岡県には日本を代表する多くの作家が育っており、またその育った作家たちも、静岡生まれの東京暮らしというコースから、藤枝静男、小川国夫、吉田知子らのように静岡生まれで静岡暮らしの作家たちが出現しつつあることは、まさに文化郷土史の第二の画期をむかえつつあることを示している。

それは新幹線の開通などによる時間の短縮が、静岡を東京のカサに入れやすくなったためなのか、それとも静岡がそうした人々の居住をさして異としないような理解ある文化社会に変容したためなのか、理由は明らかではないが注目すべきことであった。

文学といってもそれ自身特異の領域である児童文学では小出正吾

当するものといわれる日氏賞の受賞者石原吉郎(伊豆)三木卓(静岡)さらに正岡子規の「紀貫之」論をくつがえた大岡信(三島市)などの今後注目があるであろう。

(2) 音楽

海野厚が『背くらべ』という詩をつくり、それに中山晋平が曲をつけるという関係から、ここで音楽の分野の動きについてみよう。

静岡県における近代における音楽の発展に欠くことのできない問題は、山葉寅楠(一八五二—一九二六)による楽器製造の先覚的開始であった。山葉の仕事は日本ではじめてオルガンを製作したことであるのだが、それが契機となってピアノの製造にも手を染め、日本の音楽文化の発展や音楽教育の質的向上に大きな役割を果たしていた山葉が河合喜三郎らと協力して楽器製造に関係するのは全くの偶然からで、和歌山に生まれ大阪に出て、医療器械や時計修理の技術を身につけていた。そんなところに浜松病院の外国製医療器械の修理をたのまれて来浜、仕事をつづけていたある日、同市元城小学校のアメリカ製ベビーオルガンの修理がたのまれの動機であったのである。いづれにしても山葉らのこうした仕事によって、音楽の普及の著しかった事は事実である。

このような事実とは直接関係はないが、山葉らがオルガン製造に着手しようとした少し前の明治十七年、小笠原朝比奈村(現浜松市)の出身者である。柴田猛甫の長女として生まれたのが三浦環(一八八四—一九四六)であった。東京音楽学校を卒業、明治四十四年帝國劇場専属のプリ

(一八九七)が三島にいる。三島といえはかつての東海道宿駅、宿駅に出入する文人墨客によって古くから文化の栄えたところであり、宿駅を取巻く村々にもその影響は著しかった。祖父、父ともに俳諧の宗匠であったという家系に生まれた穂積忠(一九〇四—一九五五)は、中学二年で北原白秋の門に入り、白秋亡きあとには寂道空に師事して歌集『雪楽』を出して多摩賞、歌人協会賞に輝いていた。また遠く伊豆半島の南端南伊豆に生まれた関澤羽(一九一七—一九五七)は、静岡県における近代俳句の先鋒として活躍していたし、萩原麦草(一九一四—一九六五)は伊豆長岡に生まれた俳人であった。また原田浜人(本名八郎)(一九一四—一九八四)は浜松に生まれ、大正十年に俳誌『ホトギス』の課題句選者となり権威があったばかりでなく、県外の長い教員生活につづき、静岡に戻ると、各地をたずねて数多くの名句を残していた偉材であったし、藤枝に生まれた田中波月(伊市)も優れた句をつくり、人間主義俳句を旗印にしている。また川柳の榎田竹林(本名桂太郎)(一八九八—一九八八)も県川柳協会長として忘れられない人である。

詩人穂積忠の出現にかかわって、沼津に若山牧水が病める身をその自然にいやしながら、創作にはげんだことは有名であるが、鈴木三重吉の『赤い鳥』を読んで感動し、作曲家中山晋平と組んで子供たちの歌をつくった海野厚(一九一五—一九八八)は静岡市に生まれ、文部省唱歌にも指定された『背くらべ』をはじめ「おもちゃのマーチ」は有名であったが病弱な海野は早逝してしまっただけでなく、さらに海野につづく者として長田恒雄(清水市)(一九二五—一九八八)の若杉雄二郎(清水市)草野心平らと『銅鑼』を書いた杉山市五郎、詩壇における芥川賞に相

マドンナとして、日本最初のオペラを上演、その後渡欧して英国ロンドンで「お蝶夫人」を歌って名声を博した柴田が三浦となったのは、掛川市曾我出身の医師三浦政太郎と結婚したからであった。オペラといい、掛川と言えは、伊藤京子(一九三〇—)の存在を忘れてはならない。東京音楽学校を卒業し、第十八回音楽コンクールに一位入賞、以来数々の歌劇に出演したり、演奏会に出演してその名を高めている。

いっぽう音楽文化の発展は、音楽そのものを理解する音楽教育の発達と関係が深く、音楽教育の発展に尽した人々には飯塚操一、栗田国彦、本間彦作らの群像がいた。

(3) 絵画・彫刻・工芸

伊豆下田に生まれた中村岳陵(本名恒吉)(一八九〇—一九六九)は、院展、日展で活躍し、日本画の元老となり『砂丘』などの代表作を残し、法隆寺の壁画を模写して文化勲章や芸術院会員としても栄誉を担っていた。この中村岳陵の生まれたことは、ハリスが下田に総領事館をひらき、それに随行して来た通訳ヒュースチンから写真術を学び、写真の草分けとして有名な下岡蓮枝(一八三三—一九二四)につづく特筆さるべき事であった。

また芸術院会員といえは、いま一人伊豆には木彫の沢田政広(一八九四—)もいた。沢田は熱海に住み、日本彫刻の伝統を守り、木彫のなかにローマン主義的情感をただよわせている貴重な労作を残している。絵画・彫刻の御大所について、染色工芸の芹沢銈介

(一八九五) がいた。国画会会員で柳宗悦の提唱した民芸運動に参加し、静岡に古くから伝わる「型染」を発展させた「型絵染」を創案人間国宝にもなっている。

以上の人々は、美術・彫刻・工芸を代表する業績を残す人々であるが、これらの人々にまじって、静岡県の生まれではないが戦中富士山の見える富士宮市に疎開、富士宮市名誉市民になった曾宮一念(一八九三)がいて、人柄のにじみ出た画風とその生活は、多くの弟子に影響を与えているし、同じく疎開者の一人国画会に属し和紙の研究と和紙の工芸に身をうちこむ後藤清吉郎も富士宮に在るの注目していい。

いっぽう若い美術家、彫刻家、工芸家についてみると絵画には伊東に住み盲目の女旅芸人「ごぜ」の世界に挑む斎藤信一、清水に住む池田正司、月見里シゲル、静岡の中川雄太郎、長岡宏などが、また彫刻には伊豆松崎の堤達夫沼津の和田金剛、静岡に杉本宗一、大村政夫、細谷泰雄浜松の太田儀八などの練達の人々や若山俊秀がいる。それは工芸においても同様であった。こうしたなかにおいて、民芸的な人形師として数崎好光は岡部町に住み、等身大の節句雛十五人揃を製作して雛人形の世界に新風を巻き起こしている。なお、版画の小川重彦、伊藤勉などもユニークな仕事をしている。

このように美術・彫刻・工芸の隆盛は、その基盤を常に耕す事によって可能であった。それは美術・工芸の教育に負うところが大きかった。

こうした美術工芸教育の担い手としては、静岡師範学校、同女子

きな足跡を残しているし、映画俳優には鶴田浩二(浜松市)、富士真奈美(三島市)長山豊子(三島市)などは、よく知られている。

最後に郷土芸能についてみると、伊豆の三番叟、伊豆の鹿島踊り、小稲の虎の舞、妻良の盆踊り、沼田の湯主神楽(御殿)、清沢の神楽(静岡)、徳山の鹿々舞、藤守の田遊び(大井)、遠州森町の舞楽(森)、寺野のひよんどり(引佐)、遠州大念仏と放歌(浜松市)、西浦の田楽(小笠原)などが県の文化財等及び指定をうけている。

これら郷土芸能は、いずれもそれらの地にすむ村人たちによって伝承され、今日にいたっているものであるが、伝承されている地域の大部分は過疎地帯で、伝承者の後継者を探すのに苦心をしているのが現状である。

それと同時に、これら郷土芸能の価値をおしはかるにあたり、芸能の芸術性のみを指向した評価が、果たしてどれほどの意味があるのか反省させられる点が多い。もちろん芸術性の一かけらも見られないものの価値は論外であることはいまでもないが、それよりもそうした芸能に托される人々の願いのようなものを探し求めることこそ重要ではないのだろうか、静岡県の郷土芸能中西浦の田楽は、最も重要なものの一つに数えられているが、天竜川の支流小窪川の上流地帯に残存するこの田楽が、想像をはるかに越えたみやびやさそをそなえ、郷土性というよりは京都的な都会的色彩を濃厚に示している事実は、そうした芸能の装いの中に秘められた真実が探究されなくては所詮その保存や伝承は、近い将来危機的状況に立ちいたるであらうことは明らかである。

師範学校、浜松師範学校(のち静岡大学教)などで美術科教師として、教員養成に生涯を捧げた松田圭三郎、三沢佐助、さらには高木吉武、北野熊雄らの地味な活躍におうところが大きかった。

美術の一つの分野である書道についてみると、徳川家が駿遠に移って来たとき、これに従う士族の一人に伊佐新次郎(一八九一)がいた。彼は書をよくし一説には山岡鉄舟、高橋泥舟、勝海舟らの師匠であったとも伝えられるがさだかでない。しかし、新次郎は晩年牧ノ原周辺の子弟をあつめ本格的な書道教育をしたという。

このような事実と関係は少ないであろうが、沖六郎(一八九五)藤枝に生まれ、成長するにしたがい書道をよくし、静岡県書道連盟の会長として、その振興につとめ、また友井重村も書道教育を通じて力量を発揮していた。

(4) 芸能・演劇

岡本綺堂の「修禪寺物語」は、二世左団次のはまり役として有名になるのであるが、このように静岡県にある素材を取りあげ戯曲化したものには、真山青果の作品、山本有三の「女人哀詞」として発表された唐人お吉の物語を劇化したもので、これには水谷八重子がお吉に紛っていたというし、このほか高倉テルの「箱根用水」も劇化されたり、映画化もされていた。戦中戦後清水市に住んだ島村民蔵は、「切支丹燈籠」などの史劇の構想をねっていた。

映画といえば、「二十四の瞳」、「女の園」などの抒情的名作を残した木下恵介(一九二二)は浜松に生まれ、シナリオに映画の製作に大

結びにかえて

以上、静岡県の近代における人物を中心とした文化郷土史を文字通りの素描をしてみた。

こうしたなかで知られることは、これまでその土地に去来する文人墨客を追って文化郷土史が語られすぎて来たために地域文化発展の画期など人を通じて、または作品を通じて明らかにされて来なかったのが通例であるが、静岡県にあっては近世と近代の変革がきわめて著しかったことが、幸か不幸かその画期を明確にとらえることが可能であったし、さらには静岡生まれの東京住まいの文化荷担者の圧倒的な時代から、静岡県生まれで静岡住まいの文化荷担者の存在が可能になっていく状況など、明らかに新しい画期でもあるが、こうした事実を正しく評価するなかでこそ、それぞれの地域社会における新しい文化の展望も可能になっていくように思われるのである。

ともあれ、新しい地域文化史の方法論の整理と確立のなかで、その理解に当たるときであるが、幸いこの企画がそうした事の契機になれば幸であると考え、若干異なった観点で問題提起風に考えてみた。御叱正をいただければ幸である。

参考資料

(静岡大学教授)

『ふるさとの文学』静岡 文京書房刊・『静岡県人物』名著出版・『静岡年鑑』昭和四十六年版 静岡新聞社刊『静岡市史』近代編『静岡県教育史』上下

人物を中心とした

文化郷土史

—愛知県—

岡田英雄



はじめに

愛知県は古来の尾張と三河をあわせた地域で、肥よくな濃尾平野をひかえ、伊勢湾を抱き、温暖な気候に恵まれ、さらに地形上、東西を結ぶ交通路が集中していることもあって、歴史上に重要な地位を占めてきた。十六世紀の後半には、織田、豊臣、徳川の諸氏があいついでこの地におこり、天下に号令した。

江戸時代に東海道は、江戸と上方を結ぶ最も重要な交通路となり、幕府は尾張に御三家の一を置き、三河には数多くの譜代大名を配した。名古屋・岡崎・吉田（豊橋）などの城下町がしだいに繁栄し、各種の地域産業も盛んとなっていく過程に、学者、文人の往来も多く、特色のある地域の文化が発達した。

尾張藩の藩祖徳川義直の好学の風が継承され、江戸中期以降、名古屋を中心に文献考証の学がおこり、藩学明倫堂が設けられると、独自の学風が生まれた。国学も尾張・三河にはいり、また医学、本草学の伝統は洋学興隆の気運と結びついて、新しい学問の開花期を迎えた。また七代藩主宗春の治世に生まれた「芸どころ」名古屋の文物は、その後隆替はあったが、しだいに武家や町人の生活の中に定着し、諸芸能も幅広い発達をみせた。

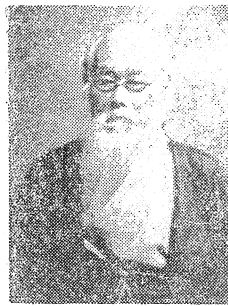
明治五年十一月の愛知・額田両県の合併により、ほぼ現在の県域をもつ愛知県が成立した。そして前代に培われた文化の土壌の上に、新しい時代の息吹がみられるようになった。以下明治以降の文化にかかわりの深い郷土人を、学芸、文芸、美術、芸能などの分野

にわたってとりあげてみたい。

一 開明期の先覚

明治政府は殖産興業政策とともに、国民教育に力をそそいだ。名古屋藩も明治三年に洋学校を開き、外人教師を招いて英仏学を教授させた。明治五年の学制発布の際には、愛知県に第二学区の本部がおかれ、明治七年には名古屋に官立の愛知外国語学校（愛知英語学校）が設けられたが、洋学校や英語学校からは多くの人材が輩出した。この時期に、旧藩時代からの先覚者で文化面に大きな業績を残した人物として、伊藤圭介、柳河春三、田中不二磨の三人をあげる。

わが国最初の理学博士である伊藤圭介（一八〇三～一九〇一）は、名古屋呉服町の医師の家に生まれ、文政三年に十八歳で医を開業し、医学と植物の研究につとめる一方、洋学を修め、文政十年に長崎に赴き、ドイツ人シーボルトに学んだ。文政十二年には「泰西本草名疏」を著して藩に献じ、以後諸種の翻訳や著述を行った。また種痘法を研究し、解剖に



伊 藤 圭 介

立ち合い、薬園を作って研究会を開くなど、多方面に活動した。明治三年に東京に移り、明治七年には多年の努力になる「日本植物図説」を出版、明治十四年に

東京大学教授に任ぜられ、翌年東京植物学会を創立、明治二十一年に理学博士となった。彼は天寿を全うし、明治三十四年に九十九歳で没した。

わが国における新聞雑誌の創始者といわれる柳河春三（一八三二～一八七〇）は、名古屋大和町の生まれで、幼児より奇才の評判が高かった。伊藤圭介宅に寄寓し、蘭学と医学を修め、十歳のとき早くも伊藤の「洋字篇」を校訂し、続いて西洋砲術の書にとりくみ、嘉永三年に「西洋砲術便覧」を著した。彼は安政三年、二十五歳のとき江戸に出て、一時紀州藩に招かれたが、元治元年、幕府に召されて開成所教授職、のち頭取となった。明治二年には新政府のもとで学校制度取調掛に、ついで大学少博士に任ぜられたが、翌年三十九歳の若さで病没した。彼の学問はきわめて広く、交友も宇都宮三郎、福沢諭吉、加藤弘之等、当時の一流人士にわたった。彼は慶応三年十月に『西洋雑誌』を創刊し、翌年二月から『中外新聞』を木活字で刊行した。写真術の紹介などとあわせて、顕著な業績といえよう。

また明治の文教政策をになった田中不二磨（一八四五～一九〇九）は、郷土出身者としては珍しく政治の中枢に参画した人である。彼は名古屋代官町の尾張藩士の家に生まれ、幼児より儒学を学び、二十一歳のとき前藩主徳川慶勝に上書を呈出し、時務策を論じて信任を得た。田宮如雲との交わりが深く、幕末の藩論統一に力があった。新政府のもとで参与、徴士となり、明治四年に文部大丞、明治七年には文部大輔となつて、学制発布とこれに続く文教政策の

実施に大きな役割を果たした。明治十三年に司法卿、明治十七年からイタリイ、フランスの公使を歴任、明治二十三年に枢密顧問官、明治二十四年には司法大臣となった。明治四十二年に六十四歳で病没するまで、彼は和歌を好み、詩作と吟詠を楽しみ、洋書の研究を怠らなかった。

二 学芸の諸家

幕末から明治にかけて、欧米の新しい科学技術を学び、先駆的な業績を残した人物として、「化学」ということばの創始者、宇都宮三郎（一八三四～一九〇二）がある。彼は名古屋流川町の尾張藩士の家に生まれ、明倫堂に学んだが、むしろ武芸・砲術・軍法を好み、上田帯刀から西洋砲術を習った。そして火薬の製造法に関して離合学（化学）の必要をさとした。江戸で蘭学を学び、安政四年に脱藩し、翌年江川太郎左衛門方に同宿中、コロール酸、摩擦管を製造して、英国人を驚かせた。ついで勝麟太郎にさそわれて洋書調所製煉方出役となり、さらに陸海軍取調役となった。明治二年に新政府の開成所に勤め、明治五年に工部省に出仕し、欧米各国を視察、明治七年に輸入防止の建白書を出し、セメント製造試験を行い、また耐火煉瓦の製造に成功、炭酸ソーダの製造にも着手した。明治十年には工部権大技長に任ぜられ、大技長に進み、明治十七年に職を辞したが、明治三十五年に病没するまで技術研究の意欲を失わなかった。

つぎに理工系の学究として、本多光太郎と加藤与五郎をあげる。



鉄鋼の研究で有名な本多光太郎（一八七〇～一九五四）は、碧海郡矢作町（現岡崎市）の農家に生まれ、明治二十二年に上京し、東京帝国大学理科大学に入

学、長岡半太郎の指導を受けた。卒業後磁気の研究を続け、ドイツ留学後、東北帝国大学理科大学教授に任ぜられた。以後昭和十五年に東北帝国大学総長を辞するまで三十年の間に、鉄鋼研究所、金属材料研究所を創設し、多くの金属研究者を育成した。この間K.S.鋼の発明に対して恩賜賞を受け、英国鉄鋼協会からベッセマー賞を贈られ、昭和十二年には第一回の文化勲章を授けられた。

化学工業に対する発明が多く、「日本のエジソン」と称された加藤与五郎（一八七二～一九六七）は碧海郡依佐美村（現刈谷市）に生まれた。明治三十六年に京都帝国大学理工科大学を卒業し、米國留学後、東京高等工業学校教授となった。酸化金属磁石（OP磁石）の発明で世界的な名声を博し、アルミナの新製法を発明し、化学工業の分野で特許約三百件をもち、昭和三十三年に文化功労者に選ばれた。

つぎに人文系の学究をあげると、まず清沢満之（一八六三～一九〇三）がある。彼は名古屋黒門町の尾張藩士の家に生まれ、明治七年に愛知外国語学校に学び、明治十一年、十五歳のときに京都で得

度した。そして本願寺の人材養成機関育英学校に入学、明治十四年に留學生に選ばれて上京し、明治二十年に東京帝国大学文学部を卒業、さらに大学院で宗教哲学を専攻し、真宗大谷派の中学校長となった。明治三十二年に真宗大学の学監となり、明治三十四年に雑誌『精神界』を発刊、「精神主義」を鼓吹したが、明治三十六年に四十歳の若さで三河大浜に病没した。

地理学者として著名な志賀重昂（一八六三～一九二七）は、岡崎藩の重職の家に生まれた。彼は札幌農学校を明治十七年に卒業し、長野県で教員となったが、翌年英国の巨文島占領に際し、対馬に航して状況を視察し、さらに南洋、オーストラリア、ハワイ等を巡歴し、「南洋時事」を著して有名になった。明治二十一年には三宅雄二郎らと政教社をおこし、雑誌『日本人』を創刊、明治二十七年には「日本風景論」を出し、文名はさらに高まった。明治三十年に官途についたが野に下り、のち衆議院議員にも当選した。彼は機会あるごとに内外を周遊し、その見聞を講演、著述として発表し、かわら早稲田大学で地理・歴史を講じた。

また歴史学者に横井時冬（一八五九～一九〇六）がある。彼は尾張藩士の家に生まれ、明倫堂に学び、佐藤牧山から漢学を修めた。明治十七年に上京し、東京専門学校で法律を学び、一方、小中村清矩、栗田寛について国史学を研さんし、明治二十一年に東京高等商業、ついで高等工業の教授を兼ねた。篤学博識で考証に長じ、「日本工業史」「日本商業史」等、多数の著書がある。

国文学の分野で、東京帝国大学教授として、国語研究、国語教

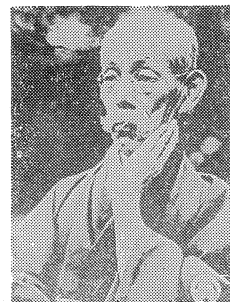
び、さらに愛知英語学校に入学し、東京開成学校に進んだ。また四迷は明治四年から翌年までの短期間、洋学校で仏語を学び、父の転勤に従って松江に行き、十五歳のときに上京し、東京外国語学校露語科に入学した。逍遙は明治十六年に東京大学を卒業、東京専門学校（早稲田）の教師となり、明治十八年に文学論「小説神髓」、小説「当世書生気質」を発表し、写真小説の先駆者となった。このころ四迷は外国語学校を退学、逍遙に力づけられ、翻訳から創作へ転じた。こうして生まれたのが、明治二十年の小説「浮雲」である。

逍遙は明治二十四年に『早稲田文学』を発刊し、シニークスピアを研究してその翻訳につとめ、明治三十八年には文芸協会を設立、明治四十五年には演劇研究所をおこして、新劇運動にもたずさわった。逍遙が七十六歳の生涯に恵まれたのに反して、四迷には起伏が多かった。内閣官報局の雇員、東京外国語学校の教師などを経て朝日新聞社に入社、「平凡」を連載し終わったところで、明治四十一年にロシア特派員として出発し、故国の土をふまずに四十五年の生涯を終えた。

つぎに尾崎紅葉門下の逸材といわれた小栗風葉（一八七五～一九二六）をあげる。彼は知多郡半田町の菓屋に生まれ、菓学を学ぶために十六歳で上京するが、文学への志が強く、紅葉の門に学んだ。当時は紅葉のひきいる硯友社の興隆期で、彼は流行の悲慘小説の波に乗り、文壇に進出した。その地位を不動にしたのは、明治三十九年に読売新聞に連載した「青春」であった。しかし文芸上の悩みも多く、自然主義文学の盛衰はしだいに彼を時流から遠ざけた。「金

育、国語改良を国家の重要文化策として強調した上田萬年（一八六七～一九三七）も尾張藩士の出である。また雑誌『俳味』や『袖珍文庫』を発行し、第一高等学校教授となった沼波瓊音（一八七七～一九二七）は、名古屋玉屋町に代々続いた漢方医の家の出である。なお京都から名古屋に移った国文学者石田元季（一八七七～一九四三）は華頂宮の家士の子に生まれ、平安義塾に学び、明治三十二年、二十三歳のとき愛知一中に赴任した。以後四十余年間、第八高等学校等でも教鞭をとり、謡曲と俳諧の研究に關しては斯界の至宝といわれた。

三 文芸の人々



坪内逍遙

わが国の近代文学史に大きな功績を残した坪内逍遙と二葉亭四迷の二人は、その成長期に名古屋と深いかわりをもった。坪内逍遙（一八五九～一九三五）は美濃国加茂郡太田村（現美濃加茂市）で尾張藩代官手代の家に生まれ、二葉亭四迷（一八六四～一九〇九）は江戸市ケ谷の尾州屋敷で尾張藩士の家に生まれた。そして逍遙は明治二年、十一歳のとき父の致仕にともなって名古屋に移り、四迷は五歳のとき、維新に際して名古屋へ帰った。

逍遙も四迷も名古屋藩の洋学校で学んだ。逍遙はここで英語を学

色夜叉終編」の執筆もその一面を物語っている。また紅葉の門下に碧海郡上郷村（現豊田市）出身の岡本霊華（一八八五～一九二八）がいる。彼は浄土真宗の寺に生まれ、県立二中（岡崎）を中退して明治三十二年に上京、紅葉の門にはいり、明治四十年ごろから文壇に登場した。しかし佐藤紅緑と親交をもち、紅葉の後退とともに、自らも大衆文学作家として立った。

「情熱の文学者」といわれる尾崎士郎（一八九八～一九六四）は、幡豆郡横須賀村（現吉良町）の生まれである。彼の作品にも出る「辰巳屋」は、煙草製造業を営んだ尾崎家の屋号であるが、当時父は三等郵便局長をしていた。彼は県立二中を経て大正五年に早稲田大学予科に進み、上京後間もなく亮文社を訪れ、堺利彦らとの交わりを深めたが、大正八年に亮文社は解散し、彼も本科卒業を前に大学を除籍された。昭和八年、三十六歳のとき『都新聞』に「人生劇場」（青春篇）を連載、一躍して流行作家となった。この作品は「愛慾篇」と続き、昭和三十四年まで八篇が書きつづられた。また昭和十三年の「石田三成」にはじまる一連の歴史小説も、彼の名声を高めた。

ここで異色の創作活動を行った作家群をあげる。まず名古屋に生まれ、東京専門学校を卒業、坪内逍遙を師とした水谷不倒（一八五八～一九四三）は、明治中期から新聞小説に腕をふるった。毎日新聞に連載した「現世相」「菅公実伝」など是有名である。また新聞小説の渡辺霞亭（一八六四～一九二六）がいる。彼ははじめ名古屋で医学を学んだが、十二、三歳ごろから戯作を書き、明治二十年に

上京し、翌年東京朝日について大阪朝日に転じ、同社の西村天囚と筆を競い「硬の西村、軟の渡辺」と称せられた。大阪朝日に「白真弓」を連載して以後、多篇を書き続け、明治四十年から時代物にも筆をぞめた。

つぎに大衆小説に健筆をふるった佐々木味津三（一八九六～一九三四）は、北設楽郡下津具村の商家の生まれで、愛知一中を経て、大正七年に明治大学政経科を卒業、記者を勤めたのち作家生活にはいった。十二年に『文芸春秋』の創刊に参加し、『文芸時代』の同人となったが、経済的事情もあって大衆文学に転じた。「右門捕物帖」「旗本退屈男」を書くに及んで、彼の名声はとみにあがった。

また探偵小説に小酒井不木（一八九〇～一九二九）がいる。彼は海部郡蟹江町の出身で、愛知一中、三高を経て大正三年に東京帝国大学医科大學を卒業し、六年に東北帝国大学助教教授となり、海外留学中に発病、帰朝後は教授の職を返さ、『新青年』に「科学的研究と探偵小説」「毒及毒殺の研究」などを発表、勃興期の探偵文壇に大きな刺激を与えた。また海外の作品の紹介につとめ、「探偵小説育ての親」といわれた。

さらに児童文学者として新美南吉（一九一三～一九四三）がいる。彼は知多郡半田町に生まれ、中学生のころから文学に親しみ、「どんぎつね」などの作品を『赤い鳥』に発表した。昭和七年に東京外国語学校英語部へ入学し、卒業後県立安城高女の教師となり、次々と作品を発表し、昭和十七年に「おじいさんのランプ」を刊行して、童話作家としての地歩を固めた。翌年三十歳に満たないで他

界するが、戦後、彼の作品はあいついで刊行され、高く評価されている。

詩人では野口米次郎と丸山薫がある。野口米次郎（一八七五～一九四七）は海部郡津島町の商家に生まれ、愛知一中を中退して明治二十三年に上京、慶応義塾に入学したが、志賀重昂の家に寄寓中、発意して渡米し、流浪のちウォーキン・ミラーに師事した。シカゴ、ニューヨーク、ロンドンなどに移り住み、三十八年に帰省し、慶応義塾の教授に就任した。大正期にもしばしば渡航し、大正十年の日本語詩集『二重国籍者の詩』をはじめ作品を刊行する一方、浮世絵の研究など日本美術の鑑賞に新生面を開いた。

丸山薫（一八九九～一九七四）は大部分に生まれ、十二歳で官吏の父を失うと、母の郷里の豊橋に帰った。東京帝国大学文学部で国文学を学び、在学中『新思潮』『椎の木』などに作品を発表、昭和八年に堀辰雄、三好達治と詩誌『四季』の編集にあたり、四季派の叙情詩人として中核に立った。昭和二十三年から豊橋に定住し、大学講師を勤め、詩作に専念した。

四 美術の群像

江戸時代以来この地方の絵画には、狩野派、土佐派、四条派、南画および風俗画などの流れがあったが、明治期にはいって、流派的な色分けはしだいに稀薄になった。まず初期の画家として小田切春江（一八一〇～一八八八）をあげる。彼は名古屋南久屋町の尾張藩士の家に生まれ、高力種信に実景写生を学び、さらに森高雅に学

んで浮世絵風の風俗画に巧みであった。尾張の民俗、名勝をえがいた「尾張名所図会」をはじめ、「名陽見聞図会」その他多くの挿絵を残している。

つぎに中央画壇とつながりのあった川崎千虎と山本梅荘がある。

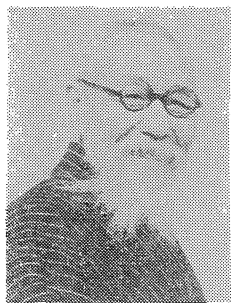
川崎千虎（一八三六～一九〇二）は名古屋紙漉町の尾張藩士の家に生まれ、はじめ沼田月斎に風俗画を学び、のち京都に出て土佐光友の門にはいり、有職故実も研究した。明治十一年に上京して宮内省属となり、帝室博物館に勤めた。歴史画の第一人者といわれ、東宮御殿の襖絵の御用も命ぜられた。三十年には東京美術学校教授となったが、岡倉天心に従って去り、三十四年に郷里へ帰った。また山本梅荘（一八四六～一九二一）は碧海郡新川に生まれ、書画を商う半田の養父のもとで独習したが、のち京都に出て貫名海屋らに師事した。彼はさらに元明清の絵画を学び、南宋山水画では右に出るものがなかった。大正三年には地元画壇で最初の文展委員となり、五年に審査員となった。

なお文化勲章の受章者である川合玉堂（一八七三～一九五七）は、葉栗郡外割田村（現木曾川町）の出身で、京都に出て幸野煤嶺に師事し、のち東京に移って橋本雅邦に学び、狩野派に四条派の画風を加味し、写生を基礎として風景画に独自の領域を開拓した。彼は文展審査員として官展に活躍し、東京美術学校教授、芸術院会員となった。

洋画の普及は、明治の新学制のもとで美術教育が行われるようになってからであるが、この地方の草分けは野崎華年と鈴木不知であ

る。野崎華年（一八六二～一九三六）は尾張藩の重臣の家に生まれ、河野中華に手ほどきを受け、明治十六年に上京し、殿木勝吉と英人オークマンに学んで帰郷し、三十年に名古屋最初の美術グループである明美会を結成した。さらに三十六年には京都の浅井忠に洋画と図案を学んだ。彼は水彩画を得意とし、東海美術協会の設立にも寄与した。一方、鈴木不知（一八七〇～一九三〇）は愛知郡日置村（現名古屋市）の尾張藩士の家に生まれ、小山正太郎の不同舎にはいって洋画を学び、明治三十三年に帰郷して門前町に洋画塾有斐社を開き、翌年には白墨会を設立して多くの弟子を育てた。彼も東海美術協会の設立に加わり、大正期には真光社を設立した。

また加藤静児（一八八七～一九四二）は海部郡十四山村の生まれで、津島中学を経て東京美術学校に学び、明治四十年の第一回文展に入選以来、連続して賞を受け名声を得た。大正九年にフランスに渡り、十二年に光風会会員となった。また八年に東京で太田三郎、川崎千虎らと愛知社を結成し、翌年から名古屋で展覧会を開き、後進の育成につくした。



藤井達吉

つぎに絵画・彫刻・陶芸・七宝・金工など美術工芸の各般に通じ、「昭和の本阿弥」といわれた藤井達吉（一八八一～一九六四）をあげる。彼は碧海郡柳尾村（現碧南市）に生まれ、

十七歳のとき名古屋の服部七宝店に勤め、明治三十八年に上京、美術工芸の道をきわめた。四十四年に工芸研究団体音楽会の同人に迎えられ、大正元年には国民美術協会の創立に加わり、八年に装飾美術協会に参加した。また七年から官展に工芸を入れる運動をはじめ、昭和二年の第八回帝展から第四部として美術工芸部が設けられたが、彼は在野の巨匠として各地を遍歴し、伝統的な工芸の育成と総合美術に力をささげた。郷土産業と工芸を結びつけ、瀬戸の陶芸や小原村の和紙工芸に対しても指導を惜しまなかった。

この地方の書道の歴史は長い、明治初年の書道界では恒川岩谷と杉本蘭泉が著名であった。恒川岩谷（一八二九～一九〇七）は名古屋日出町に生まれ、はじめ柳沢維賢に学び、のち京都清水寺の維明和尚につき、さらに古碑法帖をきわめた。十七歳より私塾を開き、開塾六十年、門下生は二万余人といわれた。岩谷の弟子に大島君川（一八六三～一九四三）がいる。彼は幼少より岩谷の門にはいり、師を助けて教授し、県庁の文書課長、秘書課長を歴任した。大正二年に退官後、水主町の自宅に塾を開き、門下生は万以上に及んだ。晩年は中部日本書道連盟の会長となり、書道界に貢献した。

また杉本蘭泉（一八〇五～一八七二）は名古屋柳町の尾張藩士の出で、鈴木殿に学び、書を丹羽盤桓子に学んだ。「尾張志」六十巻の稿本の浄書で知られ、門人は三千人に及んだ。また岩谷と門弟を二分したといわれる福岡敬堂（一八四一～一九二一）も尾張藩士の出で、幕臣飯田一無について世尊寺流の書を習い、名古屋日置で書を教えた。

能界の振興につとめた。こうして明治十六年に新守座で開いた「西川鯉三郎門人舞踊会」は大当たりとなった。鯉三郎の振付けは数多いが、西川流秘曲といわれるものに、長唄「道成寺」「勧進帳」などの五番がある。

つぎに女義太夫の名人といわれた豊竹呂昇（一八七四～一九三〇）がいる。呂昇は名古屋上宿の元尾張藩士の家に生まれ、浪越太夫の門に入り、明治二十五年、十八歳のとき大阪で豊竹呂太夫の教えを受けた。苦しい修業を重ね、顧みられなかった女義太夫の改革に努力した。三十一年に上京、満都の人氣を集め、有楽座の名人会には、つねに花形として登場し、大正十二年の引退まで、その美声と節まわしが宣伝された。

また不世出の箏曲家といわれる吉沢馨（一八〇八～一八七二）は、海東郡日置村（現海部郡佐屋町）の浄土真宗の寺に生まれ、名古屋に出て中村検校に箏曲を習った。天保二年、二十四歳のとき京都で生田流の名手藤田検校に学び、三十一歳で検校職を得た。彼は従来の箏曲の基礎の上に雅楽の手法をとり入れ、平曲調を加味して融合し、名曲「千鳥の曲」をはじめ、古今和歌集の歌を作曲した「古今組」などは、前人未踏の高雅な新曲とたたえられた。また明治の邦楽界に名をなした小松景和（一八四七～一九一五）は吉沢検校と同郷で、名古屋でその門に入り、長じて雅楽や和歌を学び、検校となって国風音楽の普及につくした。

名古屋地方はまた「茶どころ」として、江戸中期以来の長い伝統をもっている。幕末から明治にかけて茶道の指導的地位にあったのは、吉田昭和と松尾宗見である。吉田昭和（一八一四～一八九四）

五 芸能の諸流

名古屋の芸能界は明治にはいつ、しだいに活気をとりもどした。地役者の第一人者といわれる中山喜楽（一八三四～一九〇七）が、大阪の尾上松寿のもとで修業して名古屋へ帰り、活躍しだしたのもこのころである、彼の屋号は「淡路屋」といい、明治七年には中山喜楽座を結成し、新守座、橋座、末広座を本拠とした。七代目沢村訥子（一八六〇～一九二六）と七代目市川中車（一八六〇～一九三六）は、年少時名古屋で喜楽に弟子入りして教えを受けた。また宮（熱田）に生まれ、名古屋の養家に育ち、大阪で修業して一家をなした中村宗十郎（一八三五～一八八九）がいる。彼は一度廃業



西川鯉三郎
日本舞踊の名古屋
に帰し、翌年新富座で
「忠臣蔵」を力演し
て以来、名優「末広
屋」の名をほしいま
まにした。

西川流は、初代西川鯉三郎（一八二四～一八九九）によって開かれた。彼は江戸に生まれ、四代目西川扇蔵に入門して舞踊に精進し、若くして西川仁蔵を名のった。天保十二年、十八歳のときに名古屋へ移り、芝居の道にはいり、弘化二年、舞踊家西川鯉三郎として立ち、激しい世の変転の中で、芸子芝居や西川座の組織をはかり、芸

は名古屋の商家に生まれ、十五歳のとき京都に出て表千家の堀内不識齋のもとで修業し、名古屋へ帰って伏見町に居をかまえ、茶道を広めた。彼は茶席や茶庭の考案にもすぐれ、門下は武家、町人を含め二千人以上といわれた。また松尾宗見（一八六六～一九一七）は七代目宗五の長男に生まれ、明治十一年、十三歳のときに京都大徳寺内に預けられた。故あって還俗し、九代目家元となり、名古屋を本拠に大阪・京都・東京と手広く茶道の振興につとめた。

なお京都から名古屋へ移り、志野流香道を伝えた十五代家元蜂谷宗意（一八〇三～一八八一）をあげる。宗意の門人は公家、武家、町人など広範にわたり、東は江戸から西は九州、四国に及んだ。彼は一時眼科医を開業しながら香道の技法を伝え、志野流発展の基礎を築いた。

おわりに

従来愛知県は、文化的に後進地域といわれてきた。それはこの地方が長く東西文化の通過する地域であり、東西文化が根をおろさなかったことを意味する。またこの稿でも明らかのように、明治以降、郷土出身のすぐれた人物の多くが中央へ出て活躍し、その文化的業績の郷土に定着することが少なかったためとも考えられる。

戦後になって、この地方の文化的な基盤はしだいに醸成せられ、文化施設もかなり充実し、各種文化団体の活動も盛んになってきた。また県下の大学（短大を含む）も六十二をぞえ、東京都、大阪府について都道府県中第三位を占めている。私たちは特色のある歴史的環境の中で育てられ維持されてきた郷土文化が、新しい内容を盛って開花することを期待している。（愛知県文化会館図書部長）